

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第228集

宮崎市所在

みや が さこ

宮ヶ迫遺跡

主要地方道宮崎高鍋線（那珂工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

宮崎県埋蔵文化財センター

巻頭図版 1



宮ヶ迫遺跡 西から

巻頭図版 2



宮ヶ迫遺跡 南から

卷頭圖版 3



35号溝状遺構 遺物出土状況

卷頭圖版 4



35号溝状遺構出土遺物

例 言

- 1 本書は主要地方道宮崎高鍋線（那珂工区）道路新設工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎市佐土原町上田島宮ヶ迫・松木田に所在する宮ヶ迫遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成22年8月2日から同年11月12日まで実施した。現地調査は77日間である。
- 4 現地での実測等の記録は、山田洋一郎及び竹田享志・吉本正典・和田理啓・柳田晴子が作成した。
- 5 整理作業における図面作成・遺物実測及びトレースは山田・吉本が担当し、整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。遺物写真については、当センター二宮満夫の協力を得た。
- 6 空中写真撮影は株式会社ふじた、自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
- 7 本書で使用した第1図「宮ヶ迫遺跡と周辺の遺跡」は、国土地理院発行の5万分の1図『斐』（平成13年4月1日作成）をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいて表記を行った。
- 9 本書で使用した方位は座標北を示し、標高は海拔絶対高である。また全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。
- 10 本書の執筆は、第1章第1節は東憲章、第4章第2節は吉本が行い、第3章の自然化学分析結果については、委託による成果報告をもとに若干の体裁の変更を加えて掲載した。以上の他の執筆及び編集は山田が行った。
- 11 石材の分類は、当センター松田清孝の協力を得て山田が行った。
- 12 出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃よりご理解いただき厚く御礼申し上げます。

本書は宮崎県教育委員会が実施した、主要地方道宮崎高鍋線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

報告いたします宮ヶ迫遺跡では、古墳時代後期から古代にかけての遺構が確認されました。中でも、総柱の掘立柱建物や土器焼成土坑、縦横に走る溝状遺構などは特筆されるもので、隣接地での調査成果とあわせて工房的な性格を併せ持つ当集落の性格を物語っています。また土器や耳環など往時の人々が遺した遺物から生活の営みを垣間見ることができました。これらは、今回の調査の大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

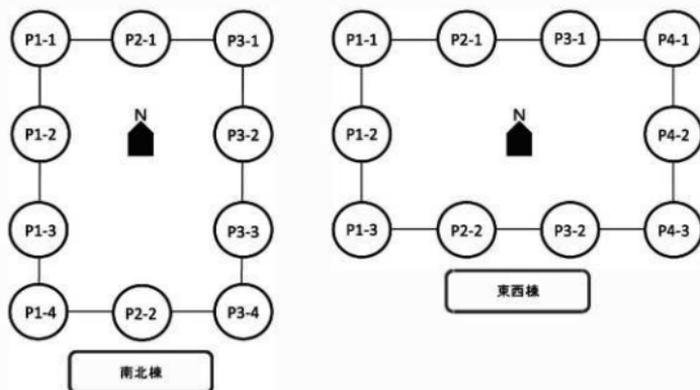
なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々々に心より謝意を表します。

平成25年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 北郷 泰道

凡例

- 1 掘立柱建物の柱穴の表記は下記による。



- 2 土器（土師器・須恵器）、陶磁器、石器の実測図については日本考古学の通例に従って表示した。
土器と陶磁器については下記の通り断面の塗り分けにより種別を明示している。



本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と環境	2
第Ⅱ章	調査の成果	
第1節	調査区の設定と概要	6
第2節	層序	6
第3節	古墳時代後期～古代の遺構と遺物	
(1)	竪穴建物	12
(2)	掘立柱建物・柵列	15
(3)	土坑	26
(4)	溝類似土坑	35
(5)	溝状遺構	35
(6)	小穴出土遺物と遺構外の出土遺物	70
第4節	中近世の遺構と遺物	73
(1)	掘立柱建物	73
(2)	溝状遺構	73
(3)	遺構外の出土遺物	73
第Ⅲ章	自然科学分析の結果	
(1)	宮ヶ迫遺跡における放射性炭素年代測定	81
(2)	宮ヶ迫遺跡における樹種同定	83
第Ⅳ章	総括	
第1節	はじめにー遺跡の概要ー	85
第2節	遺跡の年代と変遷について	85
(1)	掘立柱建物A群と35号・5号溝ーⅠ期遺構群ー	85
(2)	掘立柱建物B群と24号溝ーⅡ期遺構群ー	86
(3)	掘立柱建物C群と2号北溝ーⅢ期遺構群ー	86
(4)	中世	86
第3節	土器焼成土坑と粘土貯蔵土坑について	88
第4節	近隣の遺跡との比較	88

挿 図 目 次

第 I 章 はじめに

第 1 図 遺跡の位置	S = 1 / 50,000	3
第 2 図 遺跡周辺の地形	S = 1 / 2,000	4
第 3 図 グリッドの配置と隣接調査区との関係	S = 1 / 600	5

第 II 章 調査の成果

第 4 図 遺構の分布①	S = 1 / 200	7~8
第 5 図 遺構の分布②	S = 1 / 200	9~10
第 6 図 土層断面図	S = 1 / 40	11
第 7 図 28号竪穴建物	S = 1 / 60	12
第 8 図 88号竪穴建物	S = 1 / 60	13
第 9 図 88号竪穴建物出土遺物	S = 1 / 3	13
第 10 図 44号竪穴建物	S = 1 / 60	14
第 11 図 44号竪穴建物出土遺物	S = 1 / 3	14
第 12 図 2号掘立柱建物	S = 1 / 60	16
第 13 図 2号掘立柱建物出土遺物	S = 1 / 3	16
第 14 図 3号掘立柱建物	S = 1 / 60	17
第 15 図 3号掘立柱建物出土遺物	S = 1 / 3	17
第 16 図 6号掘立柱建物	S = 1 / 60	18
第 17 図 9号掘立柱建物	S = 1 / 60	18
第 18 図 10号掘立柱建物	S = 1 / 60	19
第 19 図 11号掘立柱建物	S = 1 / 60	19
第 20 図 12号掘立柱建物	S = 1 / 60	20
第 21 図 12号掘立柱建物出土遺物	S = 1 / 3	20
第 22 図 1号掘立柱建物	S = 1 / 60	21
第 23 図 4号掘立柱建物	S = 1 / 60	22
第 24 図 8号掘立柱建物	S = 1 / 60	23
第 25 図 5号掘立柱建物・付帯柵列	S = 1 / 60	24
第 26 図 5号掘立柱建物出土遺物	S = 1 / 3	24
第 27 図 21号土坑	S = 1 / 60	25
第 28 図 21号土坑出土遺物①	S = 1 / 3	27
第 29 図 21号土坑出土遺物②	S = 1 / 3	28
第 30 図 163号土坑	S = 1 / 60	30
第 31 図 163号土坑出土遺物	S = 1 / 3	30
第 32 図 164号土坑出土遺物	S = 1 / 3	30

第33図	165号土坑 S = 1 / 60	31
第34図	165号土坑出土遺物 S = 1 / 3	31
第35図	7号土坑 S = 1 / 20	32
第36図	7号土坑出土遺物 S = 1 / 3	32
第37図	217号土坑ほか S = 1 / 20	33
第38図	10号土坑ほか S = 1 / 20	34
第39図	溝類似土坑ほか S = 1 / 40	36
第40図	35号溝ほか S = 1 / 80	37
第41図	35号溝出土遺物① S = 1 / 3	38
第42図	35号溝出土遺物② S = 1 / 3	39
第43図	35号溝出土遺物③ S = 1 / 3	40
第44図	35号溝出土遺物④ S = 1 / 3	42
第45図	35号溝出土遺物⑤ S = 1 / 3	43
第46図	35号溝出土遺物⑥ S = 1 / 3	44
第47図	35号溝出土遺物⑦ S = 1 / 3	45
第48図	35号溝出土遺物⑧ S = 1 / 3	46
第49図	35号溝出土遺物⑨ S = 1 / 3	47
第50図	35号溝出土遺物⑩ S = 1 / 3	48
第51図	35号溝出土遺物⑪ S = 1 / 3	49
第52図	35号溝出土遺物⑫ S = 1 / 3	50
第53図	35号溝出土遺物⑬ S = 1 / 3	51
第54図	35号溝出土遺物⑭ S = 1 / 3	52
第55図	5号溝・5号溝出土遺物 S = 1 / 3	55
第56図	2号溝・24号溝・25号溝主要部 S = 1 / 80	56
第57図	24号溝出土遺物 S = 1 / 3	57
第58図	25号溝出土遺物① S = 1 / 3	57
第59図	25号溝出土遺物② S = 1 / 3	58
第60図	2号溝出土遺物① S = 1 / 3	60
第61図	2号溝出土遺物② S = 1 / 3	61
第62図	2号溝出土遺物③ S = 1 / 3	62
第63図	9号溝出土遺物 S = 1 / 3	62
第64図	20号溝出土遺物 S = 1 / 3	62
第65図	22号溝出土遺物 S = 1 / 3	63
第66図	67号溝主要部 S = 1 / 80	64
第67図	67号溝出土遺物 S = 1 / 3	64
第68図	30号溝出土遺物① S = 1 / 3	65

第69図	30号溝出土遺物② S = 1 / 4	66
第70図	30号溝出土遺物③ S = 1 / 4	67
第71図	33号溝ほか溝状遺構出土遺物 S = 1 / 3	67
第72図	小穴出土遺物 S = 1 / 3	67
第73図	包含層その他出土遺物① S = 1 / 3	68
第74図	包含層その他出土遺物② S = 1 / 3	69
第75図	7号掘立柱建物 S = 1 / 60	71
第76図	中世の遺構内出土遺物 S = 1 / 3	71
第77図	中世の遺構外出土遺物 S = 1 / 3	71
第78図	中近世の出土遺物 S = 1 / 3	72
第79図	出土石器 S = 1 / 3	72
第Ⅲ章 自然科学分析の結果		
第80図	暦年較正結果	84
第81図	宮ヶ迫遺跡の木材	84
第Ⅳ章 総括		
第82図	遺跡群の変遷 S = 1 / 600	87

挿図・付表目次

第1表	宮ヶ迫遺跡土器観察表	74
第2表	宮ヶ迫遺跡石器・韃観察表	80
第3表	測定資料の詳細と放射性炭素年代測定法	81
第4表	加速器質量分析法 (AMS) 結果	81

図版目次

巻頭図版1	宮ヶ迫遺跡 西から	
巻頭図版2	宮ヶ迫遺跡 南から	
巻頭図版3	35号溝状遺構 遺物出土状況	
巻頭図版4	35号溝状遺構出土遺物	
図版1	宮ヶ迫遺跡全景・88号竪穴建物	89
図版2	21号土坑・21号土坑遺物出土状況	90
図版3	7号土坑完掘状況・4号掘立柱建物 (P 2-3) 南から	91
図版4	2号掘立柱建物 (P 1-2) 東から・35号溝-14・15 南東から	92

図版 5	35号溝-6・7 東から・35号溝-2・3・4 東から……………	93
図版 6	35号溝-5 東から・35号溝-10・11 東から……………	94
図版 7	35号溝-14・15 北東から・35号溝-14・15 東(1)から……………	95
図版 8	35号溝-14・15 東(2)から・35号溝-8・9 東から……………	96
図版 9	30号溝遺物 E 2 付近・23号セクション E 10……………	97
図版 10	2号掘立柱建物・4号掘立柱建物……………	98
図版 11	9号掘立柱建物・10号土坑他……………	99
図版 12	21号土坑土層・25号溝……………	100
図版 13	25号溝出土遺物・125号土坑……………	101
図版 14	88号竪穴建物出土遺物・44号竪穴建物出土遺物・2・3・5・12号掘立柱建物出土遺物・21号土坑出土遺物(1)・21号土坑出土遺物(2)……………	103
図版 15	21号土坑出土遺物(3)・21号土坑出土遺物(4)・165号土坑出土遺物・7号・163号・164号土坑・176号溝類似土坑出土遺物……………	104
図版 16	35号溝出土遺物(1)……………	105
図版 17	35号溝出土遺物(2)……………	106
図版 18	35号溝出土遺物(3)……………	107
図版 19	35号溝出土遺物(4)……………	108
図版 20	35号溝出土遺物(5)……………	109
図版 21	35号溝出土遺物(6)……………	110
図版 22	35号溝出土遺物(7)……………	111
図版 23	35号溝出土遺物(8)……………	112
図版 24	35号溝出土遺物(9)・35号溝出土遺物(10)・35号溝出土遺物(11)・5号溝出土遺物・24号溝出土遺物・25号溝出土遺物(1)……………	113
図版 25	25号溝出土遺物(2)……………	114
図版 26	2号溝出土遺物(1)……………	115
図版 27	2号溝出土遺物(2)……………	116
図版 28	9号溝出土遺物(2)・22号溝出土遺物(1)・20・67号溝出土遺物……………	117
図版 29	67号溝出土遺物・30号溝出土遺物(1)・30号溝出土遺物(2)……………	118
図版 30	30号溝出土遺物(3)・22号溝出土遺物(2)・33号溝ほか出土遺物・小穴出土遺物・包含層その他出土遺物(1)……………	119
図版 31	包含層その他出土遺物(2)・包含層その他出土遺物(3)・包含層その他出土遺物(4)・包含層その他出土遺物(5)……………	120
図版 32	中世の遺構内出土遺物・中近世の出土遺物・出土石器・出土羽口(鏃)……………	121

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県教育庁文化財課が実施した平成22年度の開発事業調査で、県土整備部道路建設課より宮崎土木事務所が所管する「主要地方道宮崎高鍋線(那珂工区)」事業の回答があった。開発予定地には「周知の埋蔵文化財包蔵地」が含まれており、埋蔵文化財の取り扱い協議が必要ことから、文化財課では平成22年3月に確認調査を実施した。その結果、溝状遺構や土師器片が確認されたため、宮崎土木事務所と遺跡の取り扱いについて協議を進めた。平成22年3月、宮崎土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査通知が提出され、これに対し宮崎県教育委員会教育長が宮ヶ迫遺跡の発掘調査が必要である旨を回答し、記録保存の措置を講ずることになった。

第2節 調査の組織

宮ヶ迫遺跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は下記の体制で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

所長 森 隆茂（平成22～23年度）

北郷 泰道（平成24年度）

副所長 北郷 泰道（平成22～23年度）

佐々木真司（平成24年度）

〔庶務担当〕

総務課長 矢野 雅紀（平成22年度）

坂上 恒俊（平成23～24年度）

総務担当リーダー 副主幹 長友由美子（平成22～23年度）

副主幹 高園 寿恵（平成24年度）

〔調査・報告書担当〕

調査第二課長 永友 良典（平成22～24年度）

調査第三担当リーダー 副主幹 吉本 正典（平成22～24年度）

調査第三担当 主査 山田洋一郎（平成22～24年度）

主査 和田 理啓（平成22年度）

調査第一担当 主査 竹田 享志（平成22年度）

主任主事 柳田 晴子（平成22年度）

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当 主査 東 憲章（平成22～24年度）

調査協力：宮崎市教育委員会文化財課

第3節 遺跡の位置と環境

本遺跡は宮崎市佐土原町上田島字宮ヶ迫・松木田に位置する。合併前の2005年までは宮崎郡佐土原町であり、佐土原町は城下町であった旧佐土原町と海岸部の旧広瀬町が合併して成立した人口約3万人の町であった。

東は日向灘に面し、北は一ツ瀬川が東へ流れる。気候は一年を通して温暖多雨である。西は西都市へと続く丘陵が広がり、南は台地と底地に囲まれる。海側から広瀬海岸低地、佐土原丘陵、一ツ瀬川低地、那珂低地、年居台地、船野台地、都於郡・仲間原台地へと続き地形は変化に富んでいる。地層は鬼界アカホヤ火山灰などの広域テフラや霧島連山を起源とする火山灰が広い範囲にわたって堆積している点が特徴的である。いわゆる日向ロームの堆積物は、低地から丘陵・台地へと段丘面が高くなるほど古い堆積物が風雨に流されずに残っている。近年は旧石器時代・縄文時代の火山灰だけでなく、中世の新燃岳ラピリ層（18世紀）・文明軽石層（15世紀後半）・高原スコリア（12世紀）が主に低地で確認されている。

海岸部には砂丘列(丘)が幾列にも分かれていて南北方向に伸びている。海岸線に近いものが新しく、陸地へ入るに従って古い時期に形成された砂丘列となる。一ツ瀬川南岸の低地は、河川の氾濫原に相当する。

宮ヶ迫遺跡は、佐土原丘陵の山裾から一ツ瀬川低地にかけて広がる。北側に一ツ瀬川が流れ、古代からの物資の輸送ルートを成しており、北西にある佐土原丘陵の尾根上や山麓は、日向国府から海岸部に通じる陸上交通路であったと推定されている。西には大光寺を中心として吉祥寺・原晶寺など多くの寺院が点在しており、結節点であった当地は周辺の支配と防御の中心的役割を果たしていた。中世には佐土原城が築かれ、西都市の都於郡城跡と共に、宮崎平野の統治の拠点として機能し、下って近世佐土原藩（佐土原島津氏）の居城となった。大光寺付近には、国府機能の一部が移転したとの見解も示されている。

関連する周辺の遺跡では、鹿野田・上田島丘陵の北端及びその裾に立地する平田迫遺跡で7世紀前半の横穴が確認されている点が注目される。平田迫遺跡ではそのほか、中世墓・見張台跡や古代の畠跡等が検出されている。また土器田横穴では、7世紀前半に属する7基の横穴が検出されている。線刻描画を有する横穴も確認された。

下村窯跡群では7基の古代の窯跡が検出され、8世紀から9世紀にかけての古瓦・須臾器が出土している。その他、叶迫遺跡・堂ヶ迫遺跡、河原田遺跡、隠山遺跡の各遺跡で古代の遺物が出土している。

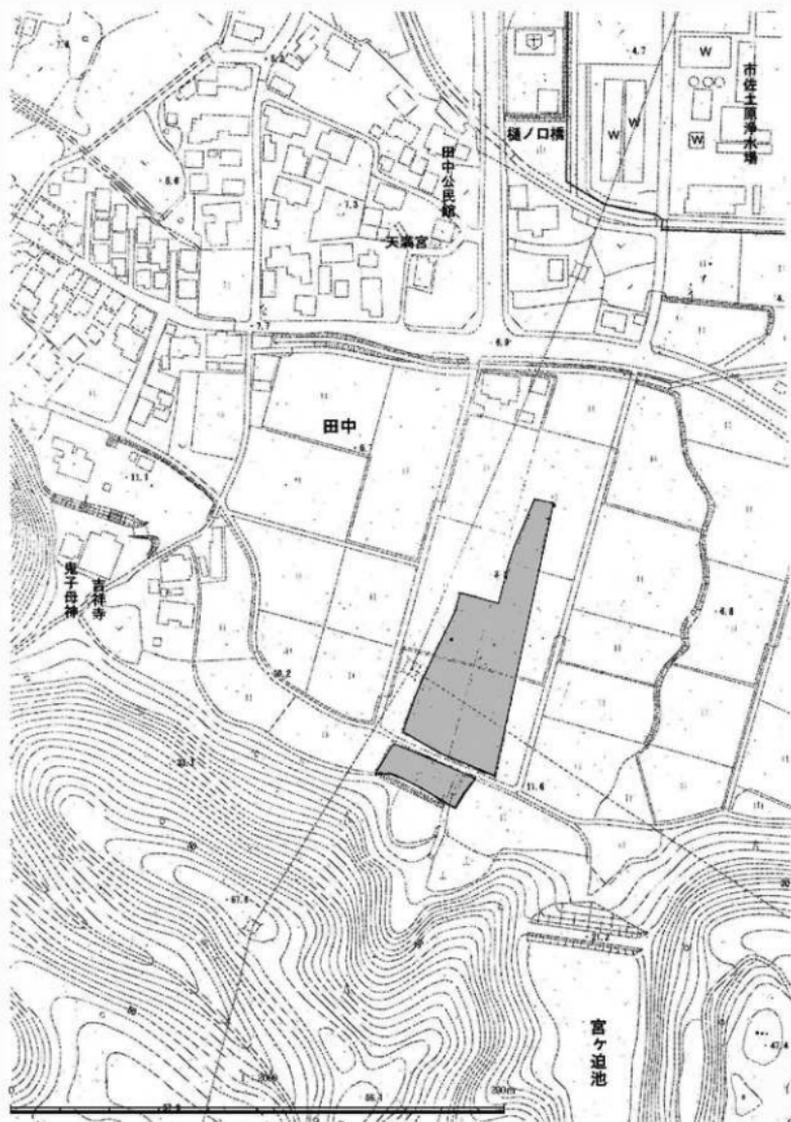
[文献]

- 1 佐土原町教育委員会 1994 『宮ヶ迫遺跡・古城第1遺跡報告書』(佐土原町文化財調査報告書第9集)
- 2 佐土原町教育委員会 1996 『下村窯跡報告書』(佐土原町文化財報告書第10集)
- 3 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『宮ノ東遺跡』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第173集)
- 4 宮崎県教育委員会 2001 『寺崎遺跡』(国術跡保存整備基礎調査報告書)
- 5 宮崎県埋蔵文化財センター 2000 『平田迫遺跡』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第29集)
- 6 佐土原町教育委員会 1982 『土器田西横穴墓群』(佐土原町文化財調査報告書第2集)

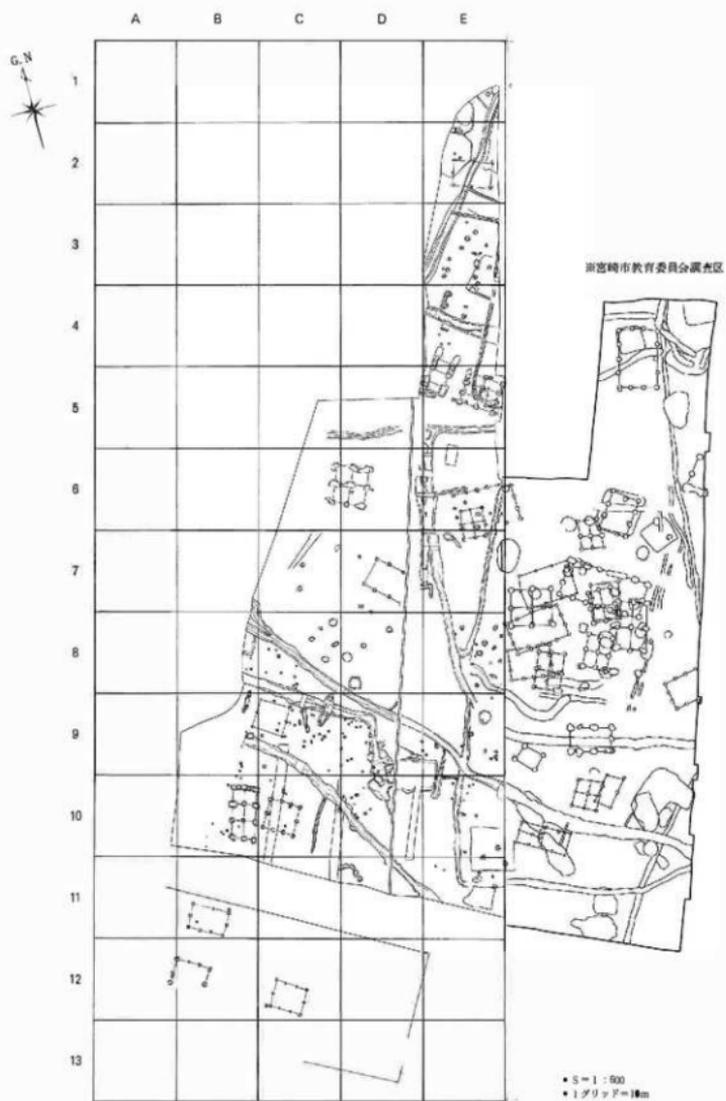


- 1 宮ヶ迫遺跡 2 下村窯跡 3 祇園原古墳群 4 宮ノ東遺跡 5 山之坊古墳群
 6 平田迫遺跡 7 土器田横穴古墳 8 佐土原城跡

第1図 遺跡の位置 S=1/50,000



第2図 遺跡周辺の地形



第3図 グリッドの配置と隣接調査区との位置関係

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査区の設定と概要

調査は平成22年5月24日より重機を用いた表土除去によって開始したが、平成22年度の口蹄疫の災禍による影響で、当地域が家畜の移動制限区域に入ったことから調査を一時中断した。その後、平成22年7月21日より再開し、平成22年11月12日まで実施した。調査実日数は77日である。低地で水はげが悪いため、雨天後は排水に時間を要した。調査面積は2,500㎡である。

調査区は工事によって影響を受ける範囲の中で遺構の残存している部分に設定した。調査に際しての地区表示の基準となるグリッドは、建設予定の道路の中心杭・幅杭に合わせて軸線を定め、1区画10mで設定し、東西方向にアルファベット（A・B・・・）、北から南に算用数字（1・2・・・）を配した。従って第3図のグリッドは国土座標に整合するものではなく、軸の方位は北から約13°西に振れている。

調査区の東側に隣接して、宮崎市教育委員会がほぼ同時期に調査を実施した調査箇所がある。6～10区では実質的に一続きの調査区区となり、溝などの遺構が連続して検出されている。

調査の結果検出された遺構は、古墳時代後期～古代の竪穴建物跡3軒、掘立柱建物跡12棟、土坑14基、溝状遺構14条などである。凡例にも掲げたとおり、竪穴建物にS A、掘立柱建物にS B、土坑にS C、溝にS Eの略号を冠した。また溝に類似する細長い土坑をS Z、単独の小穴をS Hとした。番号は検出順に付し、遺構ごとに1から付すのではなく、通し番号としている。

竪穴建物は3軒とも削平が激しく、床面がかろうじて残る状況であり、土器埋設炉によってその存在が捉えられたものもある。掘立柱建物は当地域における古墳時代後期～古代初頭の拠点集落のあり方を知る上で重要な資料となるものである。中には掘方の径が60cmを超える比較的大きな柱穴や、布掘りの柱穴を有する建物跡もある。土坑として括った遺構の中には埋土中に炭化物や焼土塊を含むものが認められる。溝も多くは古墳時代後期～古代に属する。ところどころ重複し、やや蛇行しながら縦横に走る。

なお自然科学分析として、放射性炭素による年代測定と樹種同定を委託により実施した。

第2節 層序

本遺跡における基本的な層序は下記の通りである。

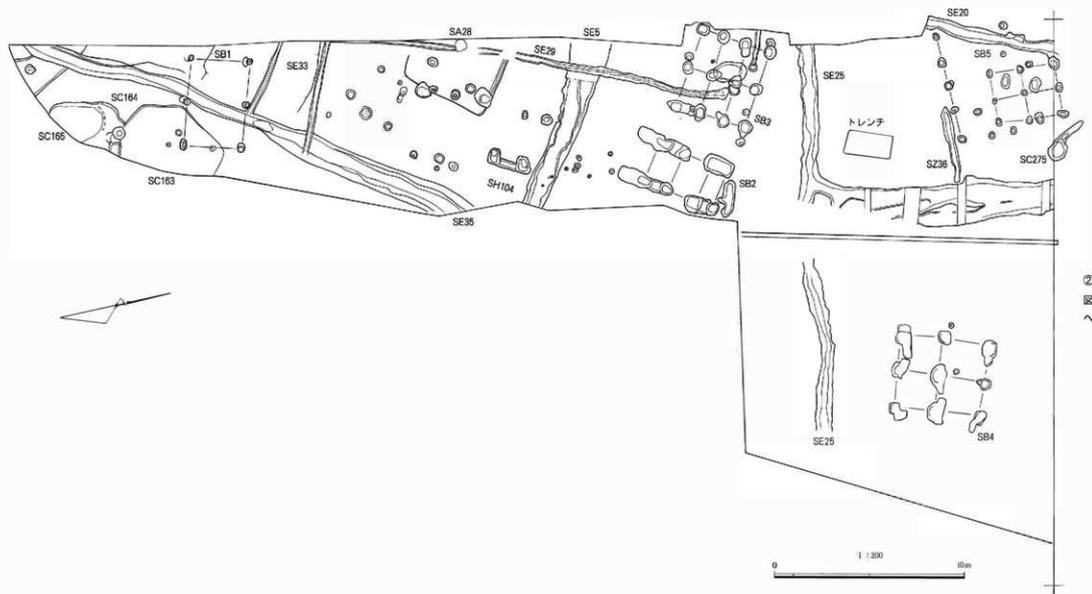
第Ⅰ層は現代に至る耕作土である。褐灰色を呈する。

第Ⅱ層は黒褐色（10YR3/3）を呈し、乾燥するとかたくしまる。土坑の一部はこの面の上面で検出されている。

第Ⅲ層は明黄褐色土（10YR3/3）で粘性が強い。遺構の大部分がこの層の上面で検出された。

第Ⅳ層は黒褐色土（10YR3/2）で第Ⅱ層より粘質がさらに強い。無遺物層。

第Ⅴ層は明黄褐色土（10YR7/6）で粒が細かく、第Ⅳ層よりも粘質がさらに強くなる。やはり無遺物層である。

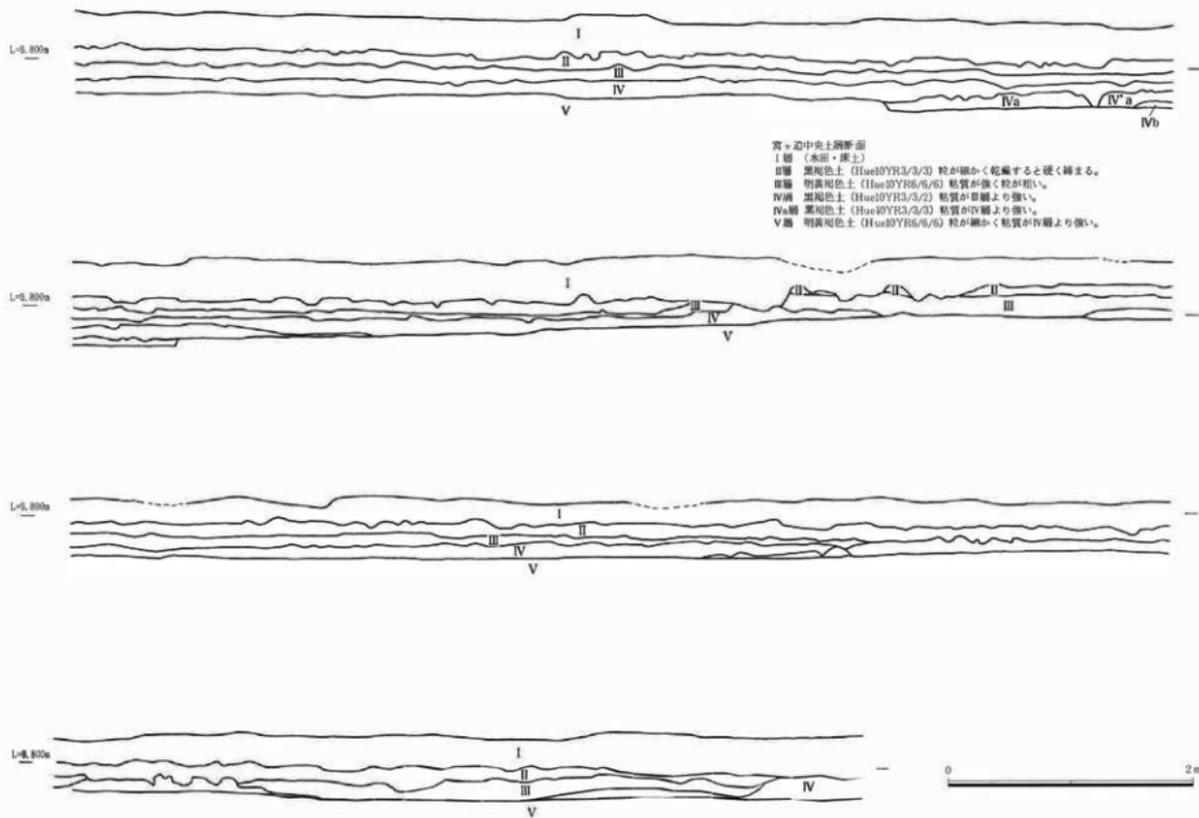


第4図 遺構の分布①



第5図 遺構の分布②

第6圖 土層断面

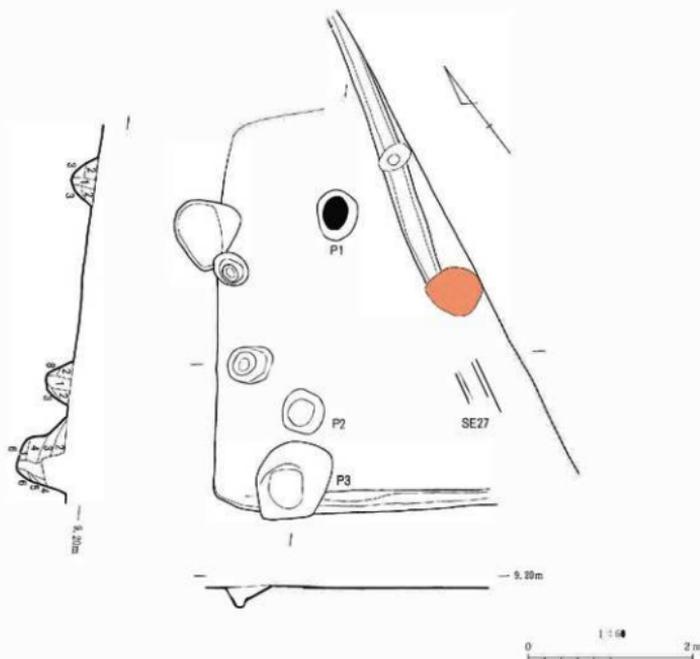


第3節 古墳時代後期～古代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物

遺構の記述に際しては、後述するグループごとに北から順に配列する。また他の遺構も同様であるが挿図中と文中の一部で適宜「SA」などの略号を用いる。

竪穴建物は3軒確認された。うち2つは壁の立ち上がりが失われており、残る1つも残存状況は良くない。



SA28-P1

1. 黒褐色土層 (Hue7.5YR3/2)
粘質で10mm程度の明黄褐色粒 (Hue10YR5/6)、2mm程度の黒褐色粒 (Hue7.5YR3/1) が混じる。柱礎である。
2. 黄褐色砂質土層 (Hue10YR5/6)
30mm程度の黒褐色土ブロックが混じる。
3. 黄褐色砂質土層 (Hue10YR5/6)
2に似るが、黒褐色ブロックが小さく黄褐色粒 (Hue7.5YR7/8) が混じる。

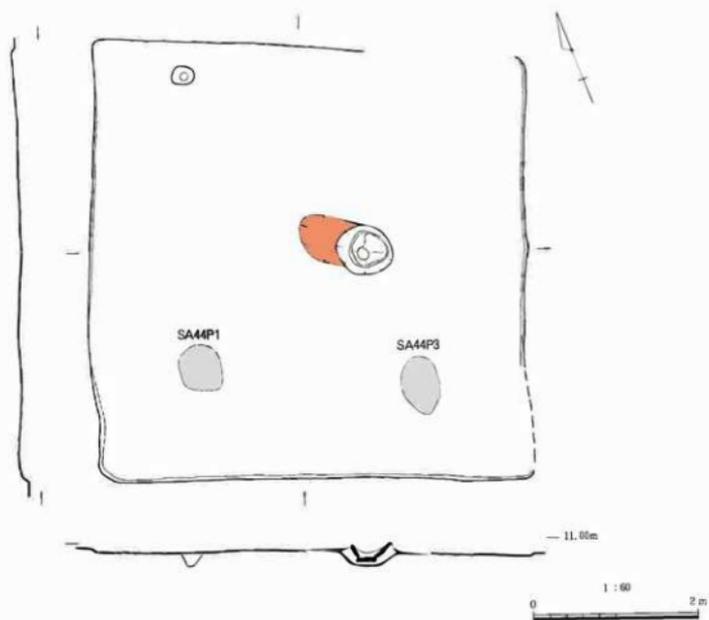
SA28-P2

1. 黒褐色砂質土層 (Hue7.5YR3/2)
粘質で20mm程度の明黄褐色粒 (Hue10YR5/6)、炭化物が少量混じる。柱礎である。
2. 黄褐色砂質土層 (Hue10YR5/6)
20mm程度の黒褐色土ブロックが多く混じる。黄褐色粒 (Hue7.5YR7/8) が少量混じる。
3. 砂質土層 (Hue10YR5/6) 黒褐色ブロックが少量混じる。

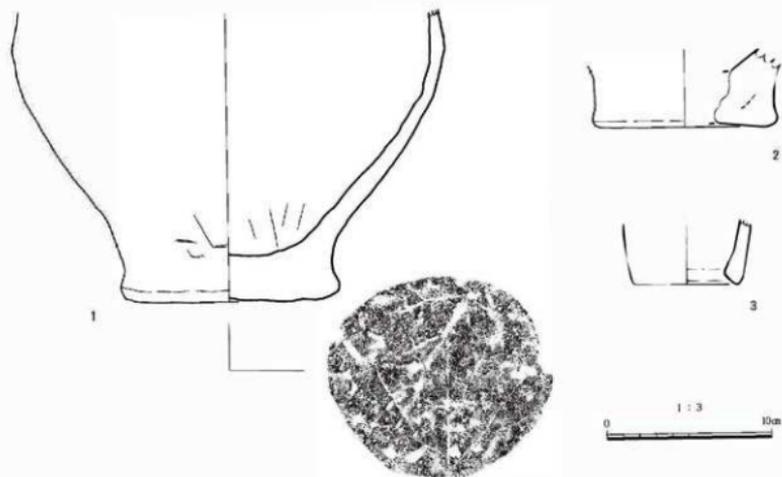
SA28-P3

1. 黒褐色砂質土層 (Hue7.5YR3/2)
粘質で20mm程度の黄褐色ブロックが少量混じる。柱礎で、粘質である。
2. 黒褐色 (Hue7.5YR3/2)
明黄褐色ブロック (50mm大) 多く混じる。
3. 黄褐色 (Hue10YR5/6)
黒褐色ブロック (50mm大) が少量混じり砂質である。
4. Hue7.5YR3/2 黒褐色土に似るが粘質が強い。
5. Hue10YR5/6 黄褐色に似るが粘質が強い。
6. Hue10YR7/8 明黄褐色土層で粘質が強い。榻状ブロック (Hue5YR5/1) 混じる。板垣のみ。

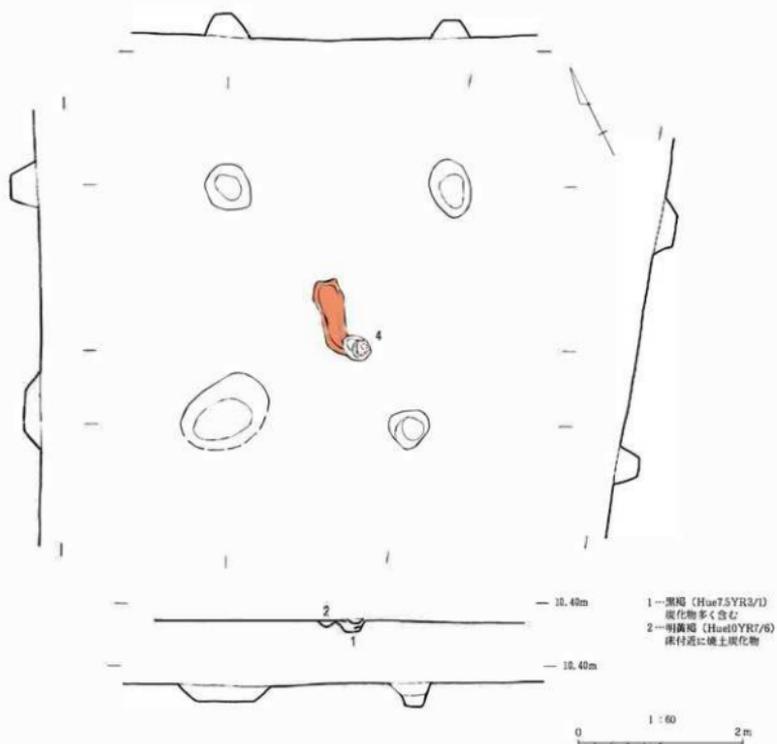
第7図 28号竪穴建物



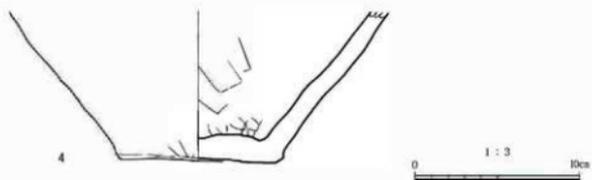
第8图 88号竖穴建物



第9图 88号竖穴建物出土遗物



第10図 44号竪穴建物



第11図 44号竪穴建物出土遺物

28号竪穴建物（第7図）

E-2・3区に位置する。方形プランを基調とするが、東側は27号溝の掘削の影響を受ける。また建物の約1/3は調査区外となっている。辛うじて貼床のみ残存している状況であるが、南側には壁帯溝が認められるため、壁の位置が特定できる。主柱穴は2基のみの確認であるが、柱の配置や炉と目される焼土の位置からみて4本柱と考えられる。

図化可能な出土遺物はない。

88号竪穴建物（第8図）

E-10・11区に位置する。Ⅲ層面で検出したが、削平が著しく壁の立ち上がりがわずかに残存するものの、本来の深さは不明である。やや不整な方形プランを基調とした竪穴建物である。主柱穴は確認できなかった。中央部に土器埋設炉が認められる。甕の下半部が埋設されている。土器の周囲には、ごく薄い焼土がみられる。また土器の北西に抜き取りの痕跡と目される凹部が認められる。

88号竪穴建物の遺物（第9図1～3、第74図311）

出土遺物は第9図に示した。1は土器埋設炉に用いられていた甕の胴部～底部である。円盤状の分厚い平底を呈する。底面には木葉圧痕が認められる。2も平底の甕の底部。3は甕の底部である。またスペースの関係で第74図に掲載したが、311は砂岩製の敲石である。

44号竪穴建物（第10図）

E11区にある。壁を捉えることはできなかったが、4基の柱穴とその中心近くにある土器埋設炉と目される箇所から、方形プランを基調とした竪穴建物と考えられる。土器埋設炉の北方に焼土と炭化物を掻き出した痕跡が認められた。

44号竪穴建物の遺物（第11図4）

第11図4は土器埋設炉に使用された個体である。平底の甕の底部である。

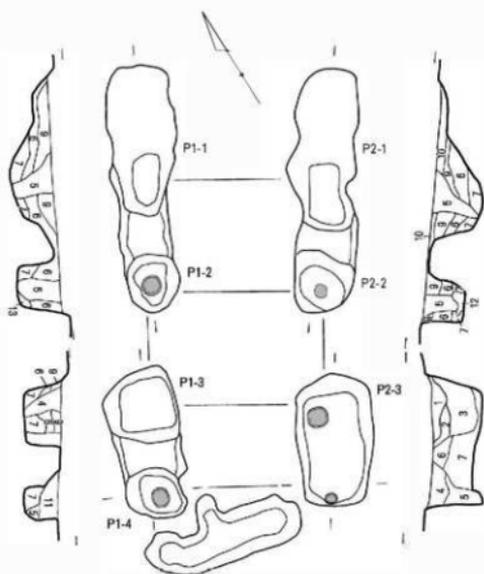
（2）掘立柱建物・柵列

確実な遺構として11棟の存在が確認できる。いずれもⅢ層上面で検出されたが、実際の柱穴の掘り込みはⅡ層中と考えられる。これらについて、南北棟建物では遺構主軸の北からの振れを、東西棟建物では西からの振れを時計回りで計測し、その結果を大まかにグルーピングするならば、A群：25～40° 東に偏する一群、B群：約20° 東に偏する一群、C群：わずかに東に偏するものという3群にまとめられる。A群にはSB2・3・6・9～12が含まれる。B群にはSB1とSB4とが該当する。またC群に該当する遺構は調査区内ではSB5の1棟とその北にある柵列のみである。以下、グループごとに北から順に特徴などについて記載する。

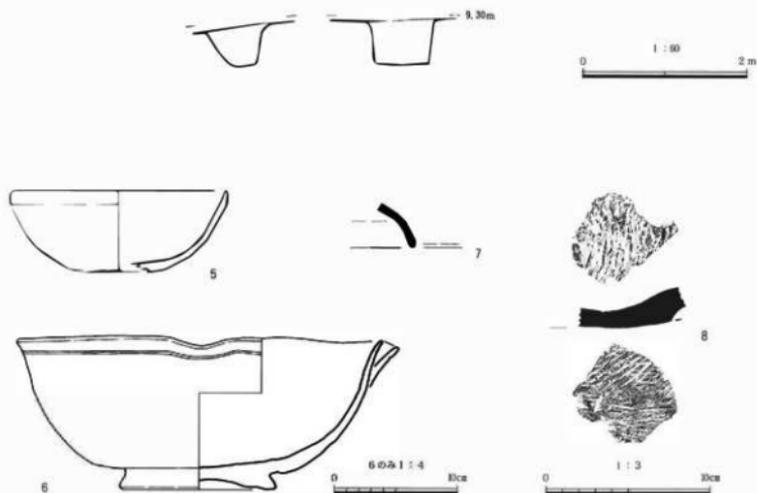
①A群

2号掘立柱建物（第12図）

E-4・5区に位置する布振りの柱穴を有する掘立柱建物である。残存部分は梁行1間×桁行3間であるが、調査区外の東側にも柱穴があって平面形が正方形の倉庫状の建物であった可能性もある。ただし東側は開削の結果、現状で一段低くなっている。遺構主軸はN-34° -Eをとる。柱の抜き取りの痕跡が認められる。南にある土坑の性格は不明である。検出面における柱穴端部間での遺構長はP1-1～P1-4で5.5m、P1-1～P2-1で3.1m、P2-1～P2-3で5.4m、P2-3～P1-4で3.1mである。



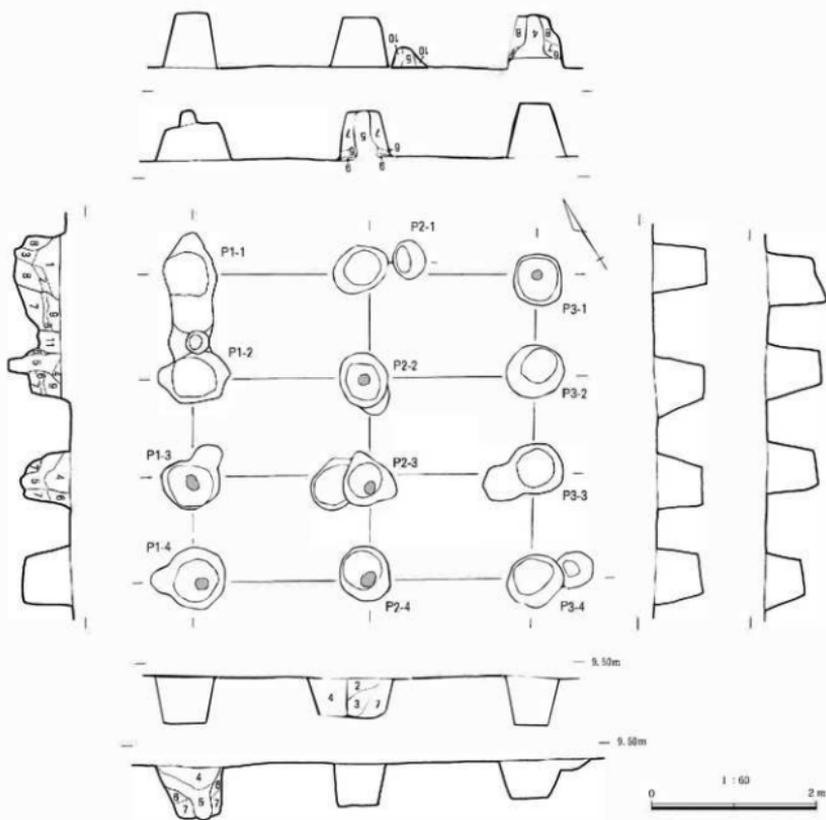
第12図 2号掘立柱建物



第13図 2号掘立柱建物出土遺物

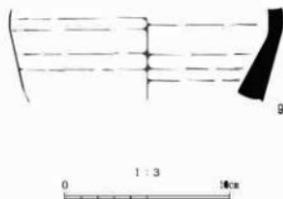
【土層】

- 1 灰オリーブ (Hae5V3/3) シルト混精砂
黄褐色ブロックを5%ほど含む。
- 2 灰オリーブ (Hae5V3/3) シルト混精砂
黄褐色ブロックを10%ほど含む。
- 3 オリーブ (Hae5V5/4) シルト混精砂
明黄褐色ブロックを15%ほど含む。
- 4 黄褐 (Hae2.5V3/4) シルト混精砂
明黄褐色ブロックを1%ほど含む。
- 5 黄褐 (Hae2.5V3/3) 精砂混
明黄褐色ブロックを20%ほど含む。
- 6 明黄褐色 (Hae2.5V6/6) シルト混精砂
黄褐色ブロックを3%ほど含む。
- 7 黄褐 (Hae2.5V3/4) 精砂混シルト
- 8 明黄褐色 (Hae2.5V6/6) 精砂混シルト
黄褐色ブロックを3%ほど含む。
- 9 暗灰黄 (Hae2.5V4/2) 細砂混じり精砂
- 10 藍褐 (Hae2.5V3/2) シルト混精砂
灰オリーブブロックを10%ほど含む。
- 11 暗灰黄 (Hae2.5V4/2) シルト混精砂
- 12 藍褐 (Hae2.5V3/1) シルト混精砂
柱の転倒用の粘土
- 13 明黄褐 (Hae2.5V6/6) シルト混精砂
柱の転倒用の粘土



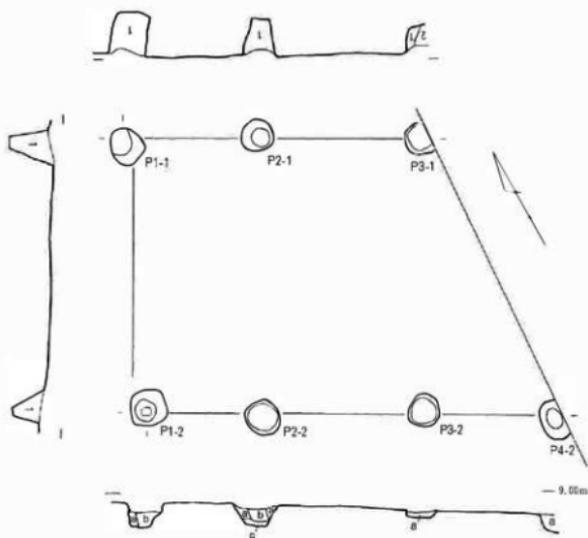
【土層】

- 1 灰オリーブ (Hue0Y5/3) シルト凝粗砂 黄褐色ブロックを5%ほど含む。
- 2 灰オリーブ (Hue0Y5/3) シルト凝粗砂 黄褐色ブロックを10%ほど含む。
- 3 オリーブ (Hue2.5Y5/4) シルト凝粗砂 明黄褐色ブロックを15%ほど含む。
- 4 黄褐 (Hue2.5Y5/4) シルト凝粗砂 明黄褐色ブロックを7%ほど含む。
- 5 黄褐 (Hue2.5Y5/3) 粗砂凝 明黄褐色ブロックを20%ほど含む。
- 6 明黄褐色 (Hue2.5Y6/5) シルト凝粗砂 黄褐色ブロックを3%ほど含む。
- 7 黄褐 (Hue2.5Y5/4) 粗砂凝シルト
- 8 明黄褐色 (Hue2.5Y6/5) 粗砂凝シルト 黄褐色ブロックを5%ほど含む。
- 9 暗灰黄 (Hue2.5Y4/2) 細砂凝じり粗砂
- 10 黒灰 (Hue2.5Y3/2) シルト凝粗砂 灰オリーブブロックを10%ほど含む。
- 11 暗灰黄 (Hue2.5Y4/2) シルト凝粗砂
- 12 黒灰 (Hue2.5Y3/1) シルト凝粗砂 柱の梱固め用の粘土
- 13 明黄褐 (Hue2.5Y6/6) シルト凝粗砂 柱の梱固め用の粘土



第14図 3号掘立柱建物

第15図 3号掘立柱建物出土遺物

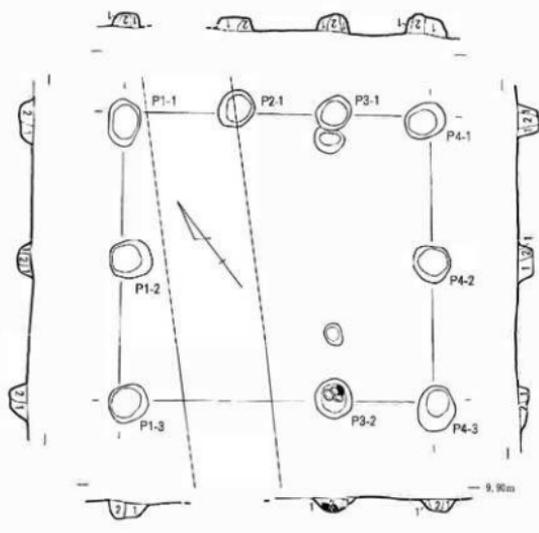


【土層】

SB6

- 1 暗灰 (Hae2Y25/1) シルト凝結砂 柱痕跡か
 - 2 暗灰黄 (Hae25Y4/2) シルト凝結砂 柱痕跡か
- a. 暗灰色 (Hae25Y4/2) シルト凝の粗砂 黄褐色ブロック (Hae25Y5/4) (径 2cm以下) を20%ほど含む。
- b. 灰 (Hae25Y4/1) シルト凝結砂 小〜中粒の炭化層を含む (1%未満) 柱痕跡か
- c. 黒層 (Hae25Y3/1) シルト凝結砂 黄褐色ブロックを20%ほど含む。根がため用の土か

第16図 6号掘立柱建物

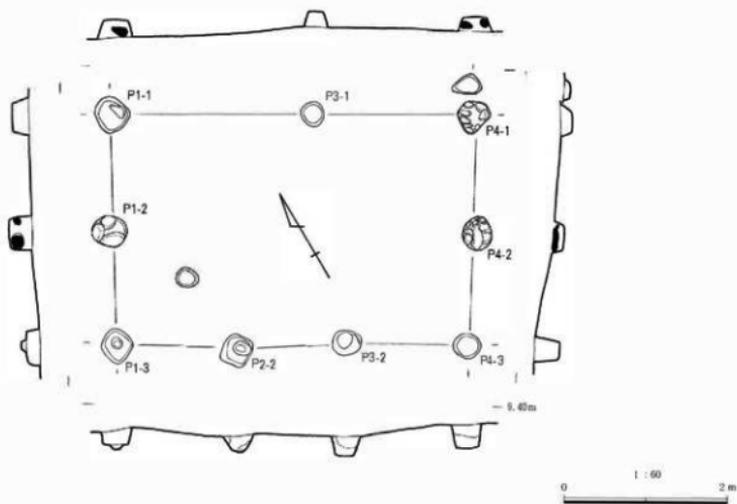


【土層】

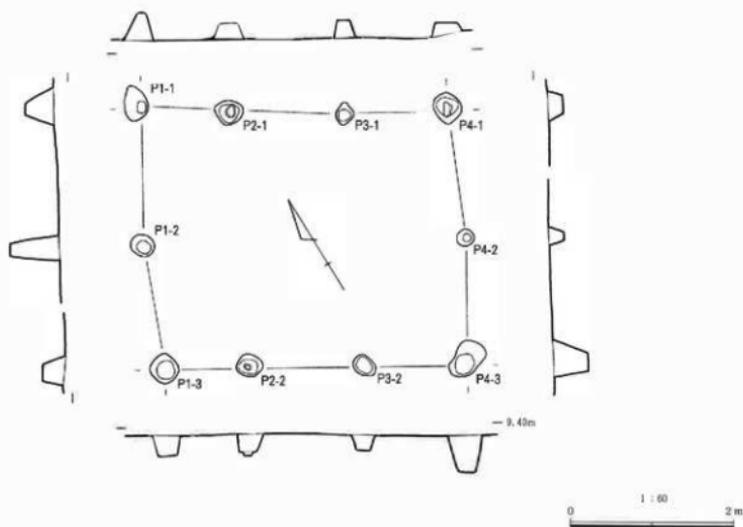
SB9

- 1 オリーブ層 (Hae25Y4/3) シルト凝結砂 黄褐色ブロックを30%ほど含む礫山との区別がつきにくい。
- 2 柱痕跡・暗灰黄 (Hae25Y4/2) シルト凝結砂 黄褐色ブロックを含む。

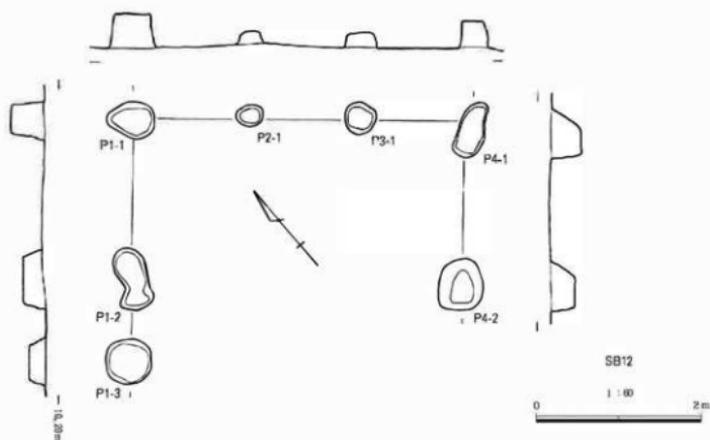
第17図 9号掘立柱建物



第18图 10号掘立柱建物



第19图 11号掘立柱建物



第20図 12号掘立柱建物



第21図 12号掘立柱建物出土遺物

2号掘立柱建物の遺物（第13図）

5と6はP1-4より、7はP2-2より、8はP2-3より出土している。

5は上師器の碗の口縁部～底部付近。口唇部がわずかに屈曲して先細りとなる。6は高台付の片口碗で口縁部の一部が外方に反る。7は須恵器の杯蓋の口縁部である。8は叩き調整痕の残る須恵器甕の底部である。

3号掘立柱建物（第14図）

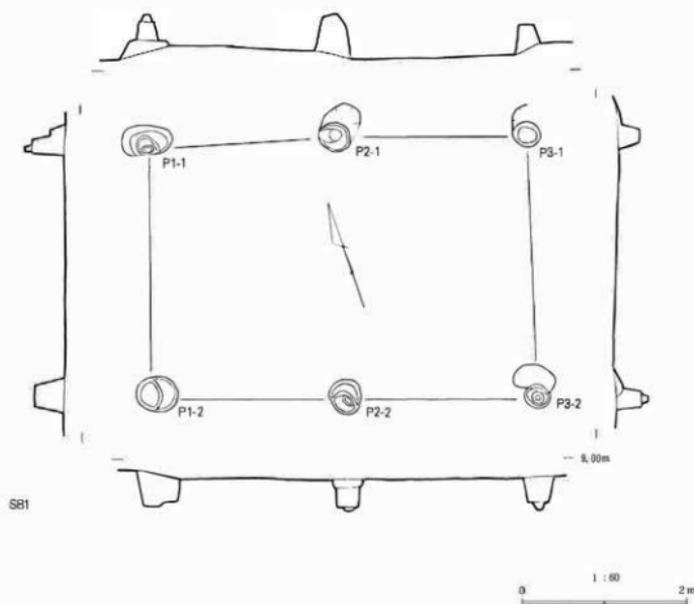
E-5区に位置する。SB2と隣接し、柱筋をそろえている。2間×3間の布掘りの柱穴を有する総柱の掘立柱建物である。平面形は正方形となる。遺構主軸はSB2とほぼ同一で、N-32°-Wを示している。柱穴端部間での遺構長はP1-1～P1-4:4.65m、P1-4～P3-4:5.6m、P3-1～P3-4:4.8m、P1-1～P3-1:4.8mである。柱痕跡や柱抜き取りの痕跡が認められる。

3号掘立柱建物の遺物（第15図）

9は柱穴P2-3より出土した唯一図化可能な遺物である。須恵器の壺の胴部である。

6号掘立柱建物跡（第16図）

D-7区に位置する。梁行1間×桁行3間の東西棟掘立柱建物である。一部現代の水路掘削の影響を



第22図 1号掘立柱建物

受ける。遺構主軸はN-38°-W。柱穴端部間での長さは、P1-1~P3-1:3.8m、P1-1~P1-2:3.6m、P1-2~P4-2:5.0mである。図化可能な出土遺物はない。

9号掘立柱建物跡(第17図)

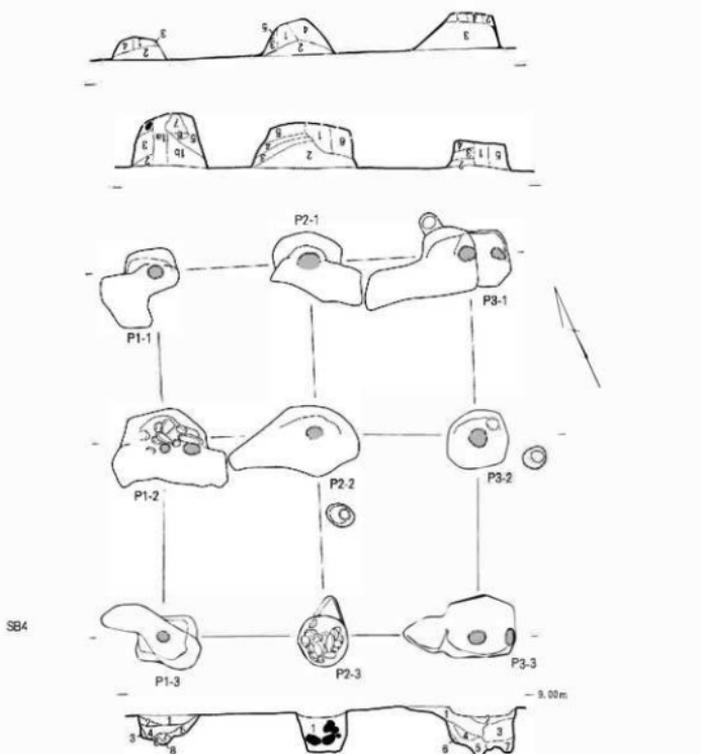
C-10区に位置する。梁行2間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸はN-28°-Eをとる。柱穴端部間での長さはP1-1~P1-3:4.0m、P1-3~P4-3:4.2m、P4-1~P4-3:4.0m、P1-1~P4-1:4.1mである。P3-2の掘り方内には柱の根石が確認できる。図化可能な出土遺物はない。

10号掘立柱建物跡(第18図)

B-11区に位置する。梁行2間×桁行3間の東西棟掘立柱建物である。ただし北側柱列ではP2に対応する掘り込みは検出できなかった。遺構主軸はN-26°-E。いくつかの柱穴掘り方には柱の根石が認められる。P1-1~P4-1:4.8m、P4-1~P4-3:3.2m、P1-3~P4-3:4.65m、P1-1~P1-3:3.2mである。ややびつであり、P4-3-P4-1-P1-1の方向角は88°を示す。図化可能な出土遺物はない。

11号掘立柱建物跡(第19図)

C-12区に位置する。梁行1間×桁行3間の掘立柱建物である。遺構主軸はN-29°-E、柱穴端部間での遺構長はP1-1~P1-3:3.2m、P1-3~P4-3:4.1m、P4-1~P4-3:3.5m、P1-1~P4-1:3.5mである。図化可能な出土遺物はない。



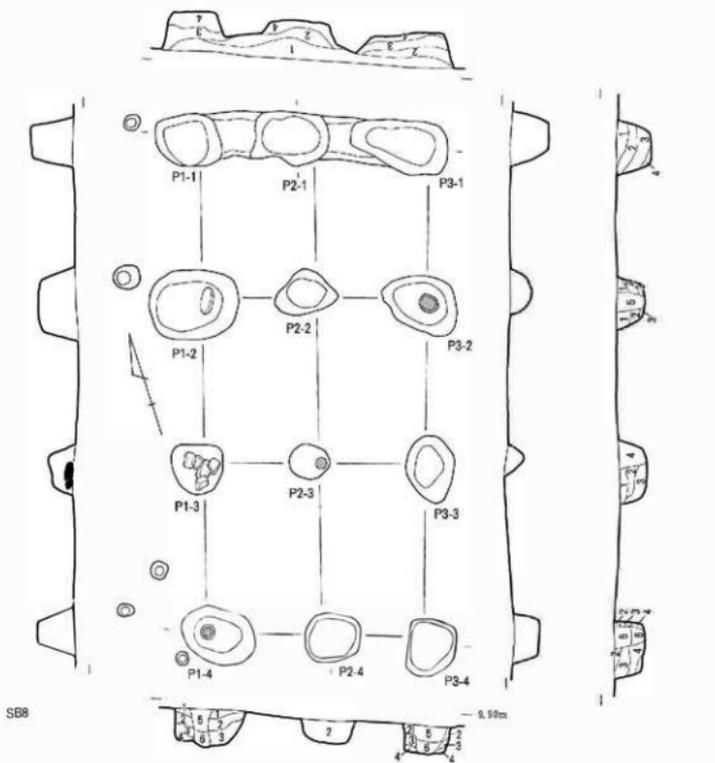
【土層】

- 1 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 黄褐色ブロックが多く混じる。
- 1a 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 柱痕、黄褐色1ブロック (約max) 混じる。粘質。
- 1b 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 柱痕。1aと色調に差がない。黄褐色土ブロック (150mm²) 混じる。
- 2 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 1に似るが黄褐色ブロックを含まない。
- 3 暗褐色 (Hae7.5YR3/3) 黄褐色ブロックを含む。
- 4 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 2に似るが若干暗い。
- 5 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 1に似るが黄褐色のブロックは1より多い。
- 6 暗褐色 (Hae7.5YR3/3) 3に似るが黄褐色ブロックをふくまない。
- 7 黒褐色 (Hae7.5YR3/2) 柱痕・粘質。
- 8 粘灰 (Hae7.5YR6/1) 粘質で粗固めの土か。

第23図 4号掘立柱建物

12号掘立柱建物跡 (第20図)

A・B-12区に位置する。桁行方向の3間分は確認できるが、全容は明らかでない。遺構主軸はN-29°-E。柱穴端部間の遺構長はP1-1~P1-3:3.5m、P1-1~P4-1:4.5m、P4-1~P4-2:2.3mである。



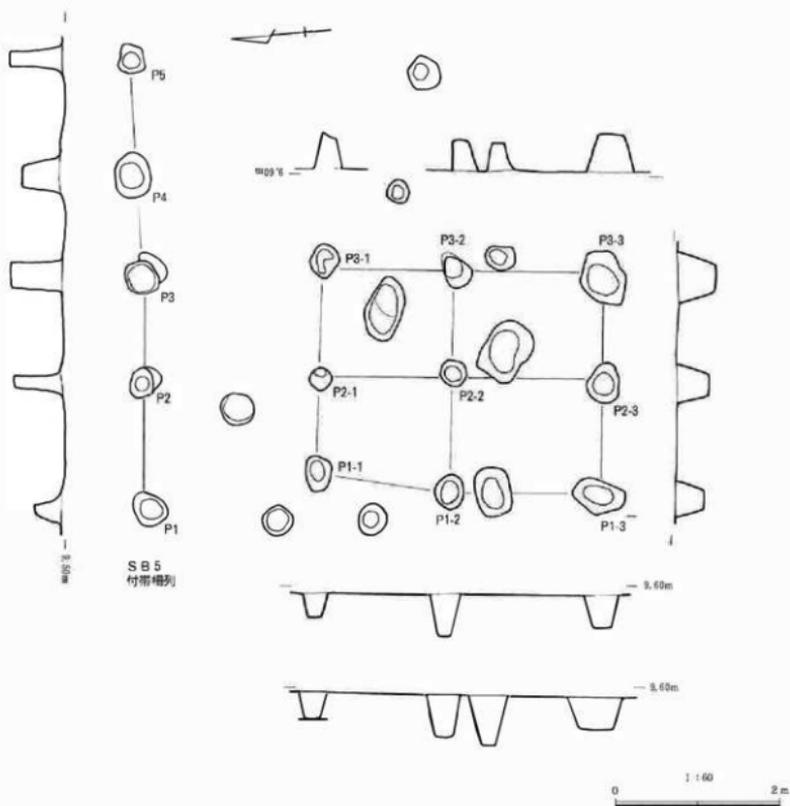
【土層】

- 1 灰オリーブシルト濃粗砂 (Hae5YR5/2) オリーブ (Hae5Y6/0) ブロックを1個含む。
- 2 オリーブ (Hae5Y6/8) シルト凝結砂のブロックによる埋土。
- 3 黒褐色 (Hae10YR3/2) シルト凝結砂による埋土。
- 4 オリーブシルト凝結砂 (Hae5Y6/4) 暗オリーブ色 (Hae2.5Y3/3) ブロックを2.5個含む。
- 5 黒褐色 (Hae5YR3/2) シルト凝結砂 柱状と思われる。
- 6 灰オリーブ (Hae5Y6/2) シルト濃粗砂 非常に硬くしまっている。根固めか。

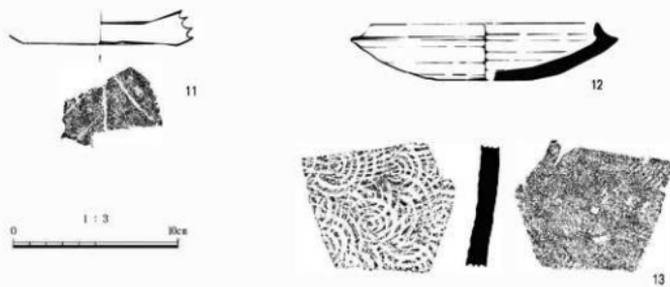
第24図 8号掘立柱建物

12号掘立柱建物の遺物 (第21図)

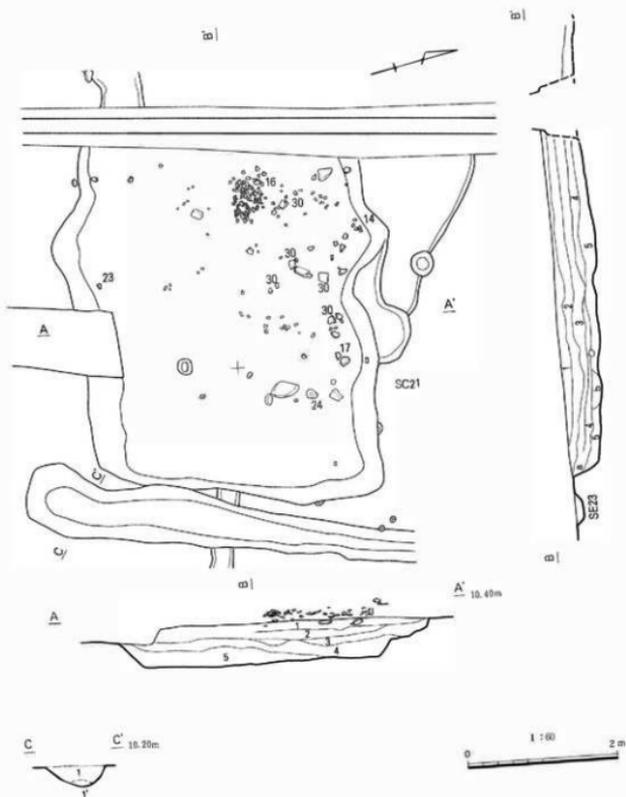
10は土師器の杯身。いわゆる須恵器模倣杯である。口縁下に稜線を形成し、口縁部が直に近い形で立ち上がる。



第25图 5号掘立柱建物・付帯柵列



第26图 5号掘立柱建物出土遺物



【土層】

- SC21
 1 黄灰 (2.5Y6/1) シルト質 赤褐色の鉄分粒が混入。
 2 黄灰 (2.5Y6/1) シルト質 ①より鉄分粒の含有率が低く赤みかからず。
 3 黄灰 (2.5Y6/1) シルト質 赤褐色の鉄分粒50%程度混入し、②より更に赤味が増す。
 4 暗褐色 (10B4/1) 赤褐色の鉄分粒50%程度混入し、全体として黒味が強い。
 5 明黄褐色 (2.5Y6/6) と (2.5Y6/1) シルトの混土である。一見黒色層に見える。

- a 暗 明黄褐色プロットと④の混土層
 b 暗 ⑤を基調とするが、(2.5Y6/1) 黄灰色シルトを多く含む。

- SE23
 1 暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト質 鉄分粒含む。
 1' 暗灰黄 (2.5Y5/2) 若干黒味が強い

第27図 21号土坑

②B群

1号掘立柱建物(第22図)

E・F-1区に位置する。梁行1間×桁行2間の東西棟掘立柱建物である。遺構主軸はN-17°-E。柱穴端部間での遺構長はP1-1~P1-2:3.5m、P1-2~P3-2:5.1m、P3-1~P3-2:5.2m、P1-1~P3-1:5.1mである。柱穴は他の建物と比べてやや小ぶりである。図化可能な出土遺物はない。

4号掘立柱建物跡(第23図)

C・D-6区にある。梁行2間×桁行2間の総柱の掘立柱建物である。遺構主軸はN-20°-Eを示している。P1-1~P1-3:5.1m、P1-3~P3-3:5.0m、P3-1~P3-3:5.2m、P1-1~P3-1:5.0mである。柱抜き取りの痕跡が認められる。また柱穴底面近くに根石が詰められている。図化可能な出土遺物はない。

8号掘立柱建物跡(第24図)

B-10区にある梁行2間×桁行4間の南北棟の総柱掘立柱建物である。北の妻柱列は布掘りとなる。遺構主軸はN-23°-E、柱穴端部間での遺構長はP1-1~P1-4:6.7m、P1-4~P3-4:3.3m、P3-1~P3-4:6.7m、P1-1~P3-1:3.5mであり南北方向に長い。図化可能な出土遺物はない。

③C群

5号掘立柱建物跡(第25図)

E-5・6区に位置する。2間×2間の総柱掘立柱建物で正方形に近い平面形をなす。遺構主軸はN-3°-Eを示す。P1-1~P1-3:4.0m、P1-3~P3-3:3.2m、P3-1~P3-3:3.7m、P1-1~P3-1:3.0mである。なお、この建物の北側に、柱筋をそろえる形で並ぶ柱穴列がある。5号掘立柱建物付帯柵列と呼称しておく。5基の柱穴が確認されており柱穴端部間の全長は5.9mである。

5号掘立柱付帯柵列の遺物(第26図)

図化した遺物は、すべてP4からの出土である。11は土師器甕か鉢の底部で底面に木葉の圧痕が残る。12は須恵器の杯身。口縁部が内側に短く立ち上がる杯身である。底部付近のみ回転ヘラケズリを施す。13は須恵器の甕の胴部である。

(3) 土坑

21号土坑(第27図)

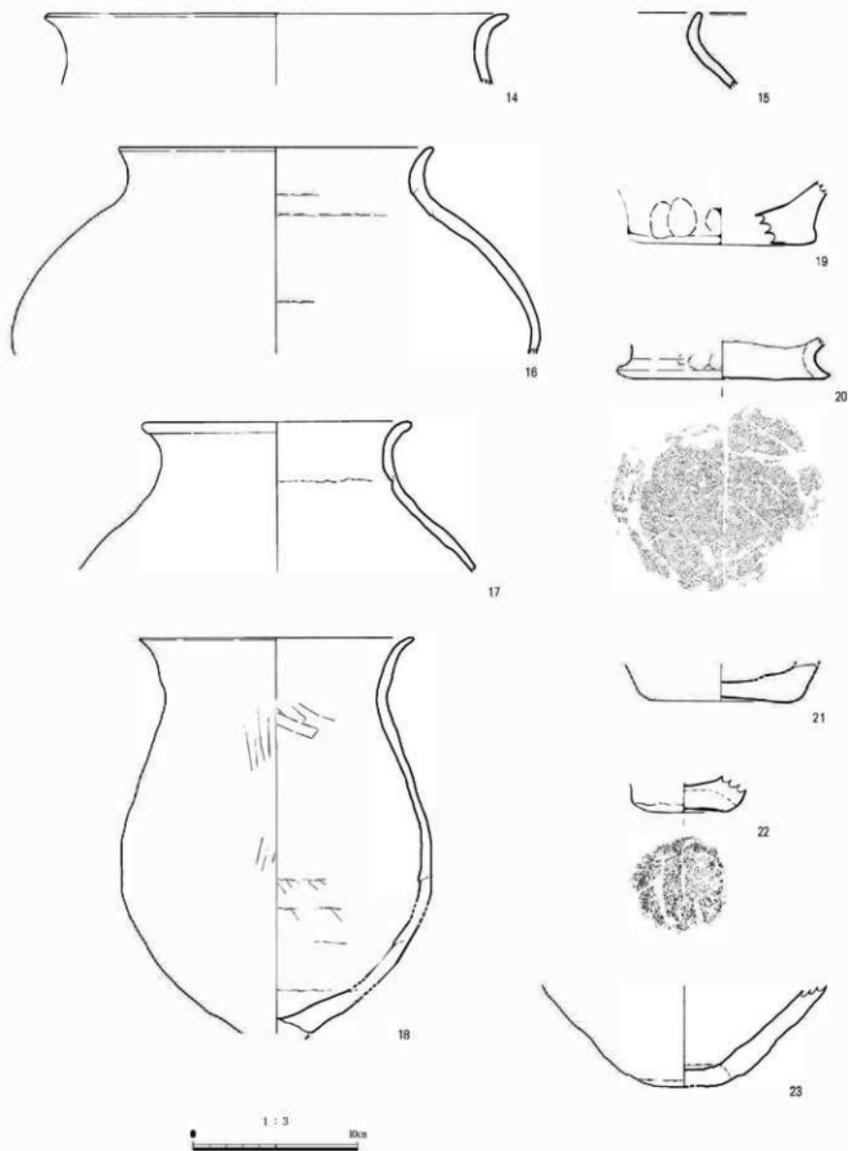
E・D-9・10区に位置する。4.4m×4.0mの平面長方形を呈する土坑である。埋土はシルト質の粘土であり5つの層に分層できる。遺物の多くは検出面近くの粘土層の上部より出土した。土層の堆積状況や導水用と目される小溝の接続状況から粘土貯蔵などに関連する工房的な性格が想定できるが、その平面形から方形の住居跡の可能性も残る。

21号土坑の遺物(第28図・第29図)

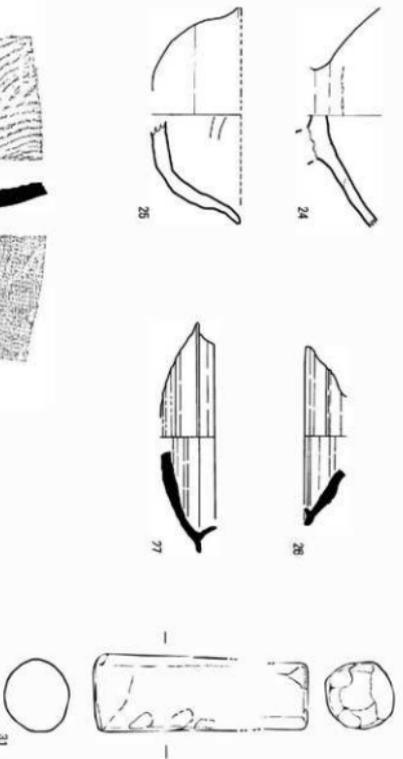
14~18は土師器の甕である。いずれも口縁部が外反するものである。17は壺に近い器形を呈する。19~23は土師器甕ないしは鉢の底部。20は底面に木葉の圧痕が残る。22も木葉の圧痕が認められる。23は丸底を呈する。

24は土師器高杯の杯下半部である。脚部との接合痕が認められる。25は土師器の碗である。

26はかえりを有する須恵器の杯蓋。27は口縁部立ち上がり有する須恵器の杯身で体部下半に回転ヘラケズリを施す。28~30は須恵器の甕の胴~底部でいずれも内面に同心円の当て具痕がみられる。



第28图 21号土坑出土遺物①



第29图 21号土坑出土遗物②

31は土師質の支脚である。指頭圧痕が顕著に認められる。

163号土坑 (第30図)

E-2区に位置する土坑。SB1の柱穴が当遺構を切って掘り込まれている。また164号土坑を切っている。調査区の1/3は調査区外となっている。5.6m×3.5mの不定形プランを呈する。床面はほぼ平坦となる。小穴が1基みられるが付帯する柱穴であるのか否か不明である。

163号土坑出土遺物 (第31図)

32は須恵器高杯の脚部の裾付近である。

164号土坑 (第30図)

E-2区に位置する。SC163号とSC165に切られており、残存状況は良くない。

164号土坑の遺物 (第32図)

33は土師器甕の頸~胴部である。34は丸底を呈する土師器の底部。甕であろうか。

35は土師器高杯の脚部、36は上げ底となる鉢の底部である。37は土師器の甕の胴部から底部である。

38は片口鉢の口縁~底部。39は土師質の支脚である。

165号土坑 (第33図)

SC164を切る。遺構の一部は調査区外にのびる。4.4m×3.3mの楕円形を呈する。

165号土坑の遺物 (第34図)

40は土師器の鉢。41は土師器高杯の基部である。42は須恵器の無頸壺。回転ナデ調整が施されている。底部は焼き垂みが認められ、外面に粘土の付着物がみられる。

7号土坑 (第35図)

E-8区にある楕円形のプランの土坑である。2号北溝と重複し、おそらくはそれより新しい遺構であろうが、当該遺構付近では2号北溝が捉え難いため切り合い関係は明瞭でない。平面規模は1.5m×1.4m、検出面からの深さは約20cm。埋土中および床面より土器片とともに炭化物が出土しており、土器などの焼成土坑であった可能性が高いと判断している。

7号土坑の遺物 (第36図)

43~45は床面近くのレベルで出土した土器片である。43は平底を呈する土師器甕の底部。44は土師器杯か碗であろうか。45はかえりを有する須恵器杯蓋。かえりは口縁端より下位にくる。

217号土坑 (第37図)

C-7区にあり、長軸1.7m、短軸1.0mの不定形のプランを呈する。削平が著しく壁の立ち上がりがわずかに残るのみであった。底面付近に2箇所ほど焼上面が認められる。図化可能な遺物は出土していない。

218号土坑 (第37図)

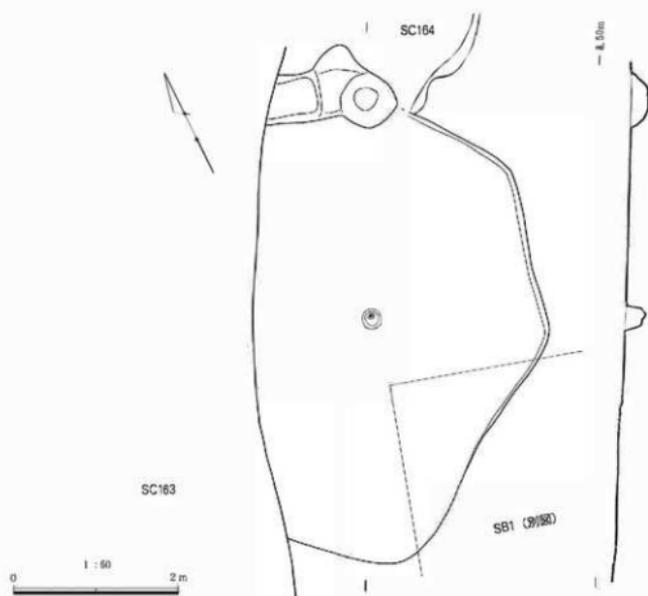
C-1区に位置する。長軸1.1m短軸1.0mの不定形の土坑である。検出面付近の削平により壁の立ち上がりがわずかに残るのみである。図化可能な遺物は出土していない。

145号土坑 (第37図)

C-7区にあり、長軸1.5m、短軸1.1mの不定形のプランを呈する。やはり削平により壁の立ち上がりがわずかに残るのみである。図化可能な遺物は出土していない。

124号土坑 (第37図)

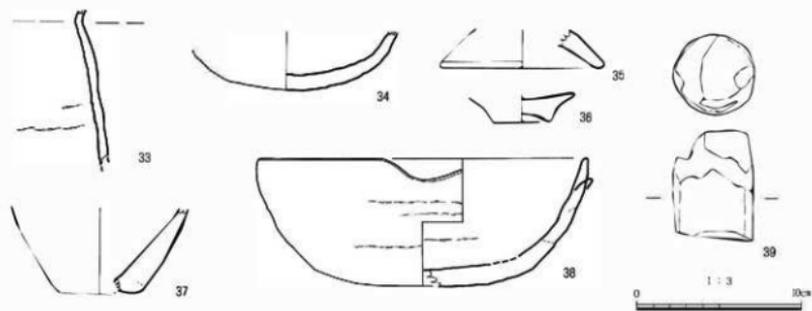
C-7区にあり、長軸1.4m、短軸1.3mの不定形プランを呈する。やはり残存状況は良くない。少量の



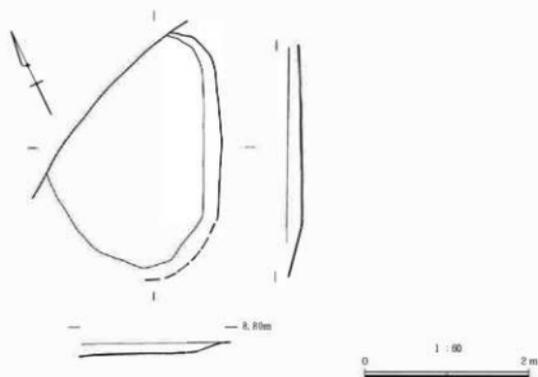
第30图 163号土坑



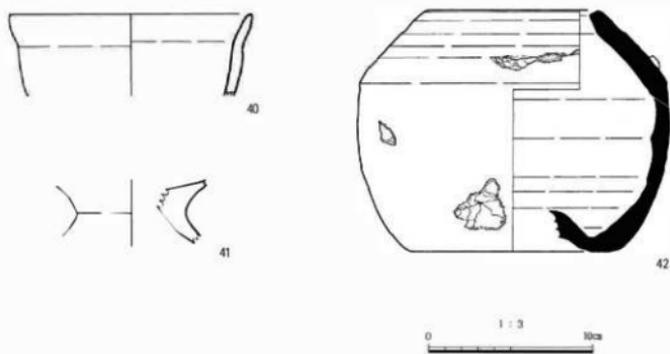
第31图 163号土坑出土遺物



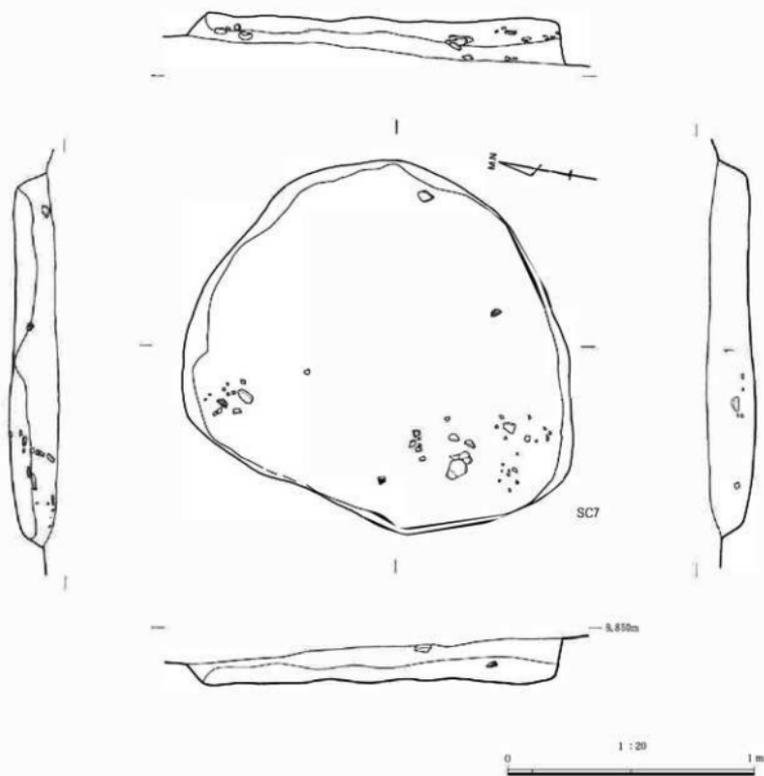
第32图 164号土坑出土遺物



第33图 165号土坑



第34图 165号土坑出土遗物



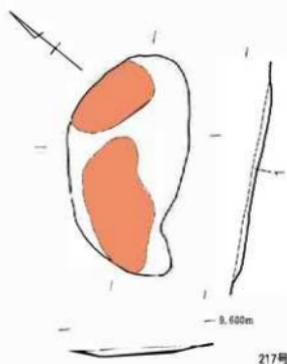
【土層】

1 灰 (Hue5Y4/1) シルト混砂 褐色のマングン (焼鉄鉱) を10%前後、炭化物粒を2%前後含む。

第35図 7号土坑

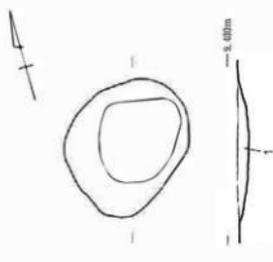


第36図 7号土坑出土遺物



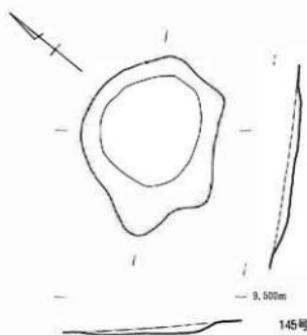
217号土坑

1 褐灰 (Hue75YR4/1) シルト凝結砂 明褐色ブロック、炭化物を5%ほど含む。



218号土坑

1 褐灰 (Hue75YR4/1) シルト凝結砂 黄褐色のブロックを含む。

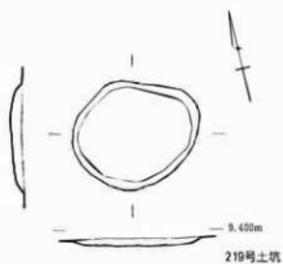


145号土坑

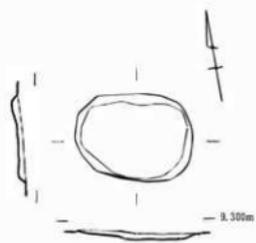


1 黒褐色 (Hue2.5Y3/3) 黒色や褐色のブロックを多く含む。

124号土坑



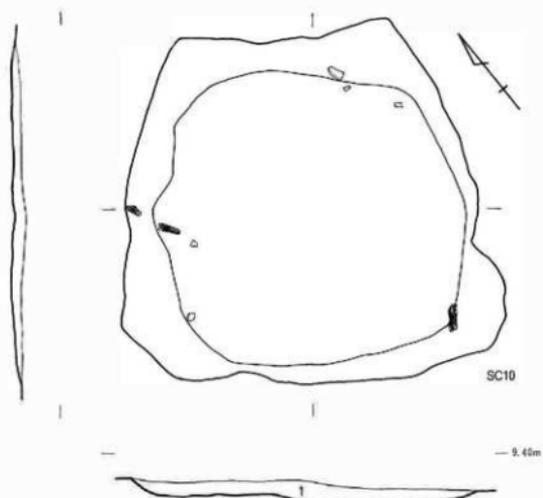
219号土坑



126号土坑

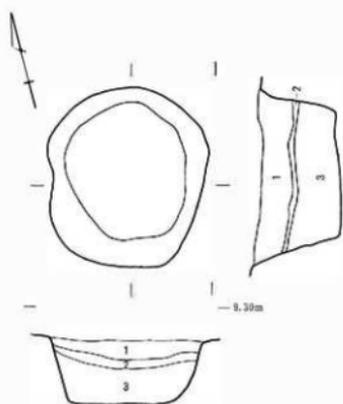


第37図 217号土坑ほか



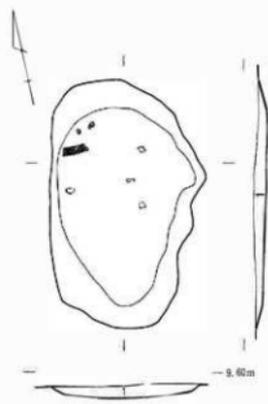
【土層】 1→黒褐色土 (Hae25Y3/3) かたくしまっている。

10号土坑



【土層】 1→灰黄褐 (Hae4YR4/2) シルト凝形砂。
2→炭化物の沈着物。
3→濃い黄褐 (Hae10YR5/2) シルト凝形砂。

220号土坑



【土層】 1→黒褐色土 (Hae25Y3/3/1) 粒が細かく詰まっている。

125号土坑



第38図 10号土坑ほか

炭化材と土器片がみられた。S C 7同様、土器焼成土坑と考えられる。図化可能な遺物はない。

219号土坑（第37図）

C-7区にある。長軸2.1m、短軸1.8mの円形の土坑である。壁の立ち上がりがわずかに残るのみである。図化可能な出土遺物はない。

125号土坑（第37図）

D-7区にある楕円形の土坑。長軸1.9m、短軸1.5mである。壁の立ち上がりがわずかに残るのみである。図化可能な出土遺物はない。

10号土坑（第38図）

C-7区に位置し、長軸1.55m、短軸1.45mの不定形プランを呈する。検出面付近の削平が著しく壁の立ち上がりがわずかに残るのみである。床面に少量の炭化材と土器片がみられた。当土坑も土器焼成土坑と推定している。図化可能な出土遺物はない。

220号土坑（第38図）

D-7区に位置する。長軸1.4m、短軸1.2mの円形の土坑で検出面からの深さは約60cmである。埋土中位に炭化物の層がみられる。図化可能な出土遺物はない。

125号土坑（第38図）

D-8区に位置する。長軸2.0m、短軸1.3mの楕円形のプランの土坑。削平により壁の立ち上がりがわずかに残るのみである。少量の炭化物と土器の小破片が出土している。当土坑も土器焼成土坑の可能性がある。

（4）溝類似土坑

短い溝状遺構とも表現すべき細長い形状の土坑についてこのような種別を設定した。

176号溝類似土坑（第39図）

C-9区に位置し、67号溝と重複する。長軸4.2m、短軸1.3mの楕円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。

176号溝類似土坑遺物（第39図46）

46は埋土中から出土した土師器甕の口縁～胴部である。口縁部が緩やかに外反する。

501号溝類似土坑（第39図）

D-8区に位置する。長軸2.8m、短軸0.5m、深さ0.1mの浅い遺構である。底面に小ビットがある。図化可能な出土遺物はない。

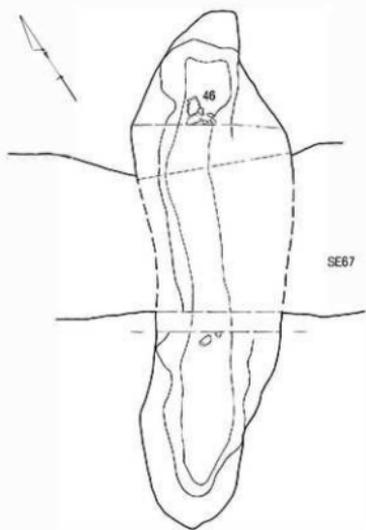
202号溝類似土坑（第39図）

C-8区に位置する。長軸3.0m、短軸0.4m、深さ0.1mの浅い遺構であり、67号溝に注ぎ込む形となっている。断面形は逆台形状を呈する。図化可能な出土遺物はない。

（5）溝状遺構

35号溝状遺構（第40図）

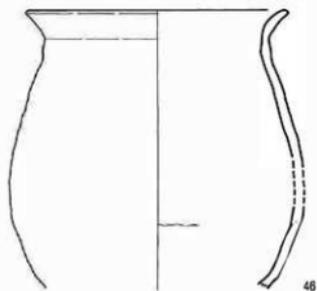
調査区の北端部に近いE-1区から3区にかけて検出された。南は調査区外にのびるため、その先の状況は不明であるが、C・D-5区付近でこの続きが確認できないことから、後述する5号溝と接合し、



— 10.00m

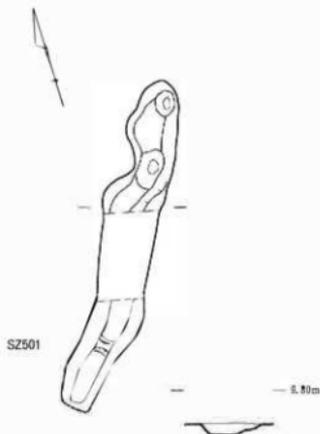


SZ176

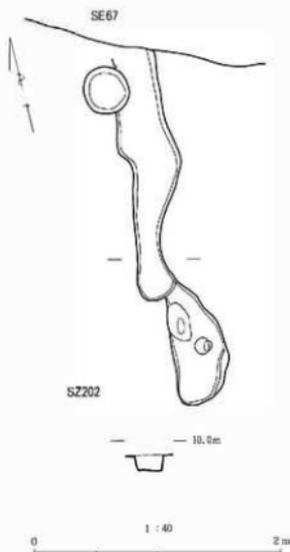


0 1 : 3 10cm

SZ176出土遺物



— 5.00m

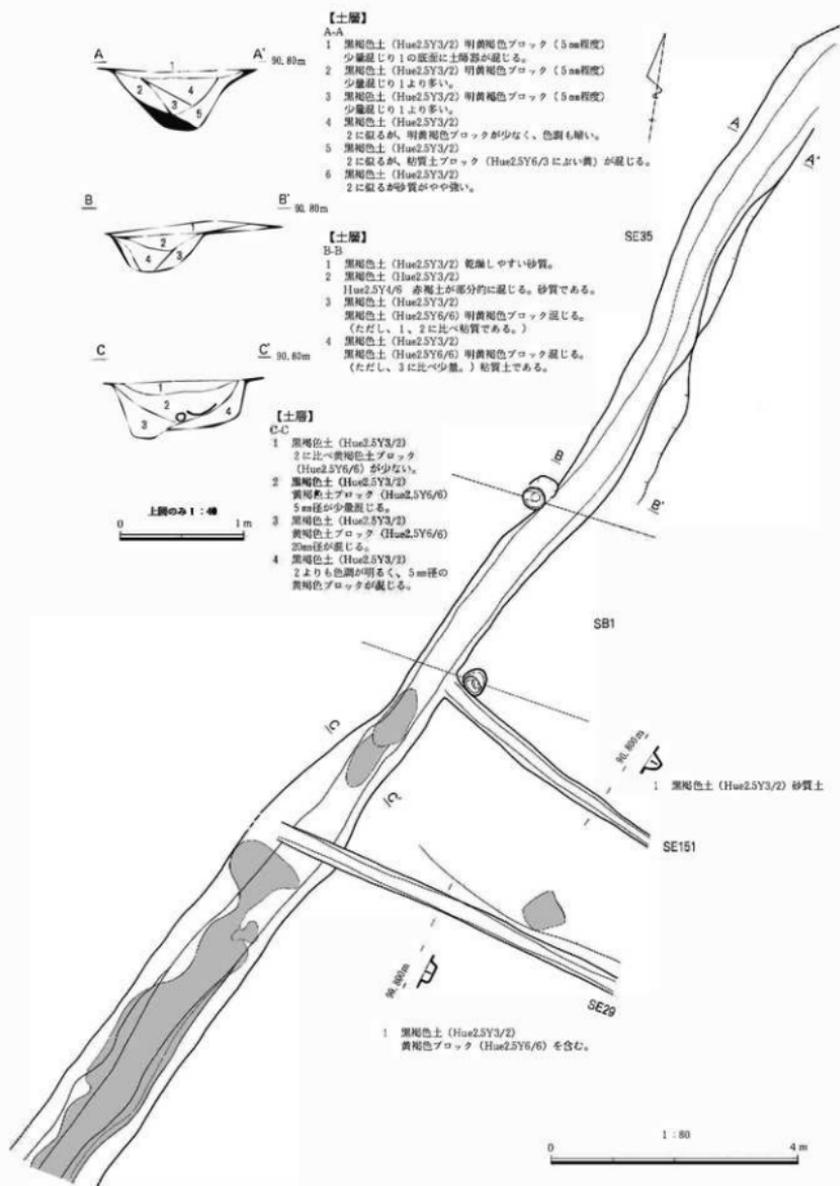


SZ202

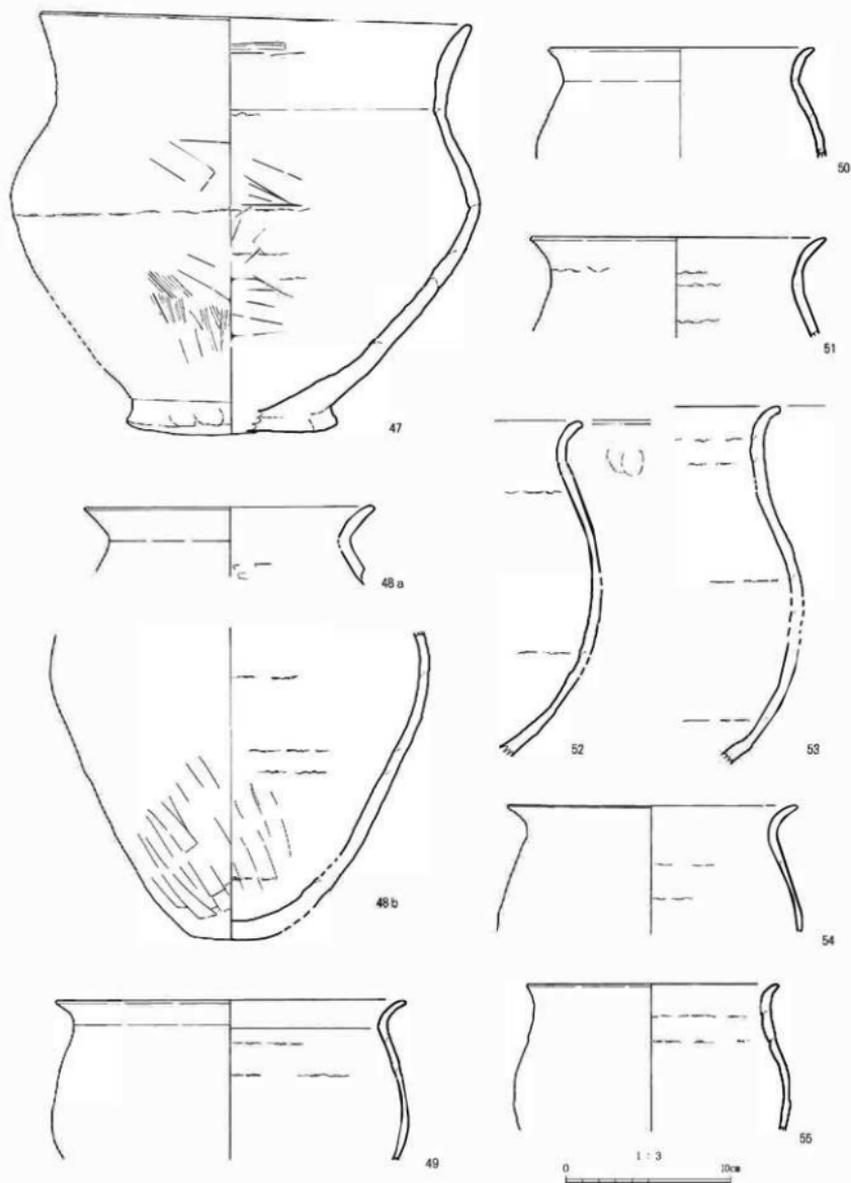
— 10.0m

0 1 : 40 2m

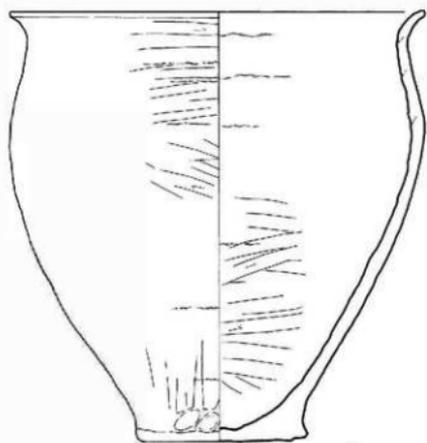
第39図 溝類似土坑ほか



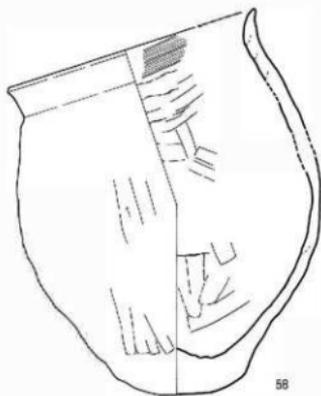
第40図 35号溝ほか



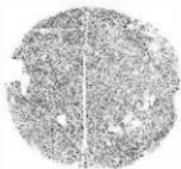
第41图 35号溝出土遺物①



56



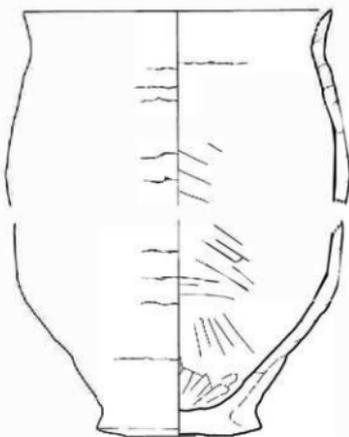
58



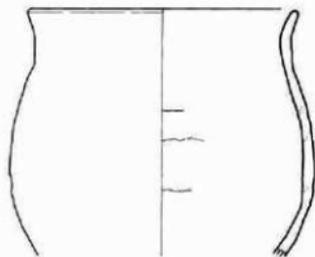
59 a



59 b



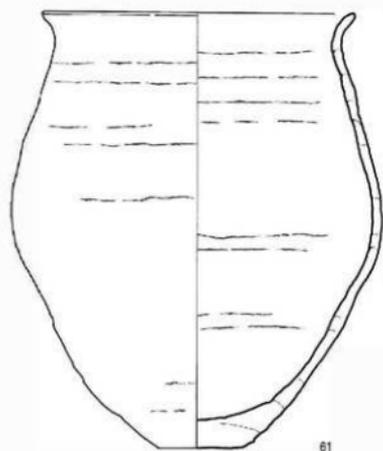
57



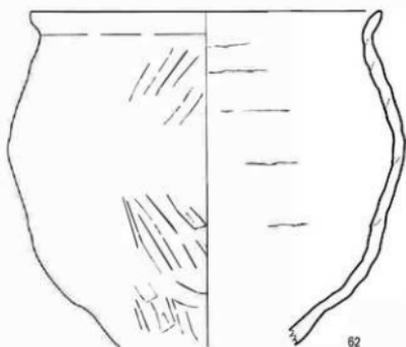
60



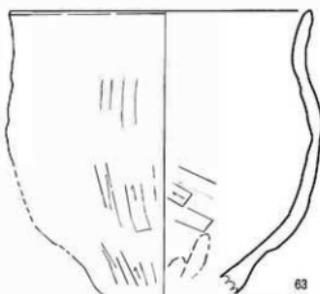
第42图 35号溝出土遺物②



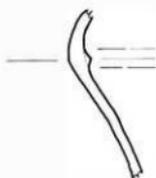
61



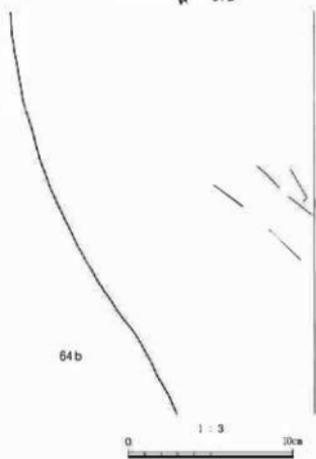
62



63



64a



64b

0 1 3 10cm



64c

第43图 35号溝出土遺物③

直角を形成して続くか、あるいは5号溝と交差した後に西に曲がっていた可能性がある。幅の狭い小溝 S E 151 がこの溝に注ぎ込む形となる。また29号溝に切られる。

遺物がとりわけ多く出土した溝であり、特に埋土中位から検出面近くで多量の土器が重なって出土している。第40図の網掛けの部分は遺物が特に集中して出土した部分である。検出面での幅は約1.18m、深さは約0.5mである。

遺物の出土状況や埋土の堆積状況からみて、溝が機能を停止する頃に土器類が大量投棄され、その後完全に埋没したと考えられる。S B 1 の柱穴がこの溝の埋土を切っており、新旧関係が明らかである。

35号溝状遺構出土の遺物（第41図～第54図）

47～112は土師器の煮沸用土器であり、器種名では甕とされるものである。器形の面では壺に近い一群が含まれることや平底、丸底の違いがあるなど多様性に富む。いずれも器面は粗めの工具によるナデ調整が施されるが摩滅によって判別できない個体も多い。以下、特徴的な個体のみ記述する。

47や48は口縁部が「く」の字状に屈曲し、球形の胴部を呈しており、古墳時代前期土器からの系譜上に連なるものである。47は安定した円盤状の平底、48は丸底となる。挿図上では口縁部の屈曲が明瞭な個体から、口縁部がわずかに外反するものという方向に沿って配列している。これは時間差を示す可能性が高いが、そうであったとしても極めて漸移的な変化である。平底となる56の底面には木葉の圧痕が認められる。葉脈まで鮮明である。58は口縁部が緩く外反するもので、厚い丸底を有する。全体として歪んでいる。65は口縁部が比較的強く外反するが、稜線は形成されない。プロポーシオンは球形を成す。66と69は同じように口縁部が緩く外反し丸底となるが、66は球形を呈するのに対し、69はやや長胴に近い。70は口縁部が緩く外反し丸底となり、プロポーシオンはやや長い胴に近い球形を呈する。この個体は胎土が他とは大きく異なっており、色調を含めて異彩を放っている。73は口縁部がごくわずかに外方に反るもので、無頸壺とも表現可能な器形を呈している。74は口縁部が緩く外反するが、さらにその端部を折り曲げる。内面に粘土の接合痕が顕著に認められる。

79は口縁部が緩く外反するもので、口唇縁が最大径となる。口縁部径に対して器高が低い場合、鉢に近い形態となっている。上半部には接合痕が観察できる。

85や89、95などは直線的にのびる体部から口縁部に至って直角に近い角度で外反する。89は口縁端部が最大径となるが95は著しく下膨れとなり胴下半部が最大径部位となる。95ほど顕著ではないが96もそれに近く一般的な甕とは一線を画している。この種のもは器壁が薄い場合が多い。96は頸部が長くなる異形の甕である。98もほぼ同様の器形の個体であろう。

99と100は壺に近い器形のものである。底部の形態は不明である。

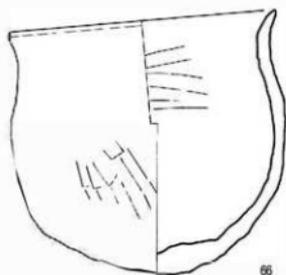
101～126と129はおそらくは甕の胴部から底部付近の破片である。円盤状の平底となる107には木葉の圧痕が認められる。124は球形の胴部を有する。129もやや大振りな丸底の個体であり、壺とすべきかも知れない。

127・128と130～133は鉢である。127は球形の体部を有する。底部は円盤状の平底となり木葉の圧痕が認められる。また器面に粘土の接合痕が明瞭に確認できる。128も底面に木葉圧痕が付く。木葉圧痕は130・131と133にも認められる。

134は甕の口縁部から底部で胴部がやや張るものである。135も甕であり胴部がやや張る。粘土の接合痕が確認できる。136と137は甕の胴部付近～底部である。



65



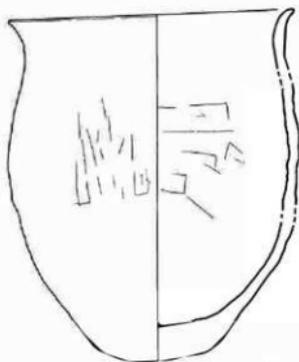
66



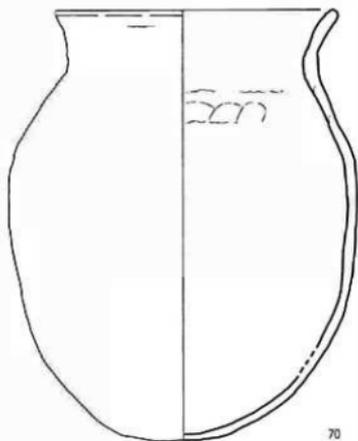
67



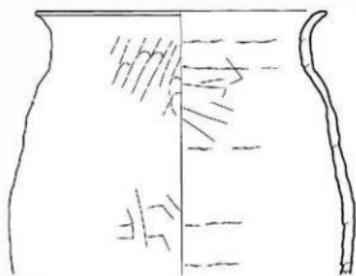
68



69



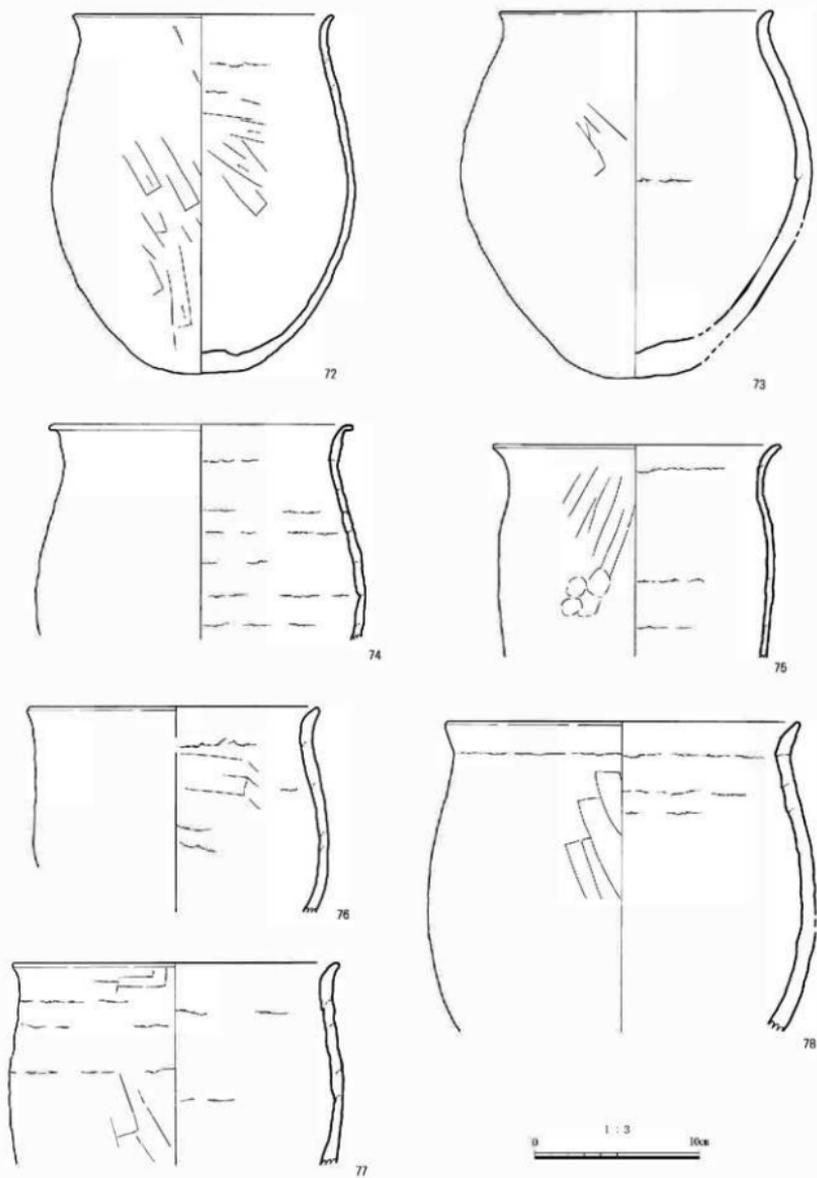
70



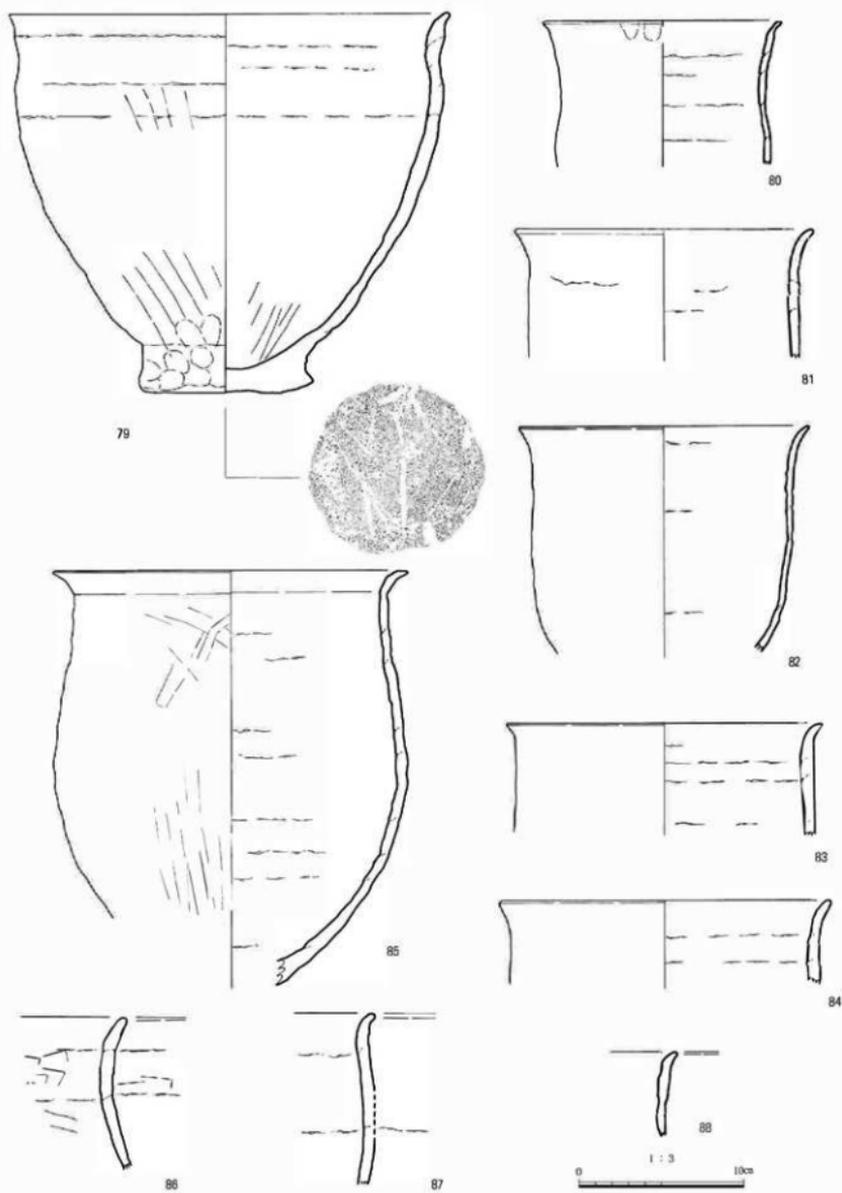
71



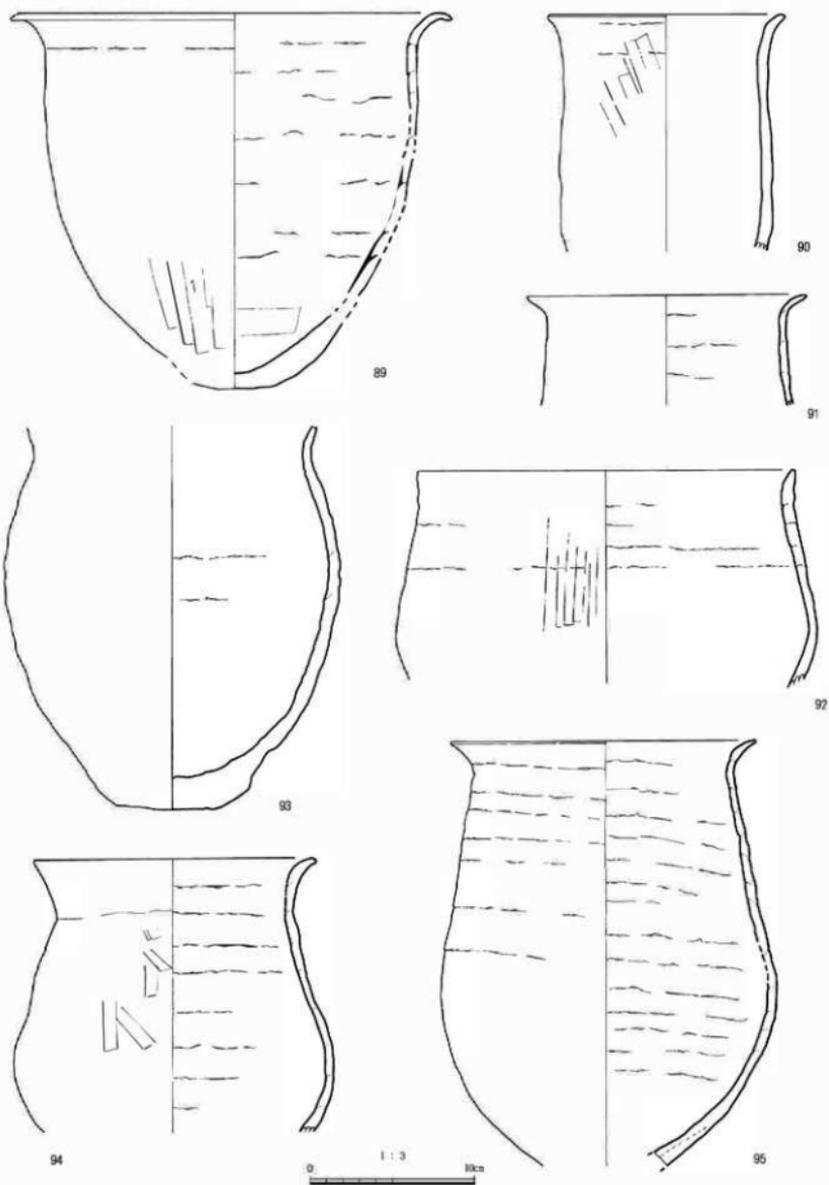
第44图 35号溝出土遺物④



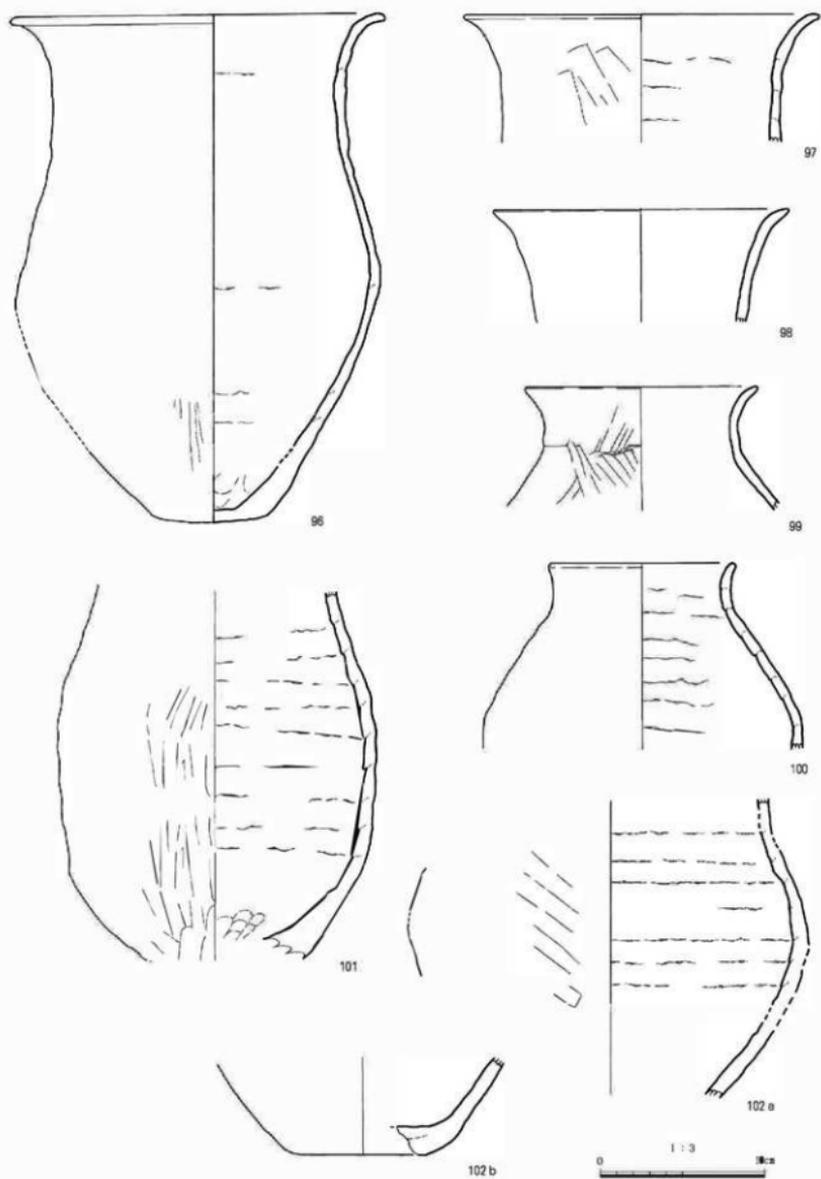
第45图 35号溝出土遺物⑤



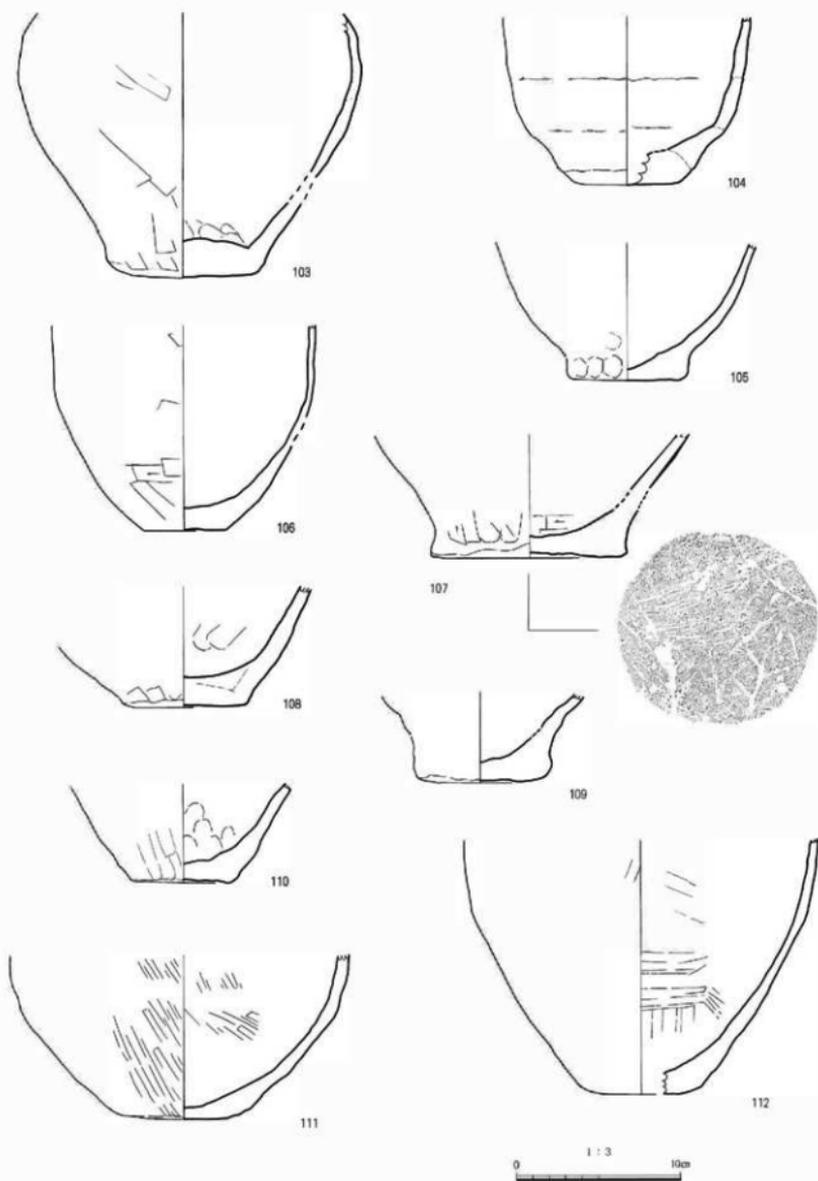
第46图 35号溝出土遺物⑥



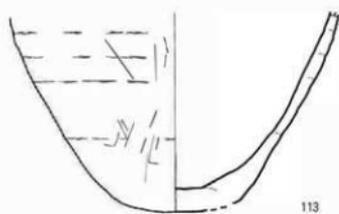
第47图 35号冢出土遺物⑦



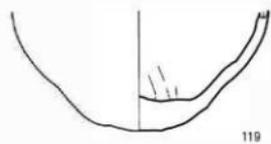
第48图 35号清出土遺物⑧



第49图 35号溝出土遺物⑨



113



119



114



120



115



121



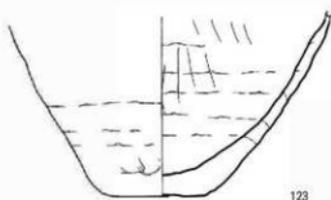
116



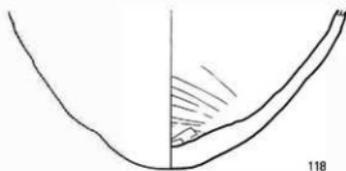
122



117



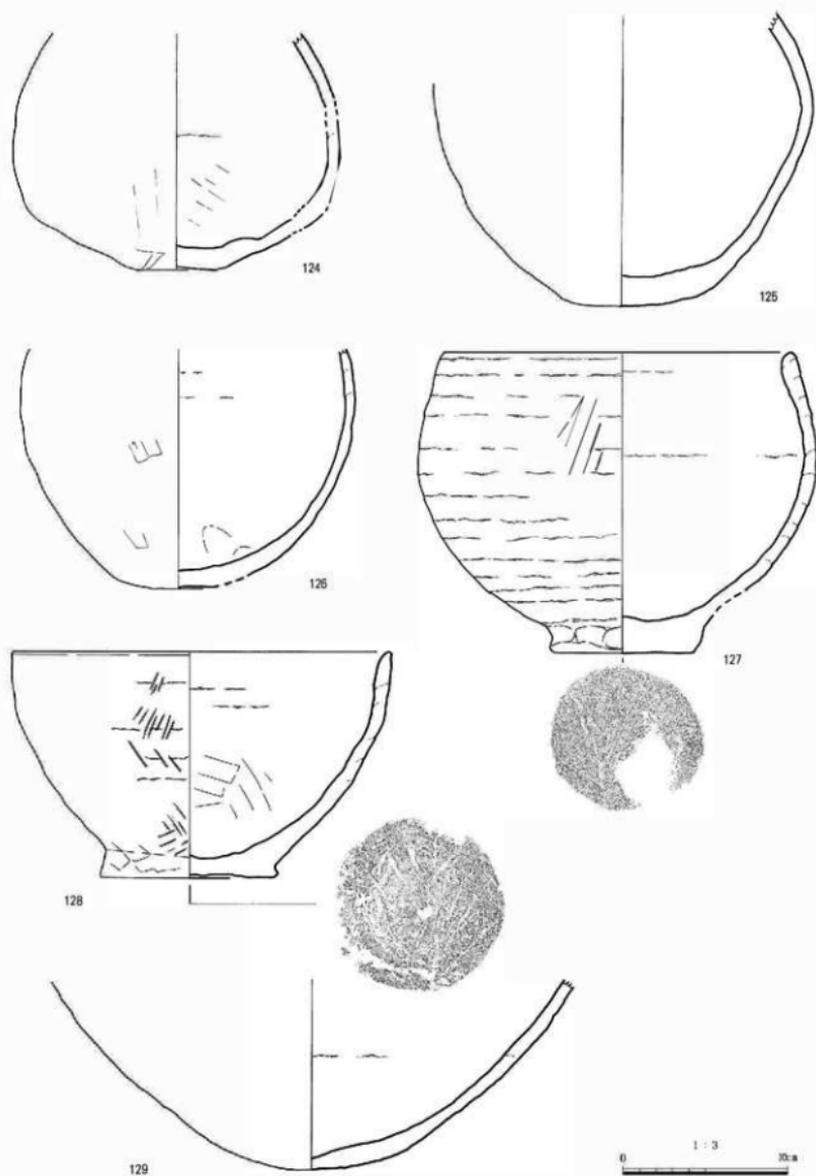
123



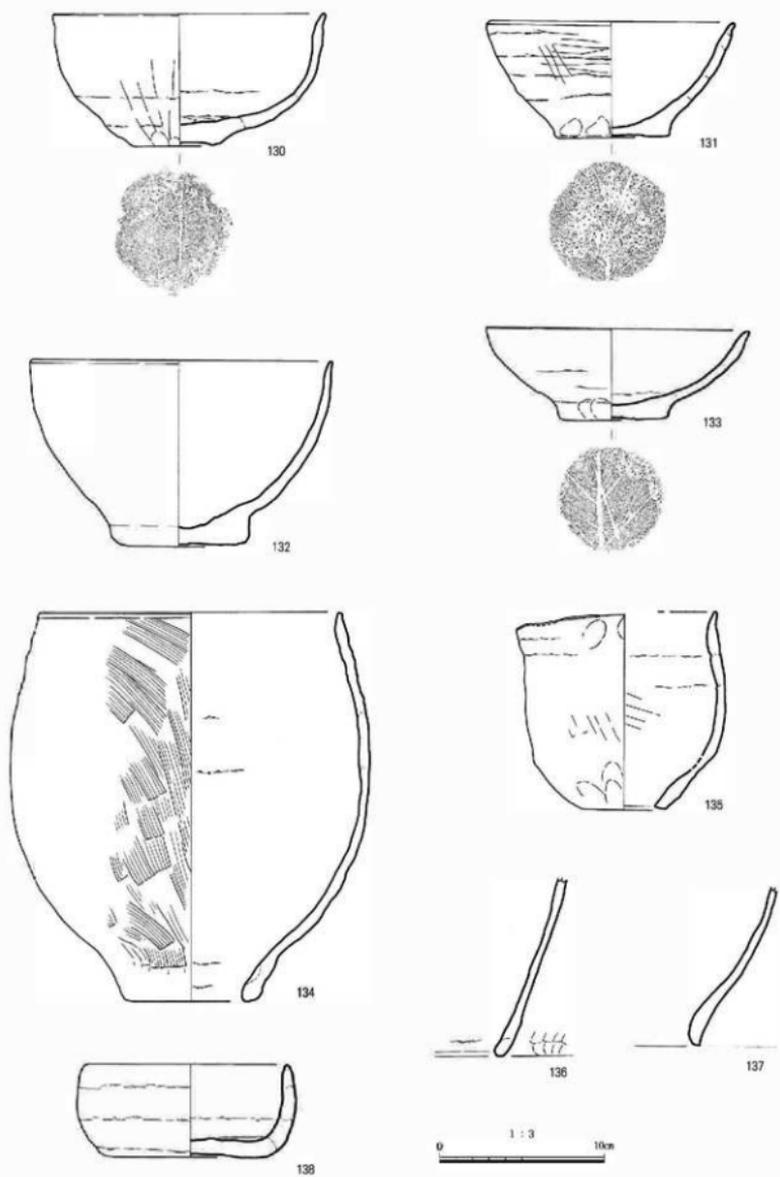
118



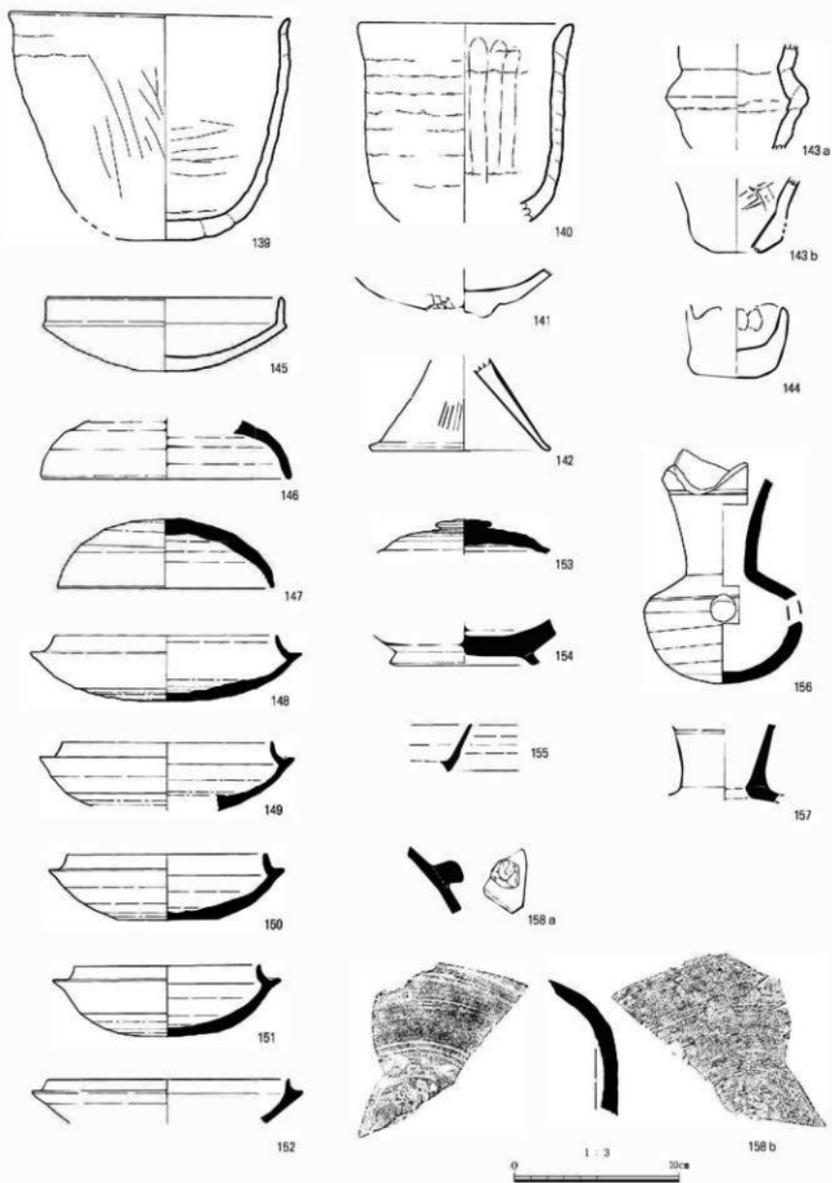
第50图 35号溝出土遺物⑩



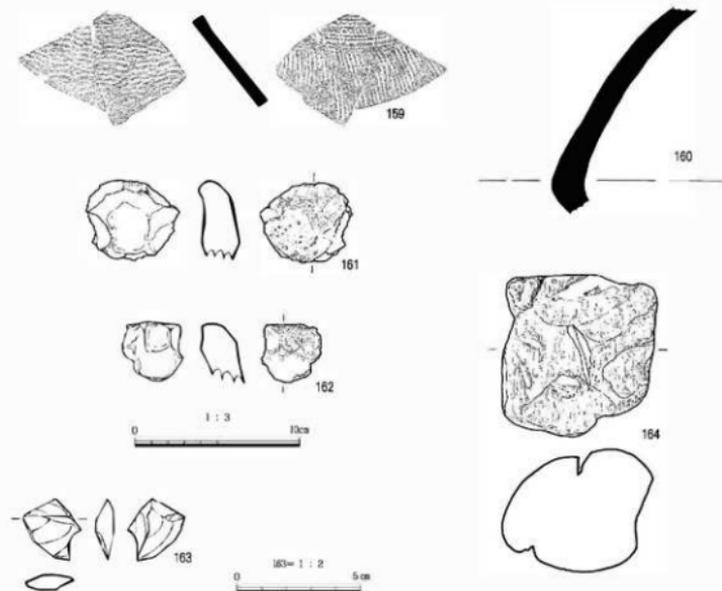
第51图 35号溝出土遺物①



第52图 35号溝出土遺物②



第53图 35号清出土遺物③



第54図 35号溝出土遺物④

138は土師器捏鉢である。粘土の接合痕が明瞭である。139と140は土師器鉢である。140の外側は粘土の接合痕が明瞭であり、内面は縦方向のナデ調整によって平滑化している。鉢の口縁部から底部付近のもので器形はコップ状を呈する。

141は土師器高杯の杯の受部であり、脚部との接合状況が観察できる。142は外方に開く高杯の脚部。

143と144はミニチュア土器とすべき粗い調整の土器である。143は壺形を呈し、おそらくは小さな平底となる。144は小碗状を呈する。

145は須恵器模倣杯である。胴部で屈曲した後に口縁部か直上に立ち上がる。

146～155は須恵器の杯蓋である。明らかな型式差を含んでおり、既存の編年観に照らしたとき、製作時の時期差があったことは明白である。146と147は蓋で147は丸味をもった側面形をなす。148～152は杯身である。148と149は立ち上がりが内傾した後にならずかに角度を変えて上方にのびる。外面下約1/3程回転ヘラ削りを施す。150はそれらに比べて立ち上がりが短く、上方にのびる。151は立ち上がりが短く内湾し、上方にのびる。器形が全体的に丸味をもつ。回転ヘラ削りが施される範囲は底部近くに限られる。152は立ち上がりが短く、器高が比較的低い。153はつまみのある杯蓋である。つまみは全体に平たく、中央部付近がわずかに盛り上がる。154は高台の付く杯身。高台が外方に張り出す。155は杯身の口縁部で直線的に外に開く。

156は腺である。頸部と体部の外面に沈線を巡らせる。体部のやや上位に穿孔を施す。口縁部はおそらくは意図的に破砕されと推定している。157も腺である。158は提瓶であるが、器形の全容は不明である。158aは突起部付近であり、わずかに把手としての名残とも取れる鍵状の構造を残すが、一見したところでは単なる突起にも見える。

159と160は須恵器の甕である。160は大甕の頸部付近である。

161と162は甕の羽口の破片である。いずれも先端付近の小片であり、全体形を復元できるものではない。

163は頁岩製の剥片、164は軽石製品である。164には切り込みの痕跡が認められる。用途等は明らかでない。

5号溝状遺構（第55図）

E-4区で検出された東西方向にのびる溝である。西側、東側は調査区外となる。南北溝SE35との関係は先に触れたとおりである。検出範囲の東側で北東-南西方向に走るSE27に切られている。溝の断面状は基本的に逆台形状を呈するが、東側では2段掘りとなり、南側が一段高くなってテラス状となる。埋土の中位付近で遺物が若干量出土している。なお、この溝の北で南北方向に並ぶ布掘りの柱穴が1対検出されているが、その性格は明らかでない。

5号溝状遺構の遺物（第55図）

165は土師器高杯の杯部から脚部にかけての個体である。166も土師器高杯の脚部である。いずれも内外面ともに風化が著しく調整は不明である。167は土師器甕の底部。分厚い平底となる。

168は須恵器杯蓋である。半径10.4cm程の矮小化した段階のものである。かえりは口縁端とほぼ同じ高さである。天井に宝珠つまみが付く。169は壺の口縁部～頸部の破片であり、口縁部に2条の凸線を巡らせている。

24号溝状遺構（第56図）

D-7区付近で2号溝と重複する南北方向の溝。ほぼ同じ南北方向に走るSE2に切られる関係にある。検出面での幅は約2m、深さは約0.6mで断面形は逆台形状を呈している。C-8区(A-A')での断面観察によれば、この溝と重なる溝(SE246)が存在したようであり、24号溝に先行するものであることが分かる。

24号溝状遺構の遺物（第57図）

170と171は須恵器の蓋杯の杯身。171は短く内傾する立ち上がり有する。受部は短く稜は鈍い。171は立ち上がりが上方に向かう。底部が平らに近い点は同様である。

172は土製の支脚の破片である。内外面にナデ・指ナデ調整の痕跡が残る。

173は砂岩製の敲石である。上下面ともに敲打痕が認められる。

25号溝状遺構（第56図）

C-5区からE-5区にかけて東西方向に走り、E-5区でSE24の北端部が直角に接合する。D-5区で一旦途切れるが約30m西側で再度出現する。現代の水路敷設に伴う削平による現象か。検出面での幅は約1m、深さは0.24mである。

25号溝状遺構の遺物（第58図・第59図）

174～178は土師器の甕である。174は口縁部が緩やかに外反するものである。176は分厚い円盤状の

底部である。177は口縁部から底部まで残存している個体である。胴長で下膨れの器形を呈し、底部は丸底となる。

179は鉢形あるいは碗状の器形を呈する土師器。口縁下部の外面に鈍い稜が形成される。

180は土師器高杯か台付鉢の脚部。181は高杯である。丹塗りがなされているが剥離が著しい。脚部は屈曲することなく外方に大きく開く。

182～184は須恵器の蓋杯である。182は杯蓋で天井は平らとなる。上部外面の1/3程に回転ヘラ削りが施される。184は杯身である。立ち上がりが直線的に内側にのびる。やはり底部外面の1/3程度回転ヘラ削りがなされる。186と187は壺である。186は球形の体部をなす。口縁部の形状は不明である。187は直線的に外に開く口縁部を有する。厚手のつくりである。

188は須恵器の横瓶である。口縁部を欠く。外面に平行叩きやカキ目、内面に同心円文が認められる。また外面に線刻がみられる。粘土の接合痕が部分的に明瞭に観察できる。

2号溝状遺構（第3・4・56図）

北はD・E-6区付近でSE24と重複して走り、南はE-11区で直角に曲がって東に向かい、隣接する宮崎市教育委員会の調査区に続く溝を2号溝と名付けたが、遺構分布図（第4図）でも明らかであるとおおり、E-10区で2本の溝が重なっている。混乱を避けるために調査時の遺構番号はそのままとしたが、切りあい関係から宮崎市教育委員会の調査区に続く南側溝が古く、2号溝状遺構を切る北側溝が後に掘削されたものであることが分かる。前者を「2号南溝」、後者を「2号北溝」と呼ぶこととする。2号北溝の北端の状況は明らかでない。これは現代の水路掘削の影響であろう。

2号溝状遺構の遺物（第61図・第62図）

上述の重複する溝のうち、遺物が多数出土したのは2号北溝の方である。特にD-6区～E-7区付近で土師器が集中して出土した。

189～207は土師器の煮沸具。甕が大半を占めるが、壺に近い器形の個体（196～198など）がある点は35号溝出土遺物と同様である。器面は工具によるナデ調整が施されるが、摩滅により不明瞭なものも多い。粘土の接合痕を残すものも一定数ある。底部は安定した平底から丸底のものまで多様である。201のように木葉圧痕が付くものもある。

208と209は土師器台付鉢の脚部。210は土師器高杯の脚部であろう。

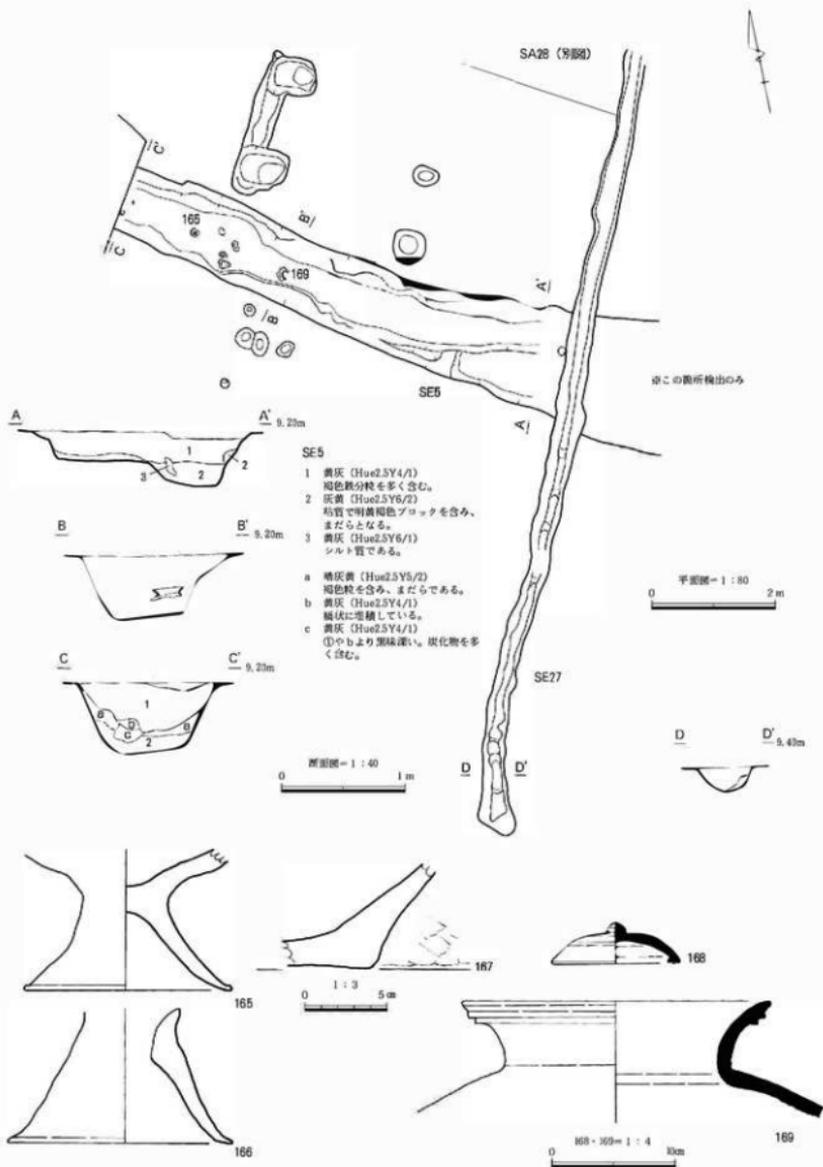
211～213は土師器の鉢である。211は緩やかに外反する口縁部付近の個体で、甕のそれに近い形状を示す。213は底部と体部の間、および体部下部に粘土の接合痕が認められる。

214は土師器の杯（いわゆる須恵器模倣杯）である。口縁部と体部の境で屈曲し、口縁部が直に立ち上がる。224は土師器杯か碗の口縁部破片である。

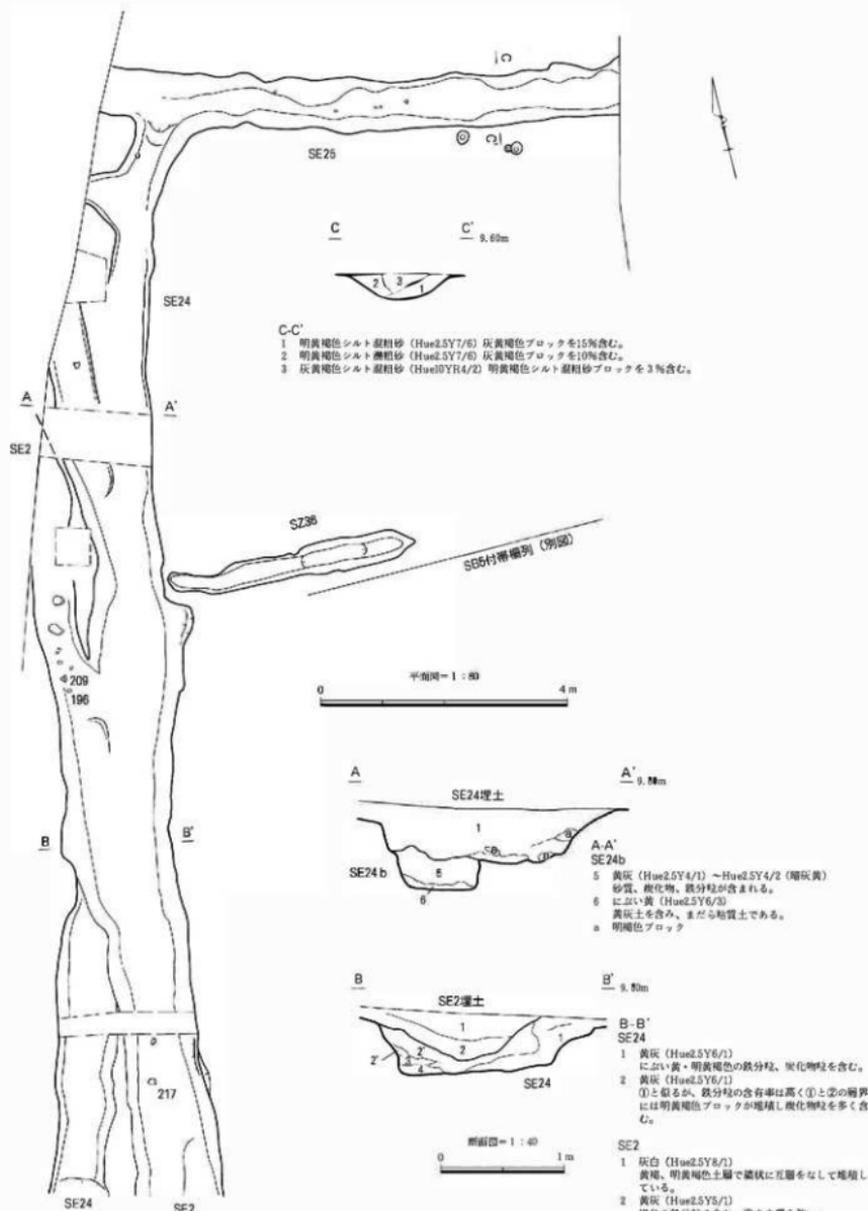
215～223は須恵器蓋杯である。215は平たなつまみを有する杯蓋の完形品。口縁部と体部の境に段を形成し、口縁部は直線的に外にのびる。216は丸みを持つ器形を呈する杯蓋。217～223は杯身で立ち上がりがわずかに反りながら内側に向かう。立ち上がりは概ね短く、221などは肉厚となる。回転ヘラ削りが施される部位は底部側の約1/3程である。

225と226は須恵器碗の口縁部、227は須恵器の小壺の頸部～底部付近である。体部は概ね球形で外面は回転ヘラ削り調整が施される。

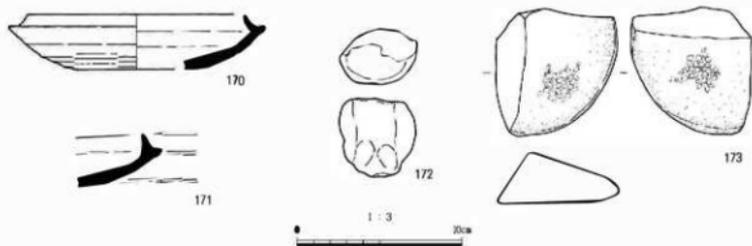
228はチャート製の火打ち石である。229は軽石製品、230は砂岩製の凹石である。



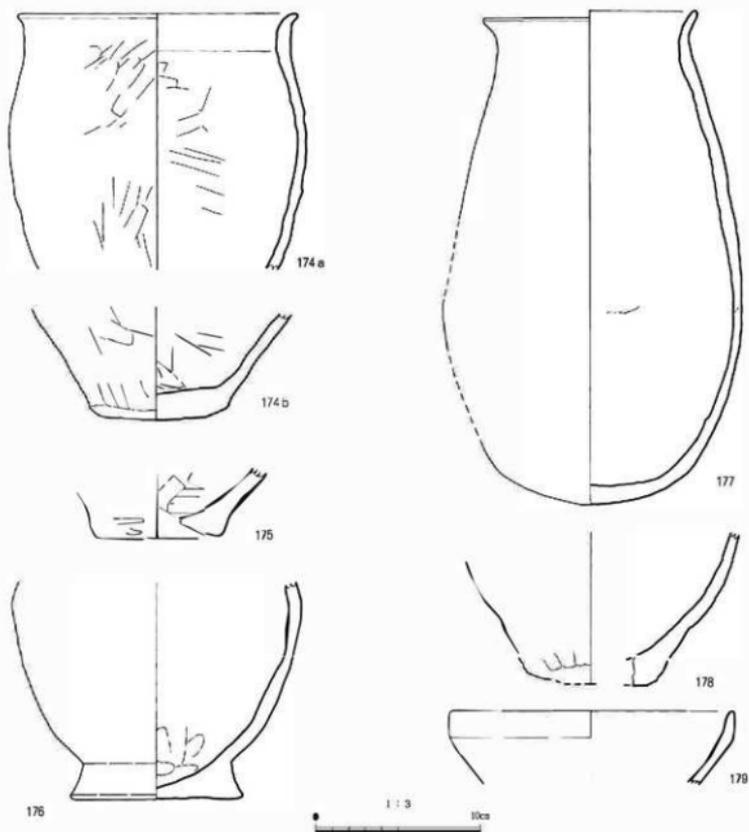
第55図 5号溝・5号溝出土遺物



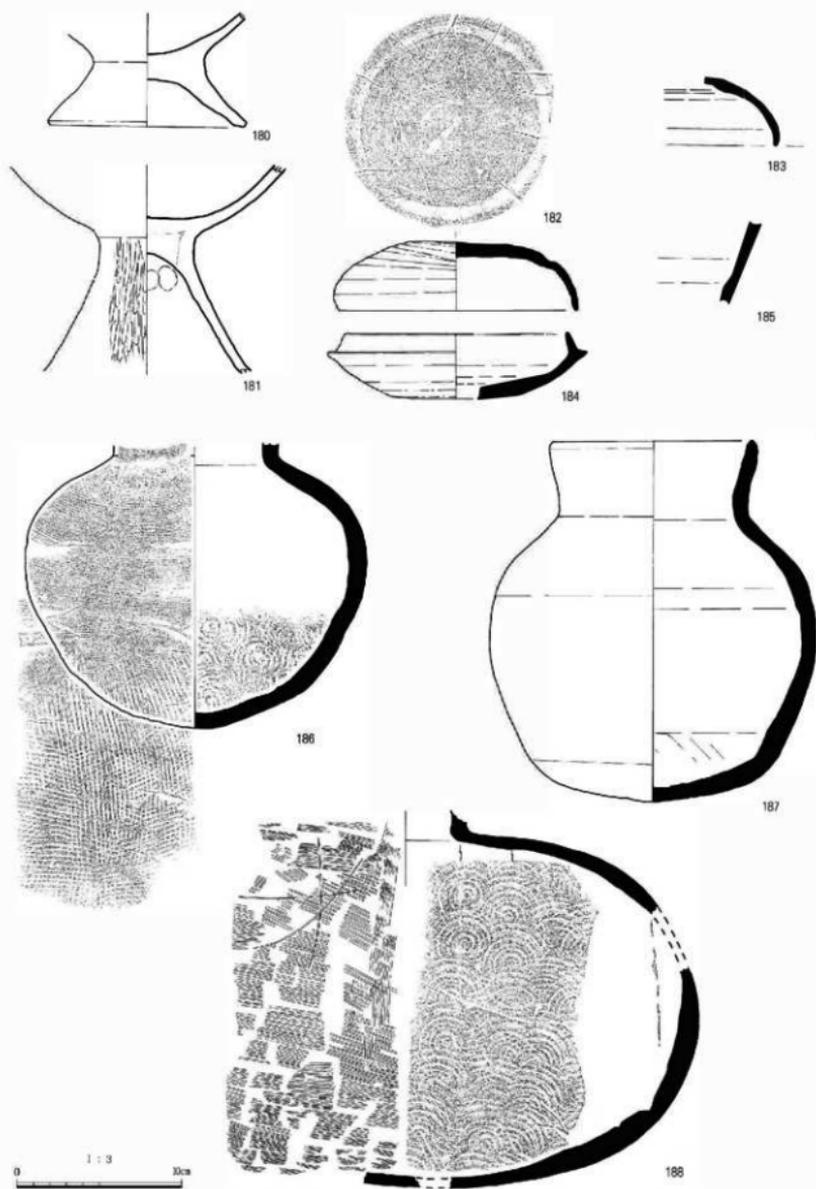
第56図 2号溝・24号溝・25号溝主要部



第57图 24号溝出土遺物



第58图 25号溝出土遺物①



第59图 25号溝出土遺物②

9号溝状遺構（第4図）

A-8区～E-9にかけて北西-南東方向に走り、宮崎市教育委員会の調査区に向けてのびる。北西端のB-8区で二股に分かれている。2号南溝と交差する。検出面での幅は約0.9m、深さは約0.85mである。

9号溝状遺構の遺物（第63図）

231は土師器壺の口縁部で大きく端部が外反する。232～234は土師器甕・壺の底部。234には木葉の圧痕が付く。235は土師器碗か杯の底部で内外面とも摩滅している。236は土師器高杯の杯部と脚部の接合部である。

237は須恵器の横瓶の頸～肩部である。これも摩滅により外面の調整が不明瞭となっている。

20号溝状遺構（第4図・第5図）

調査区内の東端近くのE-6～8区を北東-南西方向に走る。南西端は2号北溝に合流する形となる。溝の幅は約0.5m、深さは約30cm程である。

20号溝状遺構の遺物（第64図）

238は須恵器瓶の胴部～底部である。安定した平底となり、体部下から底面にかけて回転ヘラ削りによる調整が施される。

22号溝状遺構（第5図）

SE9と同様、北東-南西方向に走る。北東端、南西端ともに調査区外にのび、全容は不明となっている。幅の狭い小溝SE143が注ぎ込む形となる。検出面での幅は約0.9m、深さは約40cmである。

22号溝状遺構の遺物（第65図）

239～241は土師器甕である。239は口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部がやや膨らむ。底部には木葉圧痕が認められる。

242は土師器杯である。口縁部下位で緩く屈曲し、口縁部が直立気味に立ち上がる。

243・244は須恵器の小壺である。243は口縁部の破片で口唇部が窄まる。245は須恵器の大甕の胴部である。焼き重みによりいびつな形状となっている。

246は、銅を芯材とする耳環である。D-10区南寄りの溝底面近くのレベルで出土した。様々な要因による表面の劣化のため、表面材は確認不能となっている。

67号溝状遺構（第66図）

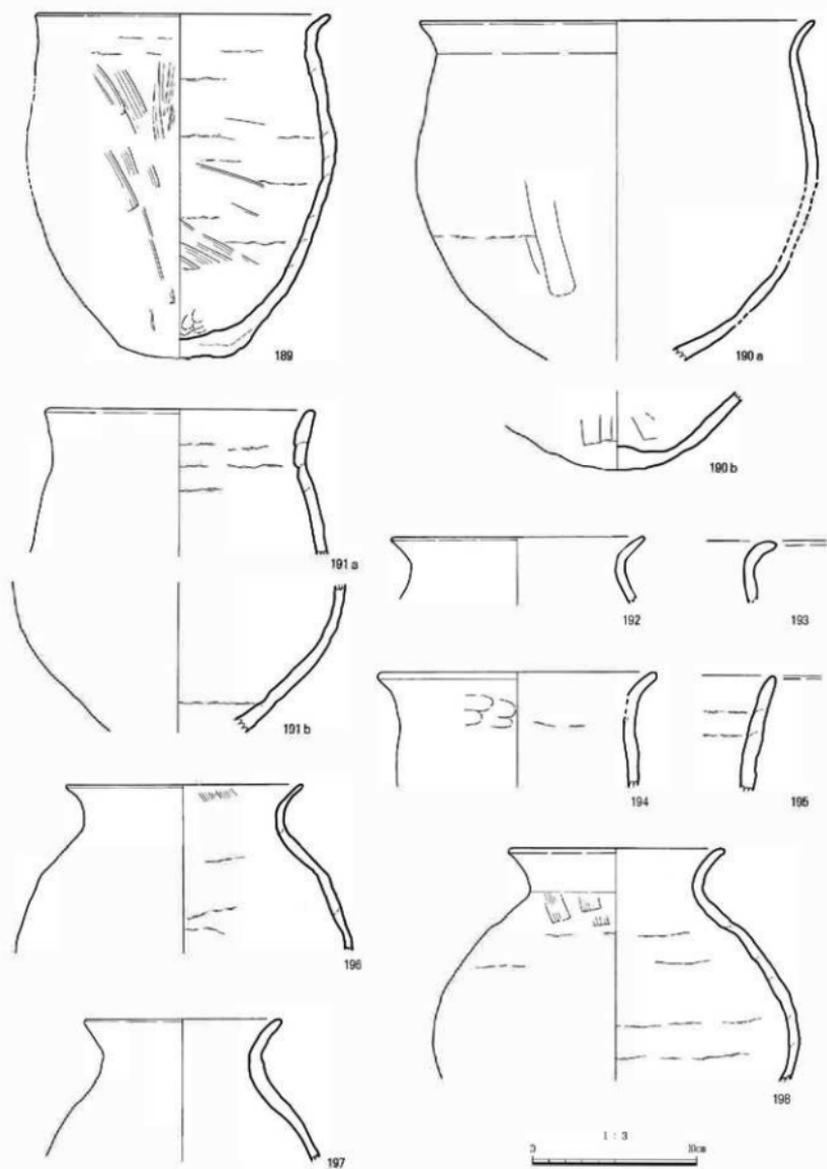
B-8区からD-9区にかけてSE9と平行に走り、南に屈曲した後にSC21の西で連続する凹部を形成して不明瞭となり、終点を迎える。検出面での幅は約1.6m、深さは約40cmである。溝の断面形は逆台形状を呈する。SZ176と重複する。C-9区付近の埋土中より土器が多数出土したが、小破片が多くまとまりはない。

67号溝状遺構の遺物（第67図）

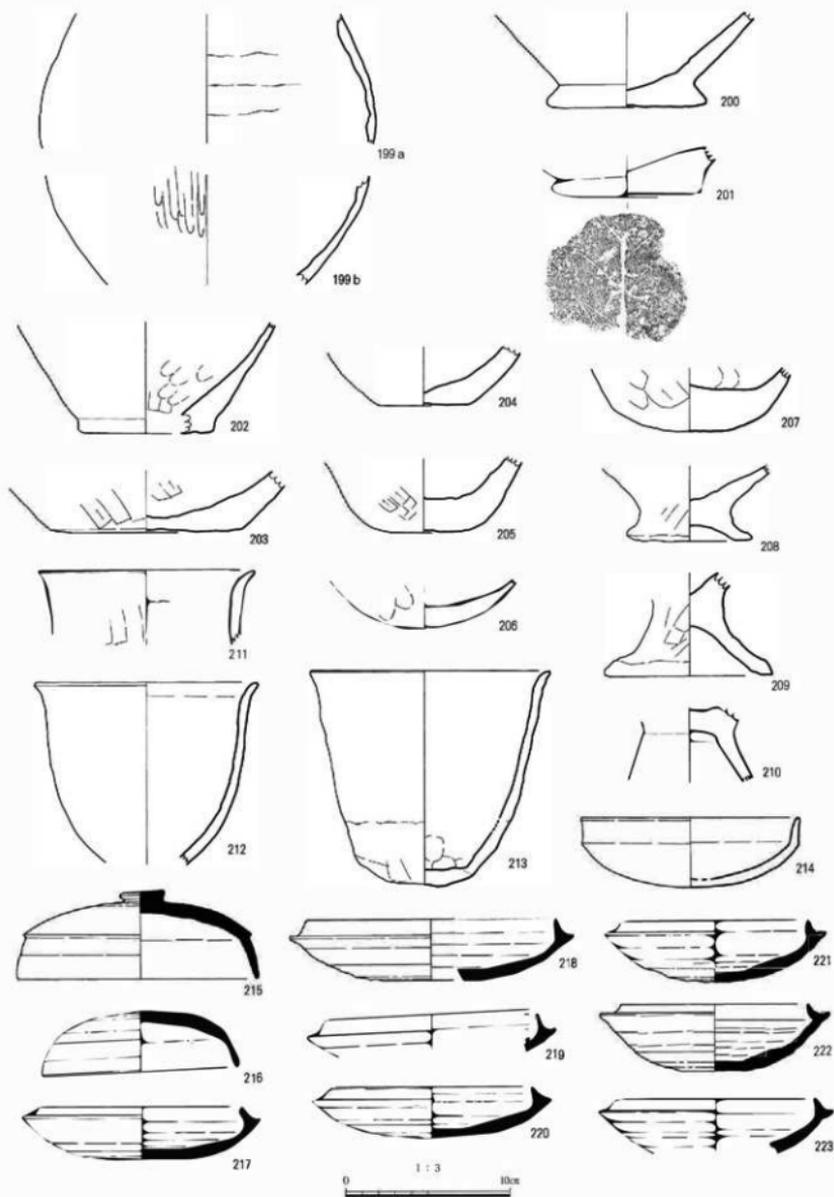
247は土師器甕の口縁部で、直に立ち上がる。248と249は甕の底部。249には木葉圧痕が残る。250は須恵器の杯蓋。251は須恵器の跡である。口縁部に意図的に打ち欠いた痕跡が認められる。

30号溝状遺構（第4図）

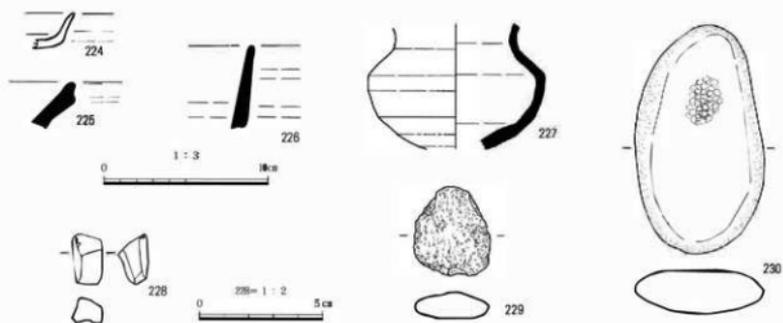
自然の流路のように不整形のものであり、平面形を明確に捉えることはできない。ただし遺物がまとまって出土しており、その広がりをもって遺構と捉えた。



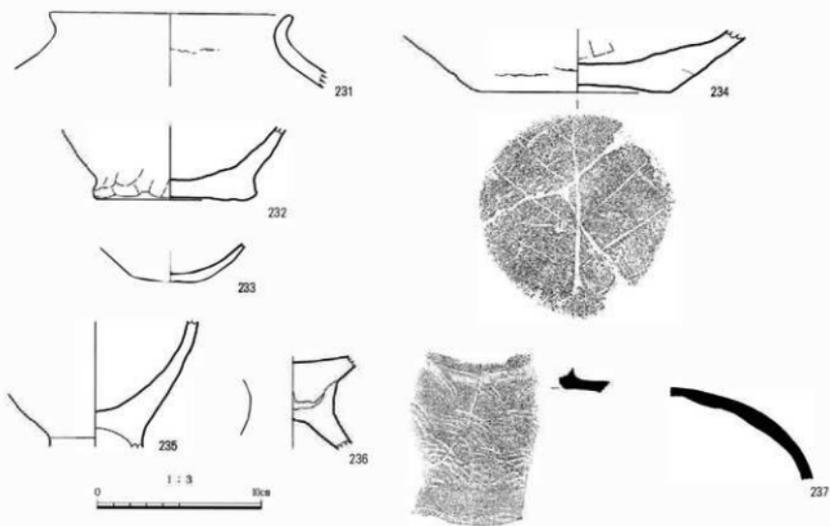
第60图 2号溝出土遺物①



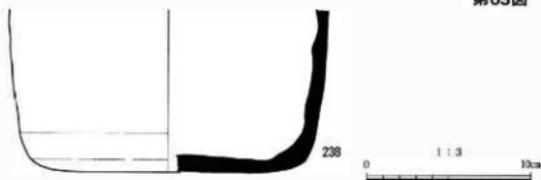
第61图 2号溝出土遺物②



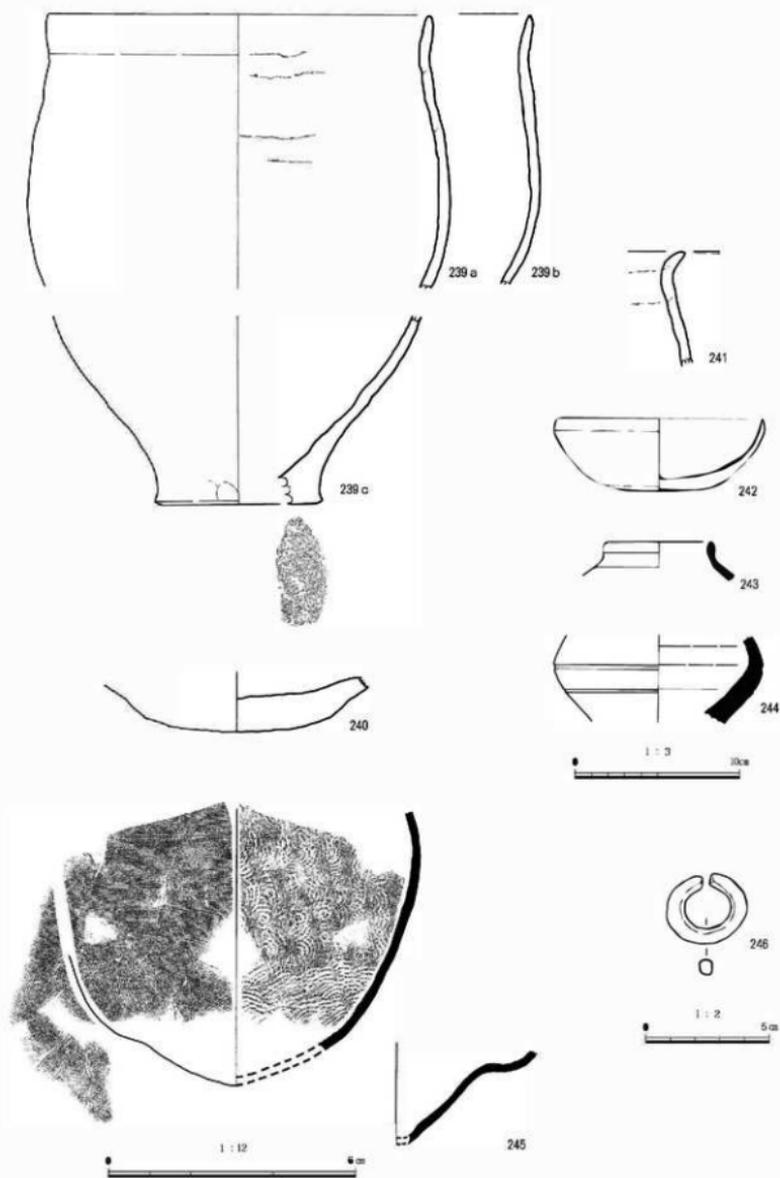
第62图 2号溝出土遺物③



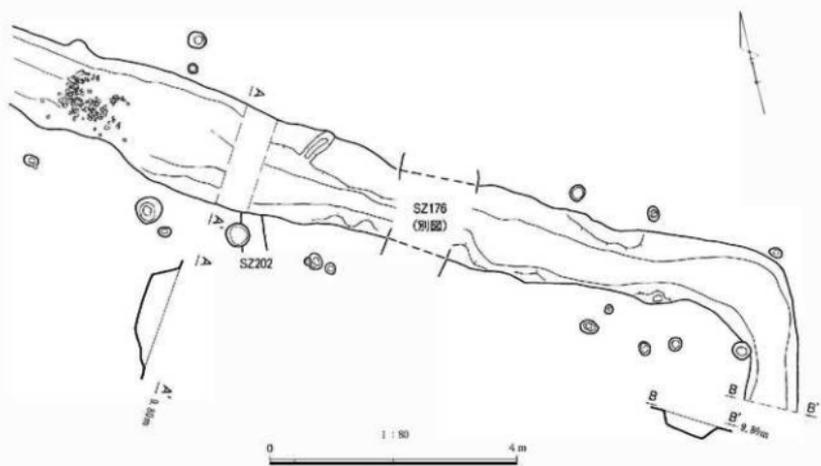
第63图 9号溝出土遺物



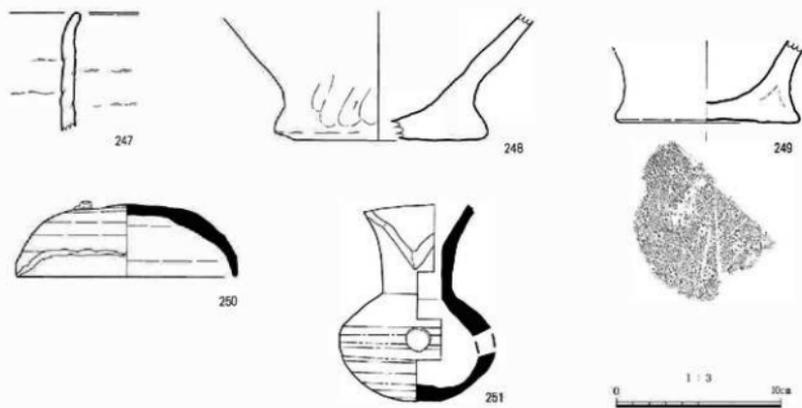
第64图 20号溝出土遺物



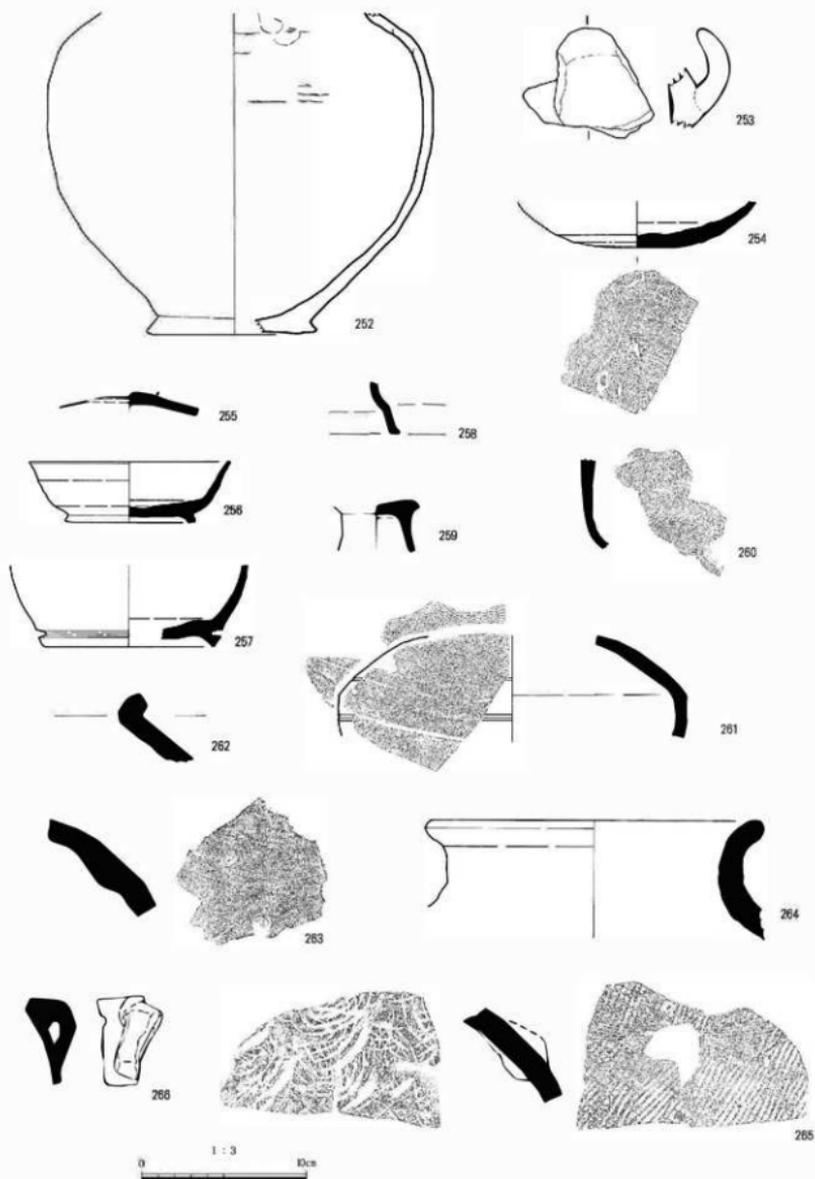
第65图 22号沟出土遗物



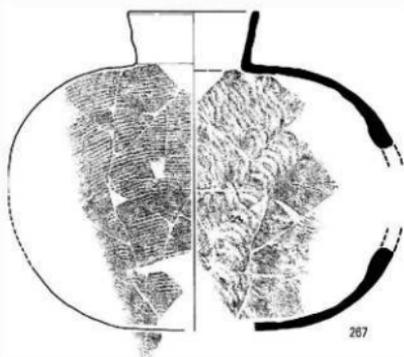
第66图 67号沟主要部



第67图 67号沟出土遗物



第68图 30号溝出土遺物①



267



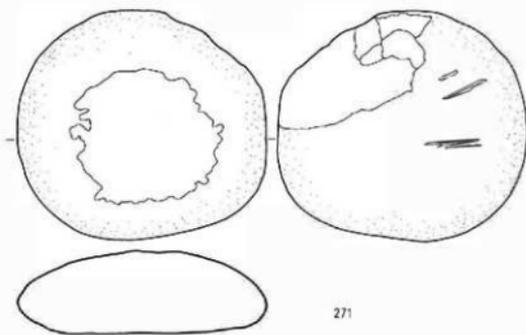
268



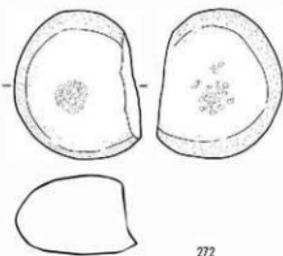
269



270



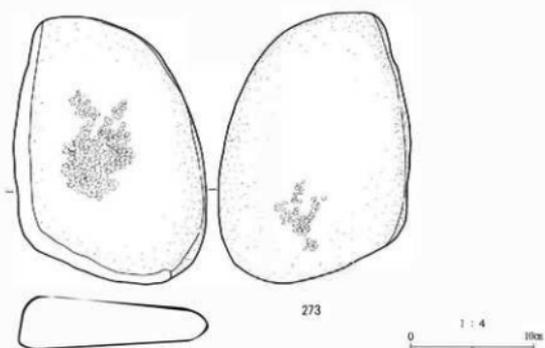
271



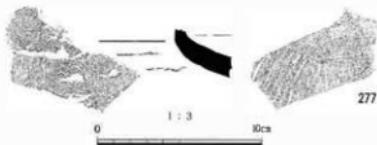
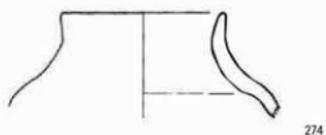
272



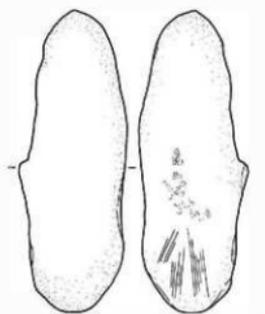
第69図 30号溝出土遺物②



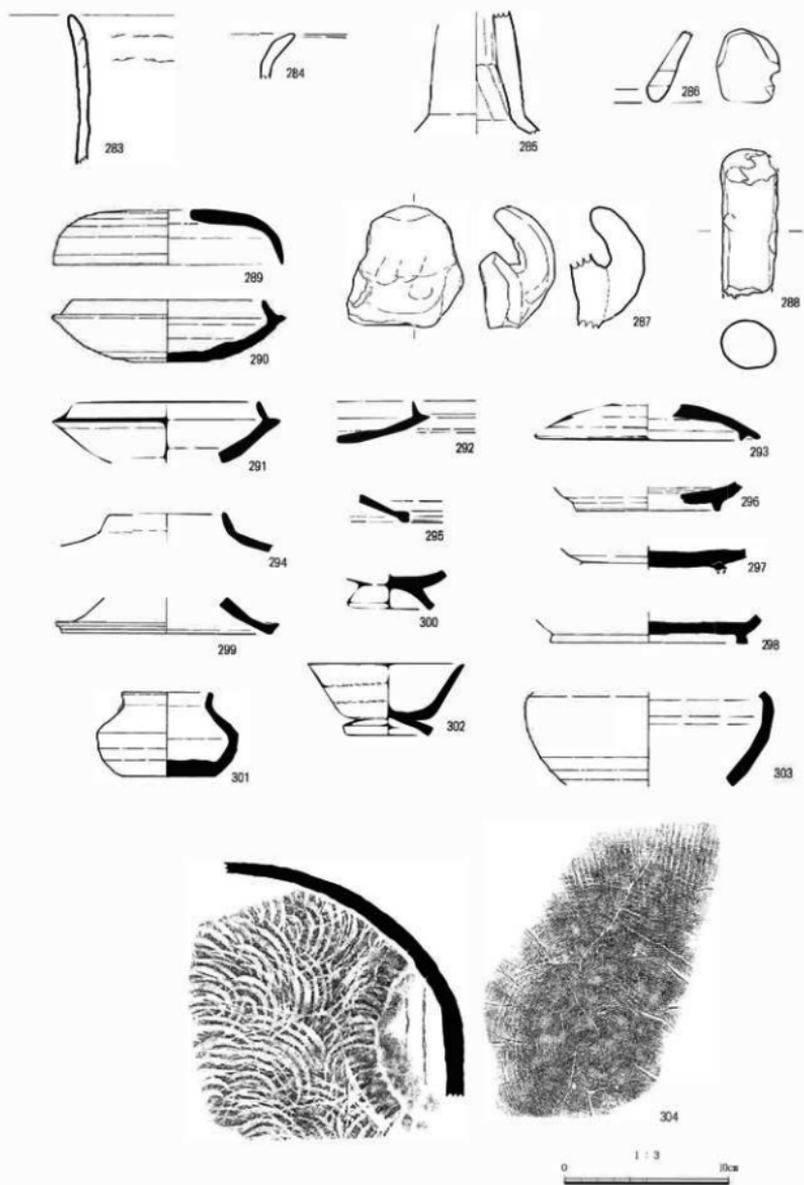
第70図 30号溝出土遺物③



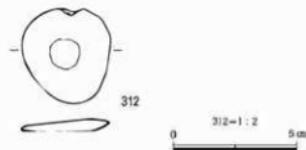
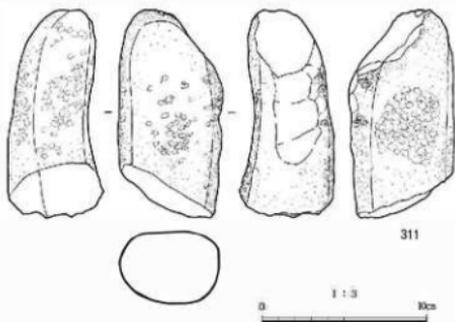
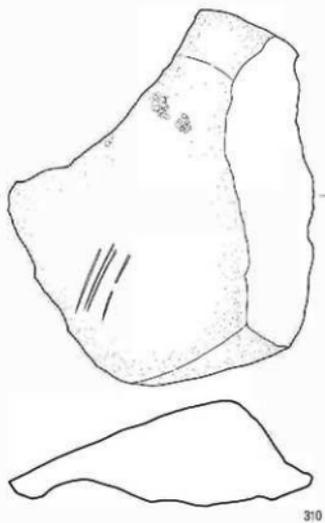
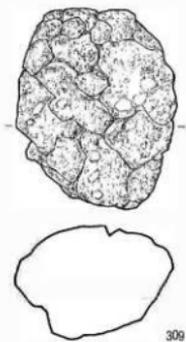
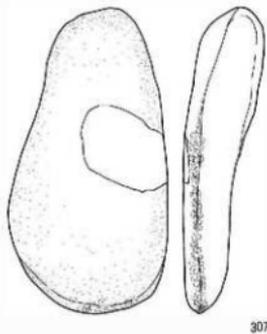
第71図 33号溝ほか溝状遺構出土遺物



第72図 小穴出土遺物



第73図 包含層その他出土遺物①



第74図 包含層その他出土遺物②

30号溝状遺構の遺物（第68図・第69図）

252は土師器甕の頸部から底部にかけての個体。安定した平底となる。体部の上部に粘土の接合痕が観察できる。253は土師器の甕の把手部分である。

254～257は須恵器の蓋杯である。254は蓋の天井部付近であった可能性もある。255は須恵器の杯蓋であり、つまみが剥落している。256と257は高台の付くもので、257は碗とすべきか。

258～261は須恵器の高杯である。258と260は脚部、259は基部にあたる。260には櫛描波状文が施される。

261は須恵器長頸壺の胴部である。最大径部となる胴部の上部が鈍く屈曲し、その付近に櫛描波状文を施している。266は須恵器の壺の肩部に付く把手の部位であろう。

262～265、及び268～270は須恵器の甕であろう。264は口縁部の破片で緩やかに外反する。265は頸部付近の破片であり、焼成時の破裂痕が確認できる。

267は須恵器の横瓶である。側面長軸側の一方が円窓状に開く。外面に平行叩き、内面に同心円弧状の当て具痕跡が認められる。

271は砂岩製の台石、272～273は砂岩製の凹石である。

33号溝状遺構（第6図）

E-8区で検出された。南東から北西方向に向けて流れ、幅が広がって、2号北溝に流れ込むような状況となる。検出面での幅は0.8m。深さは30cmに満たない浅い溝である。

33号溝ほか溝状遺構出土遺物（第71図）

274は土師器の甕。口縁部は内傾したのち、直上に立ち上がる。

275は須恵器の甕の胴部片で、外面に格子目叩きが施される。276は須恵器の直口壺の口縁部。277はおそらくは須恵器の甕の頸部付近である。

（6）小穴出土遺物と遺構外の出土遺物

掘立柱建物の柱穴以外の小穴から出土した遺物を第72図に掲載した。また包含層その他から出土した遺物については第73・74図に示した。

278は須恵器の高台付杯である。かなり中央寄り比較的小さな高台を貼り付ける。279は杯蓋で、天井部に平坦面を形成し、口縁部は内側に短く折り曲げる。280は高台の付く杯身で、鈍く屈曲する腰部を形成して、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。底面端部近くにわずかに外に向く高台を貼り付ける。

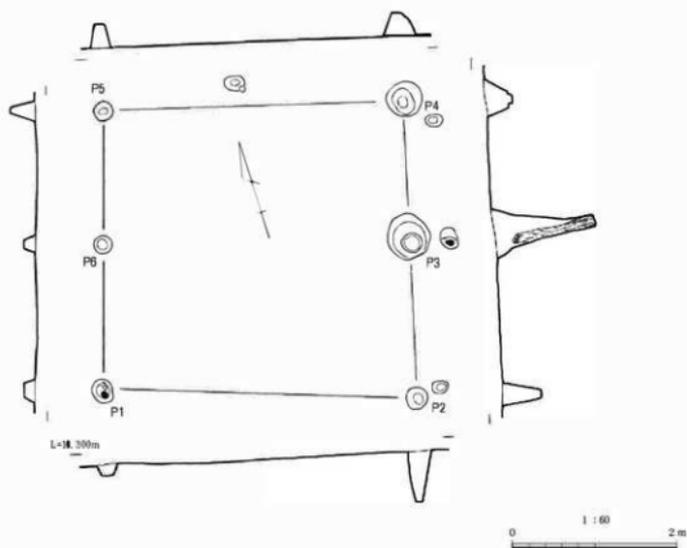
282は砂岩製の敲石である。

283～312が遺物包含層のⅡ層や表土中などより出土した遺物である。283と284は甕の口縁部である。283は端部がわずかに内側に傾く。粘土の接合痕が確認できる。

285は土師器の高杯の脚部である。脚柱部は円柱状となり、裾部はラッパ状に開く。

286と287は甕である。286は底部の破片、287は把手の部位である。288は土製の支脚である。

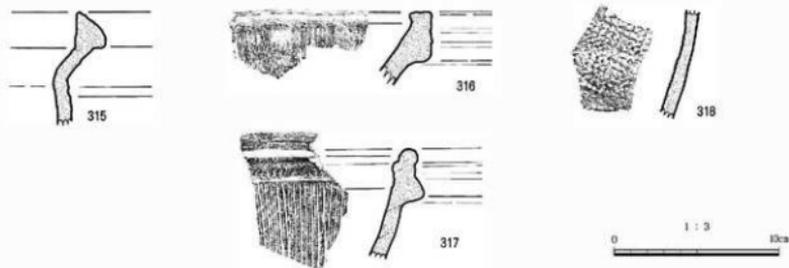
289～293と295～298は須恵器の杯蓋である。289は蓋であり天井部は平らとなり、その近くのみ回転ヘラ削りを施す。290～292は杯身で立ち上がり内側に直線的にのびる。293は口縁端部とはほぼ同じ高さの罫りを有する蓋である。つまみの有無は不明。295は口縁端部を内側に短く折り曲げる蓋である。



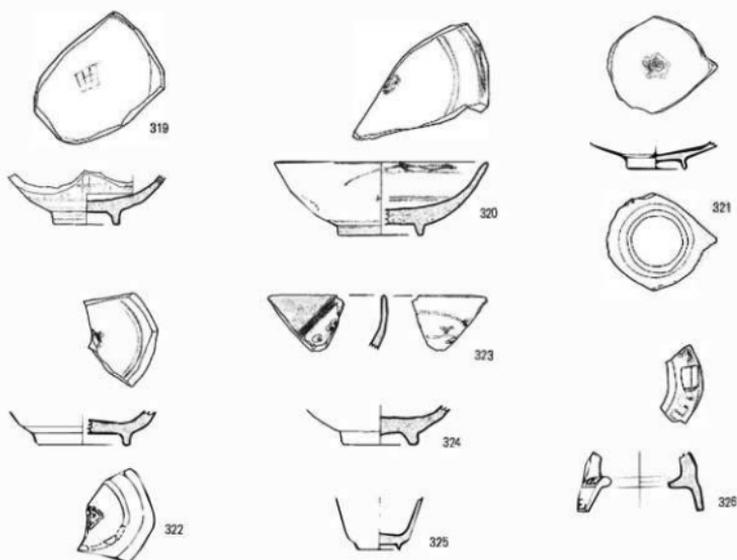
第75図 7号掘立柱建物



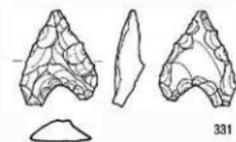
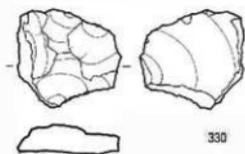
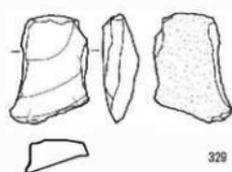
第76図 中世の遺構内出土遺物



第77図 中世の遺構外出土遺物



第78図 中近世の出土遺物



第79図 出土石器

296～298および302は高台付の杯である。298は高台の貼り付け部位から直線的に体部がのびる。高台は接地面が平坦となる。302はやや異質な高台の付くもので、杯部も深く、鉢や椀に近い。

294は須恵器の壺で頸部から内傾気味に立ち上がる。301は須恵器の小壺である。303は須恵器の壺の胴部で球形状を呈する。300は直線的にのびる高台部位である。壺に付く高台であろうか。299は須恵器高杯の裾部。304は須恵器横瓶の胴部である。内面に粘土の接合の痕跡が認められる。外面にはカキ目が残る。

307と308・311は敲石である。311は前述のとおりS A 88出土。309は軽石製品である。310は台石である。312は石錘であろう。砂岩の礫を用いている。

第4節 中近世の遺構と遺物

本調査区で検出された遺構の主たる時期は、古墳時代後期から古代にかけてのものであるが、少量ながら中世の遺構や中近世の遺物が確認されている。中近世の遺物は、B～D-9区付近で比較的多くみられた。遺構としては掘立柱建物1棟と溝が確認され、遺物は白磁や青磁、備前焼、常滑焼、刀子や、土師器杯・皿類が出土している。

(1) 掘立柱建物

7号掘立柱建物跡(第75図)

B・C-8・9区で検出された。67号溝状遺構と22号溝状遺構の間に位置している。梁行1間×桁行2間の掘立柱建物である。柱穴端部間の遺構長は四辺とも4.0mである。遺構主軸はN-16°-Eをとる。P2-3には柱材が遺存しており、沈下したためか他の柱穴底面レベルよりかなり下まで入り込んでいた。分析の結果、樹種は広葉樹のスタジイであることが判明している。遺跡の周辺の照葉樹林で採取可能であった木材と考えられる。

柱穴P1-3内より遺物(313)が出土している。鎧蓮弁文様を有する青磁碗である。

(2) 溝状遺構

23号溝状遺構(第27図)

E・D-9・10区に位置する。21号土坑と導水の小溝を切る。検出面での幅は約0.9m、深さは20cm程度である。南端近くの埋土中より白磁の口縁部小破片(314)が出土した。

(3) 遺構外の出土遺物

まとめて第77・78図に掲載している。また時代不明であるが石器もここで扱う(第79図)。石材などの詳細は計測表を参照されたい。

315は陶器の備前焼の甕である。口縁部が「く」字状に外反し、外面に凹線文を施している。316は備前焼の播鉢である。口唇部と外面に凹線文を施している。内面に10条を原体とする播目を有する。317は播鉢の口縁部で外面に2条の凹線文が施されている。内面には7条を原体とする播目を有する。近世の堺赤石系の所産と思われる。318は近世の唐津焼の甕である。外面に横方向のナデを施し、内面に格子目叩きを有する。

319は磁器碗である。内面に蛇ノ目釉剥ぎがみられる。320は磁器の染付碗で、見込五弁花コンニャクと蛇ノ目釉剥ぎがみられる。321は筒型碗の底部で見込五弁花コンニャクがみられる。内外面に施釉と回転ナデがみられる。322は青磁碗の底部である。見込五弁花コンニャクを底部の中央付近に施す。323は肥前系の染付皿である。324は龍門寺系薩摩焼の碗である。内面に蛇ノ目釉剥ぎが施される。濃緑色の釉を施している。325は白磁の小坏の胴部～底部で、内外面に貫入がみられる。近世の唐津焼であろう。326は磁器の蓋付香炉の頸部である。327と328は灰黒色を呈する近世の瓦である。

329と330は剥片である。331は打裂石鏝である。表土中で採集されたものである。

第1表 宮ヶ迫遺跡土器観察表

No.	出土位置	種類	形状	線径	重量(g)	手取・調整・文様物		胎土の特徴		色調	
						手取	調整	内面	外面	内面	外面
1	SAB	土師製	黄	胴部～底縁	12		斜め方向の工痕ナデ	斜め方向の工痕ナデ	3mm以下の灰白色。灰白色の粒を多く含む。2mm以下の赤い赤褐色を少し含む。	浅黄褐色(598/A)	灰白(1096/2) 灰(595/F)
2	SAB	土師製	黄	胴部	10		ナデ	ナデ	3mm以下の灰白色。灰白色の粒を多く含む。5mm以下の黒褐色を少し含む。	浅黄褐色(598/A)	黄緑(1096/F1)
3	SAB	土師製	藍	底縁	6.2		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	2mm以下の赤い赤褐色。明褐色の粒を多く含む。	浅黄褐色(598/G)	灰白(1096/G2)
4	SA4	土師製	黄	底縁	6.1		風化面しく調整不明	工ナデ・磨削面	5mm以下の粒と2mm以下の灰白色を多く含む。赤褐色の粒を多く含む。	黄緑(597/G)	黄緑(596/G)
5	S2	土師製	黄	口縁～底縁	12	3.1 4.9	風化面しく調整不明	風化面しく調整不明	2mm以上の赤褐色。赤褐色の粒を多く含む。	赤い(597/F)	黄緑(597/G)
6	S2	土師製	黄	口縁～底縁	12	6.2	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	2mm以上の赤褐色を多く含む。2mm以下の赤褐色の粒を多く含む。	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
7	S2	土師製	黄	口縁部			回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰(597/F)	灰(597/F)
8	S2	土師製	黄	底縁			削削	平行の削削	黄褐色で調整。3mm以下の黒褐色の粒を含む。	灰(596/F)	灰(596/F)
9	S3	土師製	黄	底縁			回転ナデ	回転ナデ	黄褐色で調整。	灰(597/F)	灰黄緑(1096/G2)
10	S12	土師製	黄	口縁部	4.6	4.0	黄褐色	磨削面しく調整不明	3mm以下の赤褐色。2mm以下の黒褐色の粒を多く含む。	灰(597/F)	浅い黄緑(1096/G)
11	S16	土師製	黄	口縁部	9.2	2.4	黄褐色	ナデ	3mm以下の赤褐色。黄褐色の粒を多く含む。黄褐色良好	黄緑(1096/G)	赤い(597/F)
12	S16	土師製	黄	口縁部	3.6	3.4	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色(2mm以下の灰白色)を少し含む。1調整	灰(597/F)	灰(596/F)
13	S16	土師製	黄	口縁部			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	黄褐色(2.597/F)	灰(597/F)
14	SC2	土師製	黄	口縁部			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	5mm以下の灰白色。4mm以下の黒褐色を多く含む。	浅黄褐色(598/A)	灰白(1096/G2)
15	SC2	土師製	黄	口縁部			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	2mm以上の赤い赤褐色の粒。明褐色の粒を多く含む。	浅黄褐色(598/A)	浅い黄緑(598/G)
16	SC2	土師製	黄	口縁部	19		ナデ	ナデ	1mm以上の赤褐色。2mm以下の赤褐色の粒を含む。	黄緑(598/G)	灰(596/F)
17	SC2	土師製	黄	口縁部			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
18	SC2	土師製	黄	口縁部	3.7	4.2 24.2	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	5mm以上の黒褐色の粒と2mm以上の灰白色を含む。明褐色の粒を多く含む。	赤い(1096/G)	灰白(1096-G)
19	SC2	土師製	黄	底縁	11.3		磨削面	磨削面	4mm以下の赤褐色の粒を多く含む。	黄緑(598/G)	黄緑(1096-G)
20	SC2	土師製	黄	口縁部	12.8		磨削面	磨削面	6mm以上の赤褐色の粒。2mm以上の赤褐色の粒を多く含む。	灰(597/F)	灰(597/F)
21	SC2	土師製	黄	底縁	6.5		ナデ	ナデ	6mm以上の赤褐色の粒。2mm以上の赤褐色の粒を多く含む。	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
22	SC2	土師製	黄	底縁	5		ナデ	ナデ	6mm以下の赤褐色の粒を多く含む。	黄緑(598/G)	灰(597/F)
23	SC2	土師製	黄	胴部～底縁	4		風化面しく調整不明	風化面しく調整不明	2mm以上の黒褐色の粒。明褐色の粒を多く含む。	黄緑(598/G)	黄緑(1096-G)
24	SC2	土師製	黄	底縁			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	2mm以下の赤褐色。赤褐色の粒を多く含む。	黄緑(1096/G)	灰白(1096/G2)
25	SC2	土師製	黄	口縁部	13.1	5.5	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	4mm以下の赤褐色。灰白色。黄褐色。明褐色。黒褐色の粒を多く含む。	灰(1096/G)	灰(597/F)
26	SC2	土師製	黄	口縁部	11		回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の赤褐色を少し含む調整。	灰(597/F)	灰(596/F)
27	SC2	土師製	黄	口縁部	9		回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の赤褐色を少し含む調整。	灰(596/F)	灰(596/F)
28	SC2L	土師製	黄	底縁			斜め方向の工痕の跡	斜め方向の工痕の跡	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	灰(597/F)
29	SC2	土師製	黄	底縁			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
30	SC2	土師製	黄	胴部～底縁			磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
31	SC2	土師製	黄	底縁	4		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
32	SC13	土師製	黄	底縁	0.5		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	黄緑(598/G)	黄緑(598/G)
33	SC14	土師製	黄	胴部～底縁	4.4		ナデ	ナデ	6mm以下の赤褐色。赤褐色の粒を多く含む。6mm以下の赤褐色の粒を多く含む。	灰(597/F)	黄緑(1096/G)
34	SC14	土師製	黄	口縁部	18	7.8	ナデ	ナデ	7mm以下の赤褐色。赤褐色の粒を多く含む。	灰(1096/G)	黄緑(1096/F)
35	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6	4.9	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
36	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
37	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
38	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
39	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
40	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
41	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
42	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
43	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)
44	SC14	土師製	黄	口縁部	14.6		磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	磨削面しく調整不明	灰(597/F)	黄緑(598/G)

№	出仕番号	種別	職名	所定	法第(項)	手立・調整・文物物	取上の種類	色紙
45	507	研修	研修	研修	研修	研修	研修	研修
45	507	研修	研修	研修	研修	研修	研修	研修
46	5219	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
47	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
48	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
49	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
50	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
51	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
52	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
53	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
54	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
55	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
56	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
57a	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
57b	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
58	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
59a	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
59b	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
60	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
61	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
62	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
63	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
64a	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
64b	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
64c	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
65	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
66	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
67	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
68	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
69	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
70	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
71	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
72	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
73	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
74	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
75	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
76	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
77	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
78	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
79	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
80	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
81	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
82	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
83	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
84	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
85	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
86	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修
87	5236	土研研	研修	研修	研修	研修	研修	研修

No. 番号	出仕 番号	種別	種別	項目	基準(m)	手法・調整・文相		色調			
						方法	内容	色調	内容		
88	33	土研	土研	土研	25.5	9	22.9	原料質であるがナ ダ	7mm以下の粒径が多くなるが 赤色	橙(3)97/60	橙(3)97/70
89	33	土研	土研	土研	25.5	9	22.9	原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰色の粒が多くなる 赤色	橙(3)95/60	橙(3)97/60
90	33	土研	土研	土研	14.2			原料質であるがナ ダ	3mm以下の赤褐色の粒が多くなる 4mm以下の黄灰色の粒が多くなる 4mm以下の赤褐色の粒を含む 5mm以下の乳白色の粒を含む 4mm以下の白土の粒を含む	赤(2)95/67(4) 赤(2)95/68(4)	橙(3)97/60
91	33	土研	土研	土研	16.8			原料質であるがナ ダ	4mm以下の赤褐色の粒が多くなる 赤色	赤(2)97/60	橙(3)97/60
92	33	土研	土研	土研	27.5			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色が多くなる 8mm以下の赤褐色の粒を含む 4mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の乳白色の粒を含む	橙(2) 597/60 赤(2) 597/60 赤(2) 598/60	黄褐色(10)96/40
93	33	土研	土研	土研	8.4			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・黄褐色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 597/60 赤(2) 597/71	黄褐色(7) 597/71
94	33	土研	土研	土研	16.8	30.3		原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2)97/60 赤(2)97/60	黄褐色(7) 597/60
95	33	土研	土研	土研	18.4			原料質であるがナ ダ	5mm以下の灰白・乳白色・褐色の粒が多くなる 赤色	橙(2)97/60 赤(2) 597/60	黄褐色(10)98/40
96	33	土研	土研	土研	21.6	6.9	31.3	原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 赤色	黄褐色(2) 598/40	橙(2) 597/60
97	33	土研	土研	土研	21.6			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰土の粒が多くなる 赤色	黄褐色(2) 595/71	橙(3)96/60
98	33	土研	土研	土研	21.6			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・灰土・白土の粒が多くなる 赤色	橙(3)97/60	橙(3)96/60
99	33	土研	土研	土研	13.9			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色と赤い赤褐色の粒が多くなる 赤色	橙(3)97/60	橙(3)96/60
100	33	土研	土研	土研	11			原料質であるがナ ダ	4mm以下の赤白・5mm以下の赤褐色 赤色	黄褐色(2) 598/40	黄褐色(7) 598/33 赤(2) 598/61
101	33	土研	土研	土研				原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 赤色	黄褐色(10)98/20	黄褐色(10)98/20
102a	33	土研	土研	土研		28		原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色の粒が多くなる 5mm以下の赤褐色の粒を含む 5mm以下の乳白色の粒を含む	赤(2)96/60(2)7 黄褐色(10)98/40	赤(2)96/60(2) 赤(2)96/71
102b	33	土研	土研	土研	7.8			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色の粒が多くなる 4mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む	橙(2) 597/60 黄褐色(2) 598/40	黄褐色(10)98/30 黄褐色(2) 597/61
103	33	土研	土研	土研	8.8			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 赤色	橙(3)97/60	橙(3)96/60
104	33	土研	土研	土研	6.2			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・赤灰・褐色の粒が多くなる 赤色	橙(3)97/60	赤(2) 598/71
105	33	土研	土研	土研	6.8			原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色の粒が多くなる 5mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の乳白色の粒を含む 5mm以下の赤褐色の粒を含む	橙(3)96/60 黄褐色(10)98/40	橙(3)97/60 黄褐色(2) 599/71
106	33	土研	土研	土研	9			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色・褐色・灰土の粒が多くなる 赤色	黄褐色(10)98/40	黄褐色(10)98/20
107	33	土研	土研	土研	12			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 597/60	赤(2) 1097/71
108	33	土研	土研	土研	7.2			原料質であるがナ ダ	4mm以下の灰白色の粒を含む 4mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	橙(2) 597/60	黄褐色(7) 598/71
109	33	土研	土研	土研	7.8			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・5mm以下の赤褐色・5mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	橙(3)96/60	黄褐色(7) 598/40 黄褐色(2) 598/61
110	33	土研	土研	土研	6			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色の粒が多くなる 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む	橙(3)97/60 黄褐色(2) 598/40	橙(3)96/60 黄褐色(10)97/60
111	33	土研	土研	土研	7.4			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色の粒を含む 5mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	橙(10)94/60 赤(2) 1098/71	赤(2) 1097/71 赤(2) 1098/71
112	33	土研	土研	土研	6.2			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む	橙(2) 597/60 赤(2) 597/60	黄褐色(7) 598/22 橙(3)97/60
113	33	土研	土研	土研	8			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 597/60	赤(2) 1098/20
114	33	土研	土研	土研	7.3			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色の粒が多くなる 4mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	黄褐色(10)97/20	黄褐色(10)98/20
115	33	土研	土研	土研				原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 597/60	赤(2) 598/71
116	33	土研	土研	土研	8			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 598/60	黄褐色(7) 598/60
117	33	土研	土研	土研	6.7			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 598/60	橙(3)97/60
118	33	土研	土研	土研	3.8			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色の粒が多くなる 3mm以下の赤褐色の粒を含む 4mm以下の赤褐色の粒を含む 5mm以下の赤褐色の粒を含む	赤(2)1098/20	赤(2)1098/20
119	33	土研	土研	土研	5.6			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色の粒が多くなる 4mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む	橙(2)97/60 黄褐色(2) 598/40	黄褐色(10)98/30 黄褐色(2) 597/61
120	33	土研	土研	土研	4.5			原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色の粒が多くなる 4mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	橙(3)97/60	黄褐色(10)98/30 赤(2)97/61
121	33	土研	土研	土研	6			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 597/60	黄褐色(10)98/30
122	33	土研	土研	土研	6.4			原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む	橙(3)97/60	黄褐色(7) 598/40
123	33	土研	土研	土研	5	10		原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色の粒が多くなる 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む	赤(2) 598/20 黄褐色(10)98/20	黄褐色(10)98/30
124	33	土研	土研	土研	6.2			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 598/60 赤(2)97/60	橙(2) 597/60
125	33	土研	土研	土研	8			原料質であるがナ ダ	7mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 5mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	橙(3)96/60 黄褐色(2) 598/40	橙(3)97/60
126	33	土研	土研	土研	6.4			原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色・赤褐色・褐色・乳白色の粒が多くなる 赤色	黄褐色(7) 598/40	赤(2)96/60(10)97/40
127	33	土研	土研	土研	21.2	7.8	40.2	原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色・褐色・灰土・乳白色の粒が多くなる 赤色	橙(2) 598/60 黄褐色(10)98/30	橙(2) 598/60 黄褐色(10)98/60
128	33	土研	土研	土研	22.9	0.1	31.9	原料質であるがナ ダ	8mm以下の赤褐色・褐色の粒が多くなる 赤色	黄褐色(7)598/40	黄褐色(7)598/40 赤(10)97/71
129	33	土研	土研	土研	7			原料質であるがナ ダ	5mm以下の赤褐色の粒が多くなる 4mm以下の赤褐色の粒を含む 3mm以下の赤褐色の粒を含む 赤色	橙(2) 597/60 黄褐色(2) 598/40	黄褐色(7) 598/60 赤(2) 598/71
130	33	土研	土研	土研	6.4	8.1		原料質であるがナ ダ	4mm以下の赤褐色・褐色・赤褐色の粒が多くなる 赤色	黄褐色(7) 598/30	橙(3)96/60 黄褐色(7) 598/30

JIS 番号	山土 位置	種別	種別	用途	注記(1) 1. 用途、2. 用途、3. 用途	手注・調整・文種別		取上の特長			
						外周	内周	外周	内周		
237	SE30 V10	調整車	機械	円錐→円錐			回転ナブ、摩擦 止付ナブ	回転ナブ、同心 穴	4mm以下の取込色を多く含む。	V取込(7/)	取込(8/7/)
238	SE20	調整車	鉄	円錐→直線	16.7		摩擦式、用油、摩擦 ナブ、回転ナブ	回転ナブ	5mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/4/)	取込(5/2/)
239	SE27 C9	土調整車	鋼	円錐→円錐	23.7		摩擦式、用油調整ナブ	工具によるナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。	取込(5/6/6/)	取込(7/7/)
239	SE27 C9	土調整車	鋼	円錐→円錐	27		摩擦式、用油調整ナブ	工具ナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/6/)	取込(7/7/)
239	SE27 C9	土調整車	鋼	円錐→直線	10.2		摩擦式、用油調整ナブ	固定化して調整ナブ	4mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
240	SE22 D10	調整車	鋼	直線	11		摩擦式、用油調整ナブ	摩擦式、用油調整ナブ	7mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。2mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
241	SE27 C9	土調整車	鋼	円錐			摩擦式、用油調整ナブ	摩擦式、用油調整ナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。4mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
242	SE22 D10	調整車	鋼	円錐→直線	10.5	7.4	摩擦式調整ナブ	摩擦式調整ナブ	2mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
243	SE27 C9	調整車	鋼	円錐→円錐	6.5		回転ナブ	回転ナブ	3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
244	SE27 C9	調整車	鋼	直線			摩擦式調整ナブ	回転ナブ	摩擦式調整ナブ、3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
245	SE27 C9	調整車	鋼	直線→直線			同心穴	同心穴	3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
246	SE27 C9	調整車	鋼	直線→直線			同心穴	同心穴	3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
247	SE27 C9	調整車	鋼	円錐			同心穴	同心穴	3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
248	SE27 C9	調整車	鋼	直線	12.8		摩擦式調整ナブ	摩擦式調整ナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。2mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
248	SE27 C9	調整車	鋼	直線	10.8		摩擦式調整ナブ	摩擦式調整ナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。2mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
249	SE27 C9	調整車	鋼	天溝→天溝	11.4	4.4	回転ナブ、回転ナブ	回転ナブ	6mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
250	SE27 C9	調整車	鋼	直線→直線	2.3		同心穴	同心穴	7mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
251	SE30 V10	土調整車	鋼	直線	9.8		摩擦式調整ナブ	摩擦式調整ナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
252	SE30 V10	土調整車	鋼	直線	10.8		摩擦式調整ナブ	摩擦式調整ナブ	5mm以下の取込色、赤褐色、褐色、灰白色の取を多く含む。3mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(5/6/7/)	取込(7/7/)
254	SE30	調整車	鋼	天溝	8.0		回転ナブ	回転ナブ	4mm以下の取込色の取を多く含む。	取込(7/7/)	取込(7/7/)
255	SE30 V10	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
256	SE30 V10	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
257	SE30	調整車	鋼	天溝	7.8	3.7	同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
257	SE30	調整車	鋼	天溝	10	10	同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
258	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
259	SE30	調整車	鋼	天溝	8.0		同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
260	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
261	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
262	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
263	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
264	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
265	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
266	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
267	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
268	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
269	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
270	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
271	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
272	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
273	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
274	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
275	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
276	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
277	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
278	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
279	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
280	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
281	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
282	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
283	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
284	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
285	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
286	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
287	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
288	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
289	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)
290	SE30	調整車	鋼	天溝			同心穴	同心穴	摩擦式調整ナブ	取込(7/7/)	取込(7/7/)

レイト 番号	出土位置	種類	形状	部位	注量(cm) 口径・底径・取高・取径	手法・遺物・発物		胎土の種類		表面	
						外周	内周	外周	内周	外周	内周
291	E9	滑車形	杯形	口縁～底縁	11.4		回転ナブ 削り	回転ナブ	2mm以下の乳白色の粒を含む。1mm以下の灰色の粒の粒を多く含む。2mm以下の黒色粒を含む。	灰白(N7)	灰白(N7)
292	E2	滑車形	杯形	口縁～底縁			回転ナブ	回転ナブ	焼成で焼成。	灰(N6)	灰(N6)
293	E2C	滑車形	杯形	口縁～底縁	13		回転ナブ	回転ナブ	4mm以下の灰白色を少量含む。	灰(N6)	灰(S15/F)
294	E9	滑車形	杯形	口縁	7		回転ナブ	回転ナブ	焼成で焼成。	灰白(N6)	灰白(N6)
295	E1C	滑車形	杯形	天井縁～口縁			回転ナブ	回転ナブ	1mm以下の灰白色を少量含む。	焼灰(1095/F)	焼灰(1096/F)
296	E2b	滑車形	高台付杯形	底縁	8.6		回転ナブと回転ナブへう削り	回転ナブ	焼成で焼成。	灰白(N7)	灰白(N7)
297	E1C	滑車形	高台付杯形	底縁			厚手削り	厚手削り	3mm以下の灰白色を少量含む。	灰白(N7)	灰白(N7)
298	E2a	滑車形	高台付杯形	底縁	12		回転ナブとナブ	ナブ	焼成で焼成。	灰白(N7)	灰白(N7)
299	E7	滑車形	高台付杯形	底縁	12.6		回転ナブ	回転ナブ	焼成で焼成。	灰(N6)	灰(N6)
300	E1C	滑車形	高台付杯形	底縁	4.8		回転ナブ	回転ナブ	4mm以下の灰白色を少量含む。	灰白(N7)	灰白(N7)
301	E10	滑車形	杯形	口縁～底縁	4.8 5.4 5.1		回転ナブ 付着層有り	回転ナブ	4mm以下の灰白色を少し含む。	灰白(N7)	灰白(N7)
302	F1	滑車形	高台付杯形	口縁～底縁	9.1 5.1 4.6		回転ナブ 回転ナブへう削りと土着の削り	回転ナブ	3mm以下の灰白色を少し含む。	灰白(N7)	灰白(N7)
303	E7	滑車形	高台付杯形	口縁			回転ナブ	回転ナブ	2mm以下の灰白色を含む。	灰白(N7)	灰白(N7)
304	E2c	滑車形	楕圓形～底縁				母子目取。かき目	同心内文。ナブ	焼成で焼成。	灰(N6)	灰(N6)
305	D10	滑車形	楕圓形	口縁～底縁			半目取	同心内文	焼成で焼成。	灰(N6)	灰(N6)
306	C10	滑車形	楕圓形				半目取	同心内文	焼成で焼成。	灰(N6)	灰(N6)
313	S97	青磁	楕圓形	口縁～底縁			厚手削り	厚手削り	焼成で焼成。	灰(N6)	灰(N6)
314	S23-1	青磁	杯形	口縁			胎土	胎土	焼成で焼成。	灰白(N7)	灰白(N7)
315	D10	茶	中央溝形	口縁			回転ナブ	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
316	D6	漆器	中央溝形	口縁			胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
317	E61	漆器	中央溝形	口縁			胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
318	E2	漆器	中央溝形	底縁			胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
319	D6	漆器	中央溝形	口縁	4		胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
320	E2	漆器	中央溝形	口縁～底縁	12.8 5.2		胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
321	E61	漆器	中央溝形	底縁	3.5		胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
322	一括	漆器	中央溝形	口縁～底縁	5.6		胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
323	E2	漆器	中央溝形	口縁			胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
324	E2	漆器	中央溝形	底縁	4.5		胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
325	D10	白磁	小杯形	口縁～底縁	2.6		胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
326	D6	漆器	中央溝形	底縁			胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
327	E10	瓦					胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)
328	一括	瓦					胎土	胎土	胎土	灰(N6)	灰(N6)

第2表 宮ヶ迫遺跡石器・土器観察表

レイアウト番号	器種	出土位置	石材及び材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
161	罎	SE35	鉄	4.95	5	1.8	36.8	羽口
162	罎	SE35	鉄	4	3.3	2	17.7	羽口
163	割片	SE35	頁岩	2.45	2.3	0.8	3.1	
164	軽石製品	SE35	軽石	9.9	9.3	7.3	2216.8	
173	凹み石	SE24, D6	砂岩	7.75	7.35	3.1	206.7	
228	火打石	SE2, E6-E7	チャート	2.1	1.2	1	3.2	
229	軽石製品	SE2, E6	軽石	5.5	4.6	1.65	8.1	
230	凹み石	SE2	砂岩	13.9	7.7	3.7	442.9	
246	瓦盤	SE22	金属	2.8	3.2	0.6	3.5	
271	凹み石	SE30	砂岩	18.5	20.1	6.7	3378.3	
272	凹み石	SE30	砂岩	12.2	9.7	6.5	1124.9	
273	台石	SE30	砂岩	22.1	5.6	4.3	2217.2	
282	台石	SH135	砂岩	24.6	8.9	5.5	1756.3	
307	敲石	SC167	砂岩	18.4	9.65	4	861.6	
308	敲石	SE151	砂岩	10.9	6.2	3.5	259.5	
309	軽石製品	一括	軽石	12.4	9.6	7	177.9	
310	台石	D8	砂岩	37.9	17.5	16.5	256.9	
311	敲石	S48b	砂岩	12.75	6.3	5.25	594.4	
312	石鐘	D8	砂岩	3.9	3.6	5.5	11.2	
329	割片	E10	頁岩	4.45	3.15	1.45	19.7	
330	割片	E10	チャート	5.6	5.9	1.6	66.7	
331	石皿	表土	炭灰岩	1.9	1.6	0.45	1	
332	罎	SE24, E6	鉄	2.25	3.1	1.8	8.7	写真のみ羽口
333	罎	SH24, E7	鉄	2.4	2.6	1.5	4.7	写真のみ羽口
334	罎	SH43, E4	鉄	3	3.7	1	8.6	写真のみ羽口

第三章 自然科学分析の結果

第1節 宮ヶ迫遺跡における放射性炭素年代測定

(1) はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

(2) 試料と方法

測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法を次表に示す。

第3表 測定資料の詳細と放射性炭素年代測定法

試料	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	SC10, 炭化物 1	炭化材	超音波洗浄, 酸-7時間-酸処理	AMS
No. 2	SC10, 炭化物 2	炭化材	超音波洗浄, 酸-7時間-酸処理	AMS
No. 3	SC124, 炭化物 1	炭化材	超音波洗浄, 酸-7時間-酸処理	AMS
No. 4	SH223, 炭化物	炭化材	超音波洗浄, 酸-7時間-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

(3) 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (校正年代) を算出した。次表にこれらの結果を示し、図1に暦年校正結果 (校正曲線) を示す。

第4表 加速器質量分析法 (AMS) 結果

試料	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代:年BP (暦年校正用)	暦年代(校正年代)	
				1 σ (68, 2%確率)	2 σ (95, 4%確率)
No. 1	17418	-24.90 \pm 0.22	1455 \pm 20 (1454 \pm 21)	AD590-640 (68, 2%)	AD565-645 (95, 4%)
No. 2	17419	-26.76 \pm 0.16	1545 \pm 20 (1544 \pm 19)	AD430-490 (40, 7%) AD530-560 (27, 5%)	AD430-570 (95, 4%)
No. 3	17420	-29.85 \pm 0.22	1595 \pm 20 (1596 \pm 21)	AD420-460 (20, 8%) AD480-540 (47, 4%)	AD410-540 (95, 4%)
No. 4	17421	-27.80 \pm 0.16	1595 \pm 20 (1593 \pm 19)	AD420-450 (16, 1%) AD480-540 (52, 1%)	AD420-540 (95, 4%)

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元後

① $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

② 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。統計誤差(±)は 1σ ^{1 σ} (68.2%確率)である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年校正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年校正用年代値も併記した。

③ 暦年代(Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正することで、放射性炭素(^{14}C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。校正曲線のデータはIntCal 09、校正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代(校正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ ^{1 σ} (68.2%確率)と 2σ (95.4%確率)で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

(4) 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では 1455 ± 20 年BP(2 σ の暦年代でAD 565~645年)、No.2の炭化材では 1545 ± 20 年BP(AD 430~570年)、No.3の炭化材では 1595 ± 20 年BP(AD 410~540年)、No.4の炭化材では 1595 ± 20 年BP(AD 420~540年)の年代値が得られた。

【文献】

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p. 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p. 1111-1150.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, p. 3-20.

第2節 宮ヶ迫遺跡における樹種同定

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は7号掘立柱建物跡のP2-3から出土した柱材1点である。

(3) 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を製作し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

樹種同定の結果、スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

(5) 所見

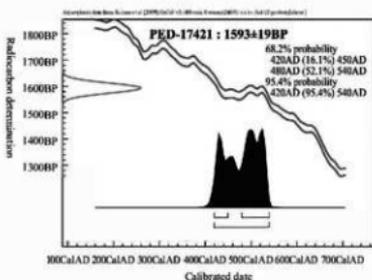
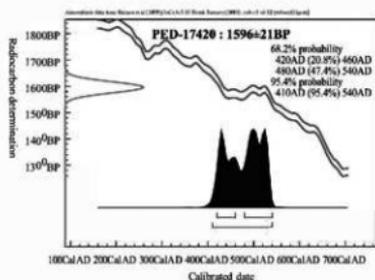
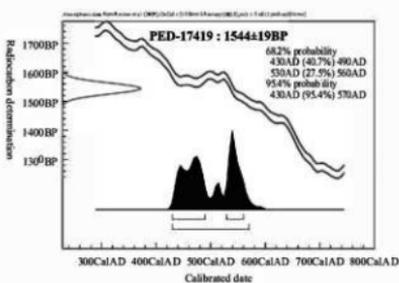
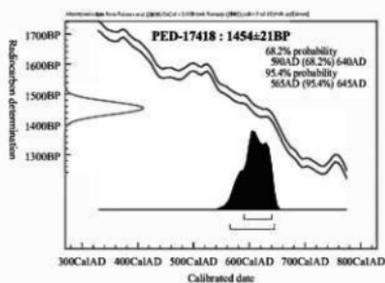
樹種同定の結果、SB7（掘立柱建物跡）から出土した柱材はスダジイと同定された。スダジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素であり、二次林要素でもある。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性がや低く、建築、器具などに用いられる。当時の遺跡周辺もしくはは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

【文献】

島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.



第80図 暦年較正結果



横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

1. SB7の柱材 スダジイ

第81図 宮ヶ迫遺跡の木材

第IV章 総括

第1節 はじめに 一遺跡の概要一

今回の調査においては古墳時代後期から古代にかけての竪穴建物3軒、掘立柱建物跡11棟、土坑14基、溝状遺構14条のほか、中世の掘立柱建物跡1棟や溝状遺構が確認された。宮崎平野地域では類例の少ない当該期の拠点集落であり、後述するように工房的な空間を備えていたと目される。

以下、今回の調査で得られた成果の中で、特記すべき事柄について詳しく触れておく。

第2節 遺構の年代と変遷について

ここでは出土した土器の編年の位置について検討し、その結果と遺構主軸をもとにした検出遺構の（現段階での）変遷観について言及する。

本遺跡の年代比定を行うにあたって基準とすべき遺物はやはり須恵器（特に蓋杯）となろう。当該期の遺構群の年代比定を行う場合、現状では陶邑古窯址群での「窯式編年」（田辺1981）を援用して年代を当てはめるケースがほとんどであり、奈良文化財研究所による杯Hの残存や杯G、杯Bの出現などの器種の消長も判断材料となっている。ただし、そのような方法は長直信が指摘するとおり問題点が多々ある（長2012）。また本遺跡の資料に即した実践を進める上においても、掘立柱建物跡の柱穴内に遺存する土器は、他遺跡同様、量的に限られること、土坑についても残念ながら編年に有効な出土遺物は少ないこと、また溝はその性格上、基本的に開かれた空間であったため、そこに含まれる土器は長い期間の集積体と捉えるべきで、実際に本遺跡の溝に含まれる土器に少なからぬ型式差が認められることなどから、それら遺構出土の土器群を単純に一括遺物と捉えて配列することはできない。従って、結果としてそれらの資料が当地域の土器編年に寄与するところも些少であろう。以上の点を勘案するならば、出土遺物の量的傾向をもとに溝の時期（掘削あるいは埋没時期）を推定し、それを基準と定めて、主軸を同じくする遺構群を同一「期」と捉え、変遷を推定するといった検討方法が適当と考えられる。ただし各器種について厳密に型式を設定し、セリエーションの概念を導入し検討することはここでは不可能である。相対的に出土量の多い須恵器の蓋杯の型式の出現状況をもとに考える。

（1）掘立柱建物A群と35号・5号溝 一I期遺構群一

南北溝SE35では埋土中より多量の土器が出土しており、各器種とも認定される型式に幅がある。これは溝が掘削されてから完全に埋没するまで、かなりの期間にわたって遺物が堆積する状態であったことを示している。須恵器の杯Hでは口縁部径15cmに近い杯蓋と径13cm弱の杯身が各1点あり、TK43型式に比定される。一方で口縁部径13cmの杯蓋や11～12.5cmの杯身が4点あり、それに加えて立ち上がりがごく短く内に向かう個体が1点認められる。それらはTK217型式の古段階に比定される。杯Bに属する平らなつまみの付く蓋や高台の付く杯身については形式的にさらに下るため、位置づけに苦慮するところである。これらに関しては出土位置に関するデータを欠くが、完全に埋没し、フラットに近い状況で堆積したものと解したい。SE35が掘削されたのは6世紀後葉であり、7世紀前葉に至って埋没したと推定しておく。

なお、土師器の甕は、器形の面では長胴と球形胴、口縁部は「く」字形の外反口縁と端部を折り曲げるなどの変異があり、底部については円盤状の平底と丸底の両者が存在する。以上示した各属性の変異

に関しては、口縁部形態が「く」字形から緩やかな外反に向かうことがほぼ確実であるが、胴部や底部の変異に関しては、明確な時間的変化を捉えることが難しい。また鉢とすべきものや壺に近い器形の一群が存在することなどもあって様相は複雑である。従って型式の把握はここでは成し得ない。一定の時期幅を含む可能性を指摘するに留めたい。

この南北溝SE35と東西溝SE5は調査区外で直角を成して接合する可能性がある。また、これらと近接し、柱筋をそろえて建つSB2・3とは遺構主軸がほぼ一致する。それらを含む掘立柱建物A群と名付けた一群は、同一期に位置づけることが可能であろう。これらをI期遺構群とする。遺構主軸を基にするならばSA28やSA44も当期に属する可能性がある。並んで建っていたであろうSB2とSB3の2棟は(SB2については推定西側柱列が捉えられないが)平面正方形を呈し、総柱の倉庫と判断できる。山裾に近いSB10~12の掘立柱建物も、同時期に属する可能性が高いが、柱穴が小さく、規格が低いように見受けられる。

(2) 掘立柱建物B群と2号溝 —II期遺構群—

掘立柱建物B群に属するSB1の柱穴がSE35の埋上を掘削して構築されていることから、上述のI期遺構群に属するSE35とSB1の前後関係は明確である。また掘立柱建物B群と同一主軸となるSE24・25は2号北溝に先行して掘削されている。SE24と25では杯Hに属する口縁部径14.5cmの杯蓋と径13cmの杯身が出土している。さらに同一主軸をとる遺構としてSC21や2号南溝が挙げられる。2号北溝との前後関係(SE24→2号北溝および2号南溝→2号北溝)から、SE24と2号南溝の同時性が整合的に説明できる。SE67についてもSC21との接合の状況から同一時期の遺構とみて差し支えなからう。ここでは須恵器の杯Hに属する口縁部径13cmの杯蓋が出土している。SE24・25および2号南溝とB群建物群の遺構とが関連すると考え、これらをII期遺構群と位置づける。須恵器の観察によればI期より新しい様相が目立つが、さほどの時間的な開きはないと考えられる。このII期遺構群の中では総柱建物であるSB4とSB8が倉庫であった可能性が高い。

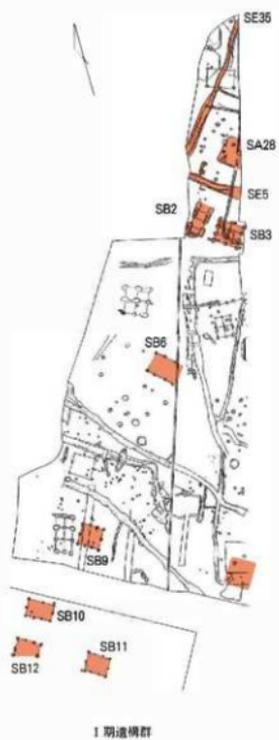
(3) 掘立柱建物C群と2号北溝 —III期遺構群—

今回の調査区内で最も南北方向に近い主軸を示す掘立柱建物C群は、調査区内で明らかとなっているのはSB5と付帯欄列のみある。おそらくは調査区以東に展開していたのであろう。これと同一の主軸を示す遺構としては2号北溝とSZ36が挙げられる。この段階をIII期遺構群と命名する。SB5付帯欄列と2号北溝から出土した須恵器蓋杯はTK209型式に属する立ち上がりの短い杯身が多数を占める。

なお、調査区内を斜めに横切る9号溝、67号溝などは、上記のいずれに所属するのか、現段階ではわからない。9号溝と67号溝は遺構主軸とは関係なく、排水用の溝として地形に沿って走っているとも考えられ、さらに長期間存続した可能性もある。

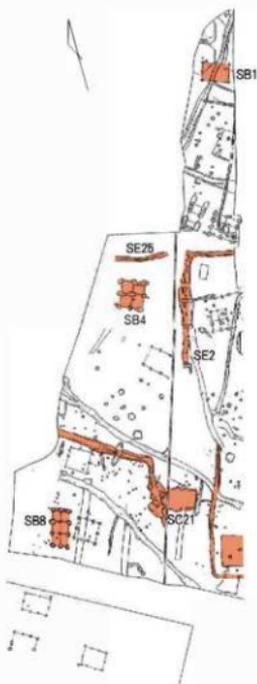
(4) 中世

掘立柱建物SB7とSE23などいくつかの溝が確認されているが、遺構群の配置等の詳細は不明である。本遺跡のSB7は、1間×2間の小規模な建物で、同時期の施設であったとしても中軸を担うものとは考えられない。



I期遺構群

0 1 : 600 20m



II期遺構群



III期遺構群

第82図 遺跡群の変遷

今回設定した古代の3つの「期」と中世の遺構配置について、宮崎市教育委員会の調査区での成果と照合する必要があることは言を俟たない。特にⅠ期とⅡ期に存在する倉庫は、一つの単位集団の規模を超える倉庫（重藤2012）であるのか否か、あるいは首長居館に所属し、のちの郷里レベルの官衙と関わるものであるのか、検討を要する。

第3節 土器焼成土坑と粘土貯蔵土坑について

本遺跡で検出された土坑のうち7、10、124、125号では、土器の細片や炭化材が検出されており、類例から判断して土器焼成土坑と推定している。それらの多くは、C-7・8とD-8区に集中しており、そこが土器類の焼成の場であったと考えられる。これらの土坑内の炭化物の年代測定の結果は、SC10がAD.565~645年とAD.430~570年、SC124がAD.410~540年となっている。

一方、SC21では5面のシルト質の埋土が確認された。この粘土は上述の土器類焼成に使用された可能性がある。また、溝状遺構のSE2から水を引き入れるための小溝が確認された。以上のことから溝より導水し、粘土を貯蔵するための施設と推定しておく。

第4節 近隣の遺跡との比較

同ヒーツ瀬川の流域の低段丘上に立地する新富町竹淵C遺跡では、古墳時代中期から古代(9世紀代)に至る各時期の竪穴建物跡が検出されている(宮崎県埋文センター2005)。最も検出数の多い須恵器TK207型式準期に属する竪穴建物は狭い範囲に密集しており、集落構成の点から本遺跡との性格の違いが浮かび上がる。

小丸川沿いに位置する高鍋町下耳切第3遺跡は、古墳時代終末期から古代(須恵器TK209新段階~MT21型式準期)に属する集落遺跡である(宮崎県埋文センター2006)。B期とされた7世紀第1四半期については、竪穴建物と掘立柱建物、櫓列に加えて墳墓群(古墳への追葬と地下式横穴)によって構成される集落像が明らかとなっている。一部に布掘りの柱掘り方を用いる総柱建物(SB3)は高床倉庫と推定されている。後のF-2期に成立する南北に主軸を描く律令期的な集落以前の古墳時代的な集落景観を呈するが、7世紀末に属する円面硯が出土している点から後の律令期の「里長」的な有力階層が存在したことが想定されている。立地環境や竪穴や倉庫状の建物の比率など、本遺跡との相違点はあるが、後続する時期の遺跡として重要である。

また、本遺跡に近接する首長墓系列の古墳や古墳群、横穴、あるいは地下式横穴は、第1章で触れた平田迫遺跡と土器田横穴が挙げられるに過ぎないが、墳墓との関連についても当然のことながら注意を払わねばならない。

〔文献〕

重藤輝行 2012 「7世紀集落遺跡の一側面 -北部九州の集落内の倉庫の検討を中心として-」『集落から見た7世紀 第61回埋蔵文化財研究集会 発表要旨資料』埋蔵文化財研究会

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

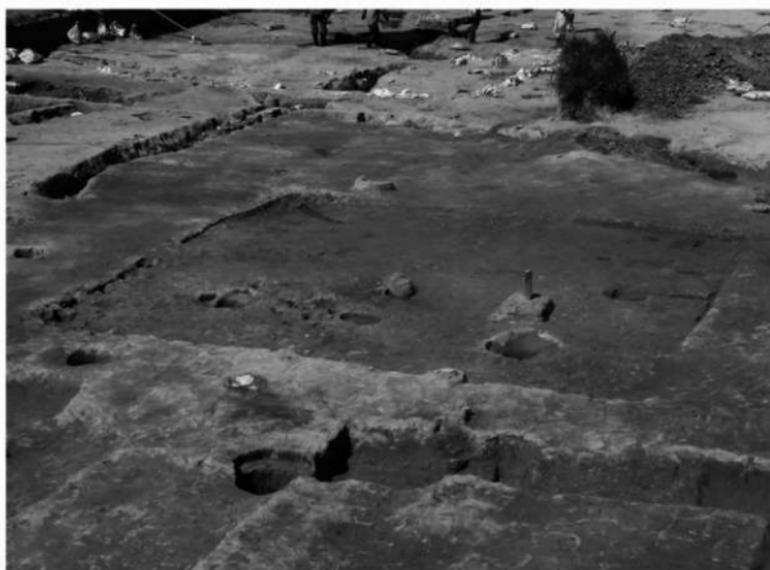
宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『竹淵C遺跡』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集)

宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『下耳切第3遺跡』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集)

图版 1



宮ヶ迫遺跡全景



88号堅穴建物



21号土坑



21号土坑遺物出土狀況

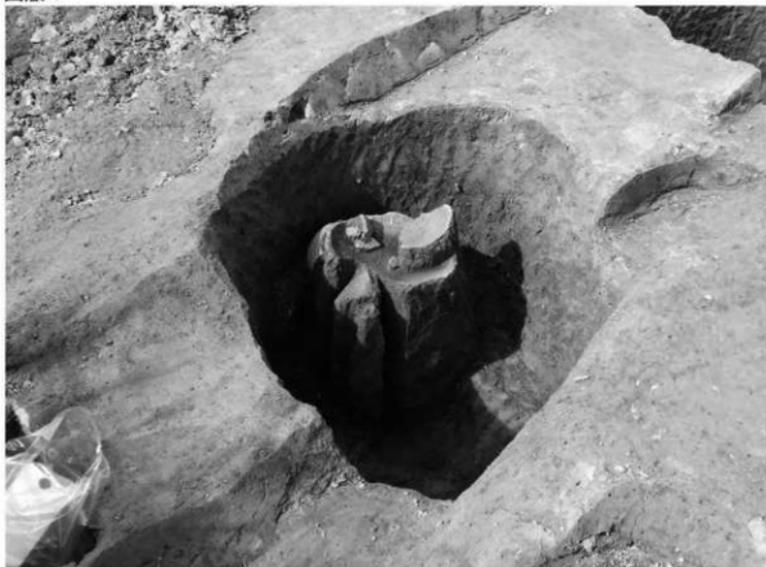
图版 3



7号土坑完掘状況



4号掘立柱建物（P 2-3）南から



2号掘立柱建物（P1-2） 東から



35号溝-14・15 南東から



35号溝-6・7 東から



35号溝-2・3・4 東から

図版 6



35号溝-5 東から



35号溝-10・11 東から

図版 7



35号溝-14・15 北東から



35号溝-14・15 東(1)から

図版 8



35号溝-14・15 東(2)から

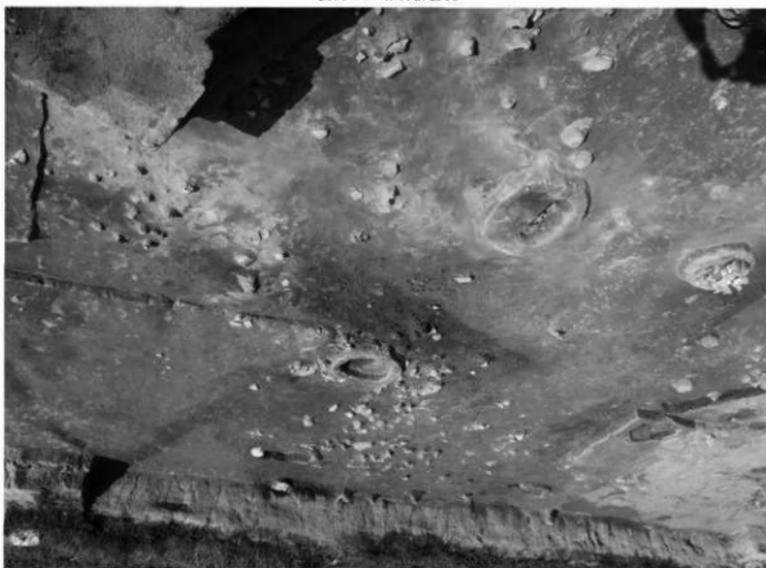


35号溝-8・9 東から

23号モリシノイE10



30号溝遺物E 2付近





2号掘立柱建物



4号掘立柱建物



9号孤立柱建物



10号土坑池



21号土坑上层

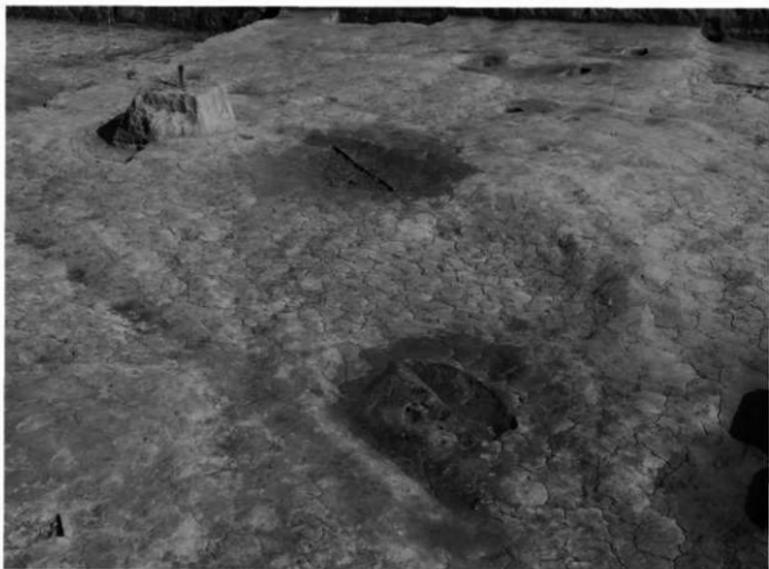


25号溝

图版13



25号溝出土遺物



125号土坑

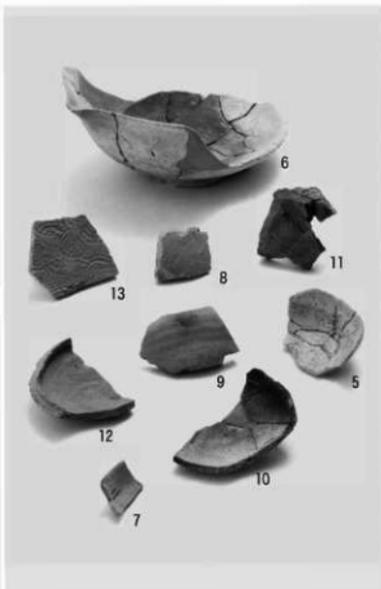
图版14



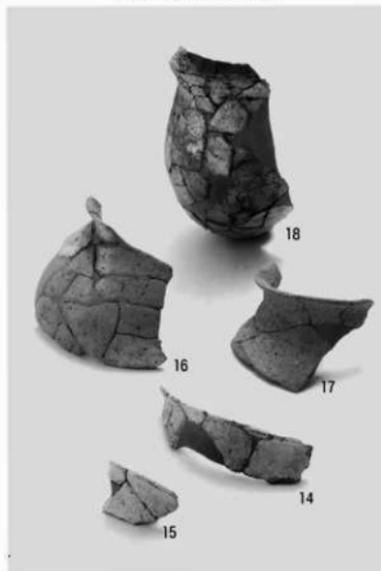
88号竖穴建物出土遺物



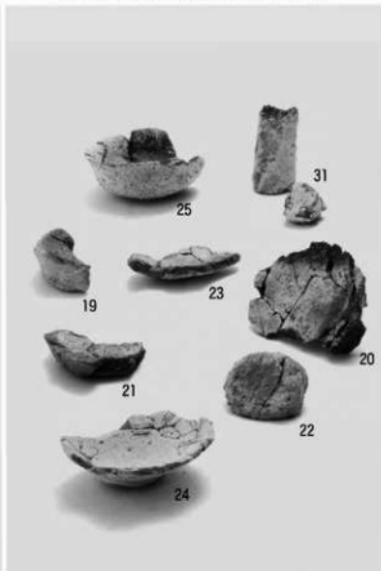
44号竖穴建物出土遺物



2・3・5・12号掘立柱建物出土遺物



21号土坑出土遺物(1)

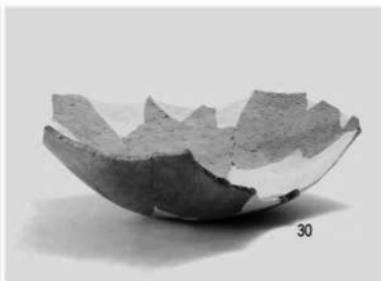


21号土坑出土遺物(2)

图版15



21号土坑出土遗物(3)



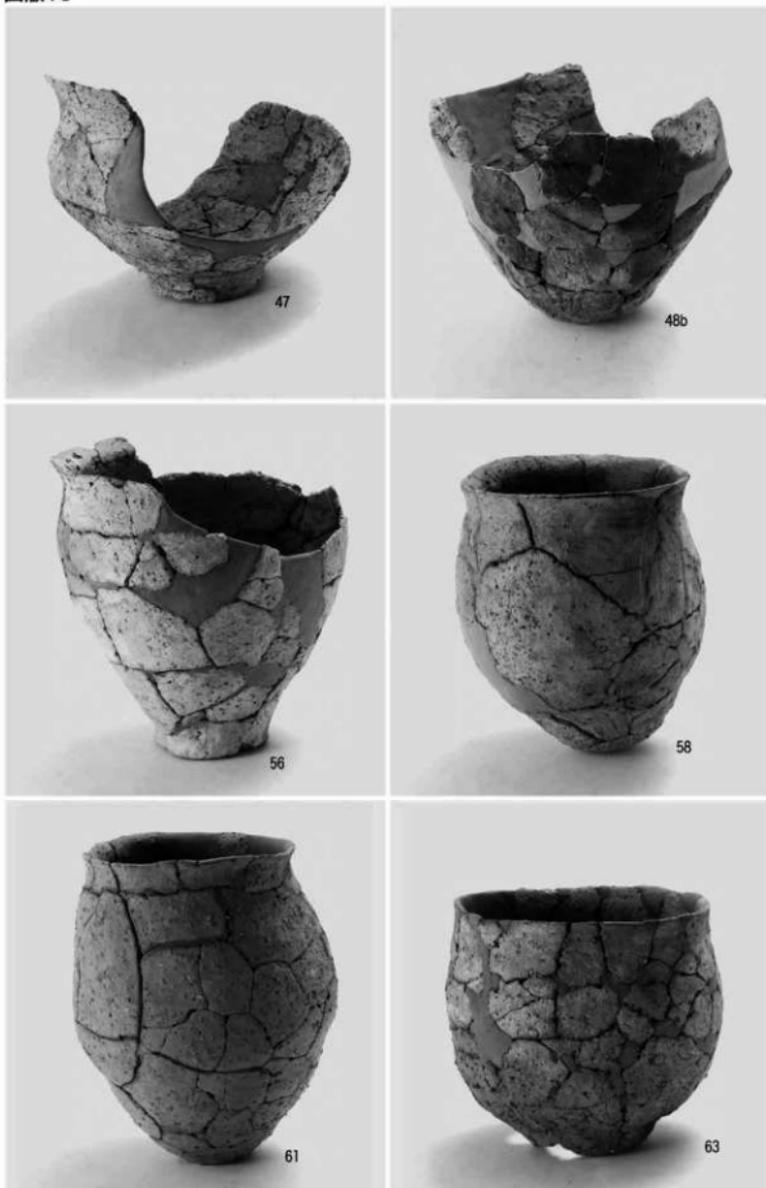
21号土坑出土遗物(4)



165号土坑出土遗物

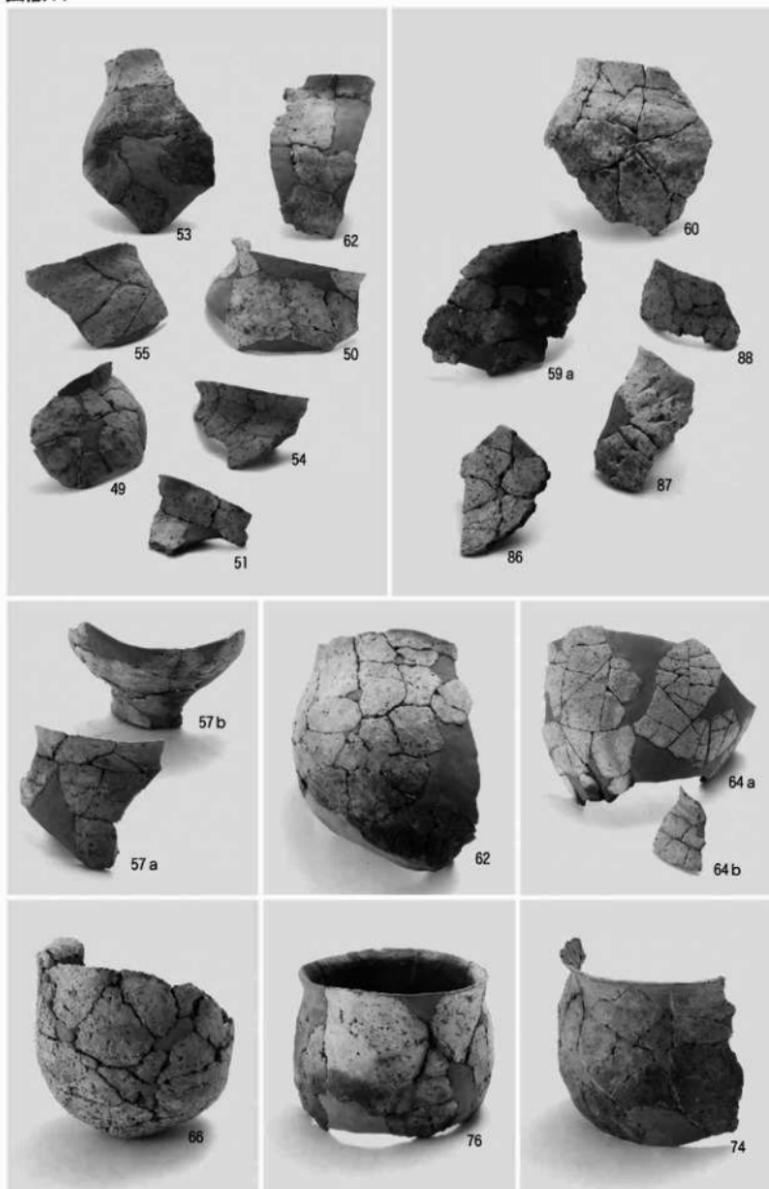


7号·163号·164号土坑·176号溝類似土坑出土遗物

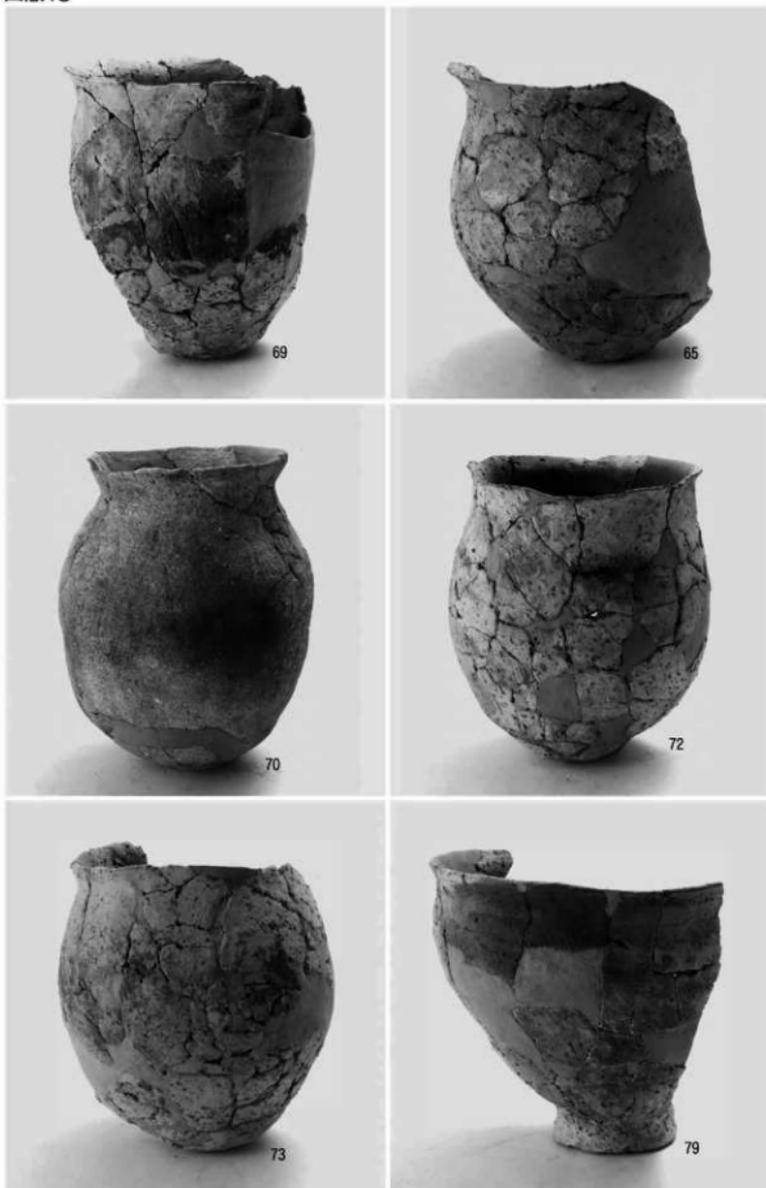


35号溝出土遺物(1)

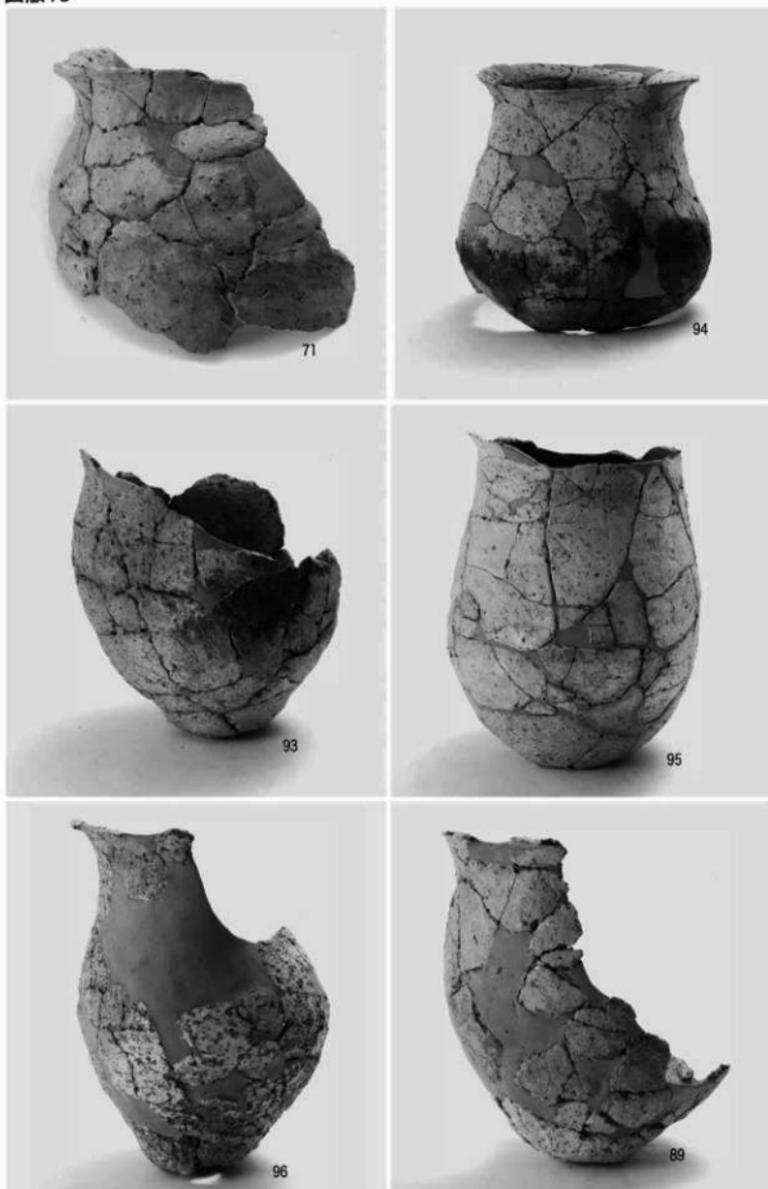
图版17



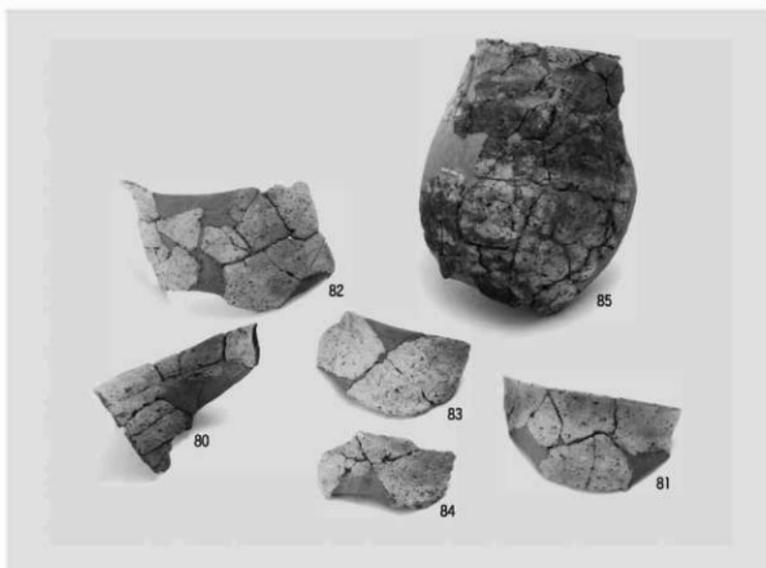
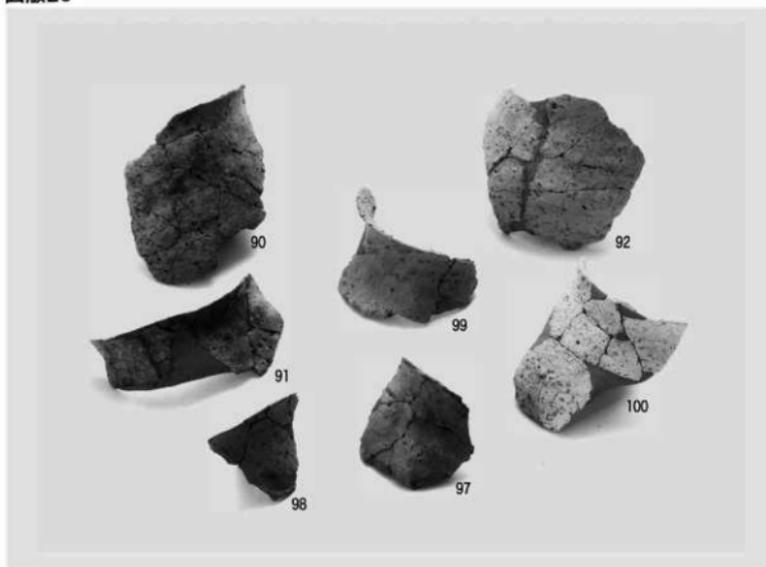
35号沟出土文物(2)



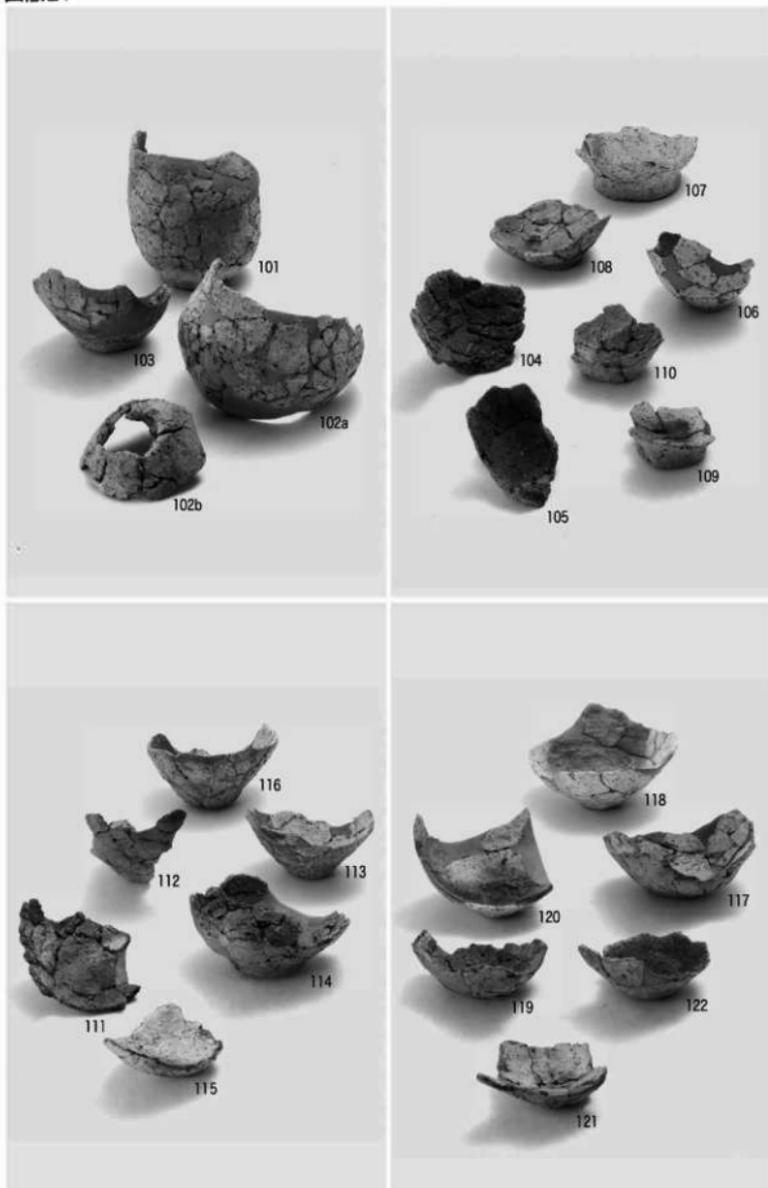
35号溝出土遺物(3)



35号溝出土遺物(4)



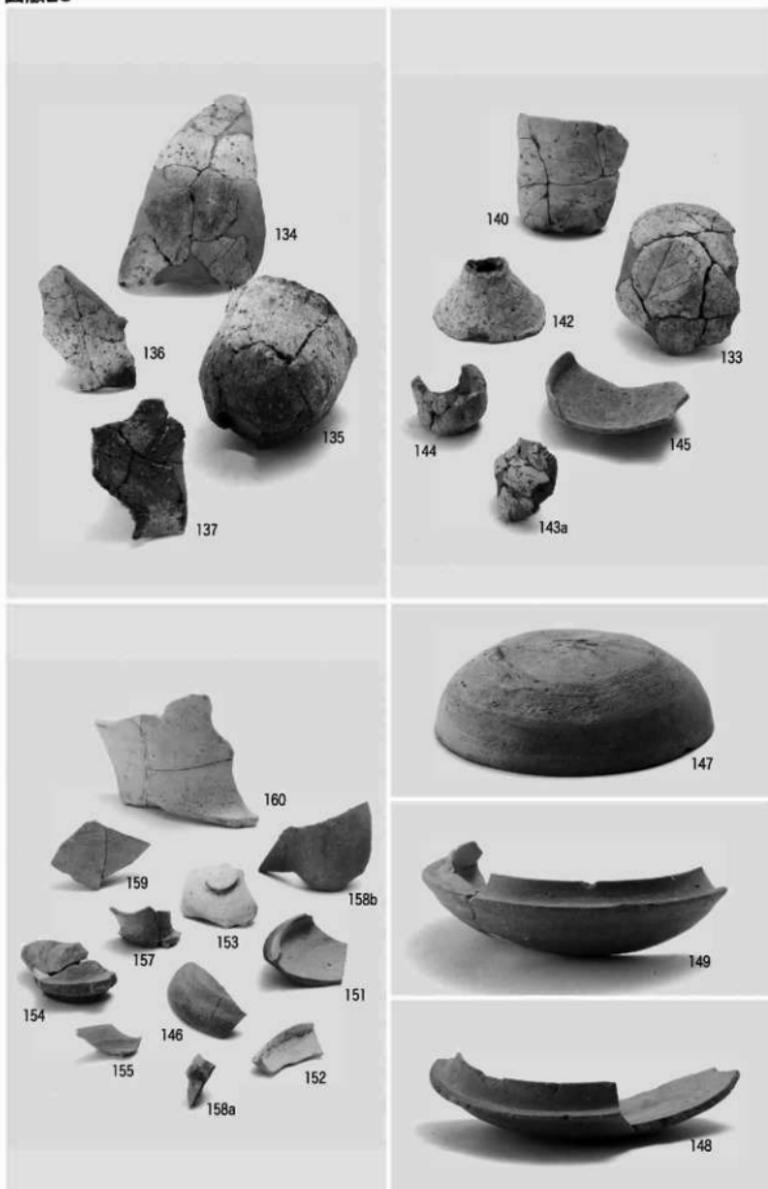
35号溝出土遺物(5)



35号溝出土遺物(6)



35号溝出土遺物(7)



35号溝出土遺物(8)

图版24



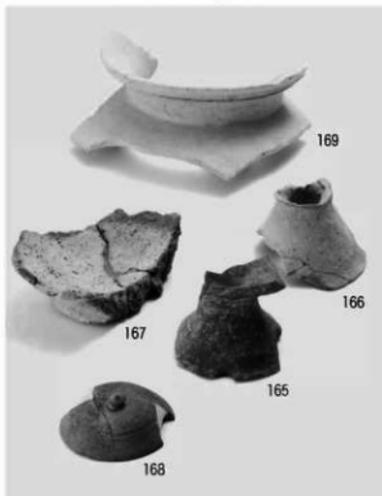
150

35号沟出土遗物(9)

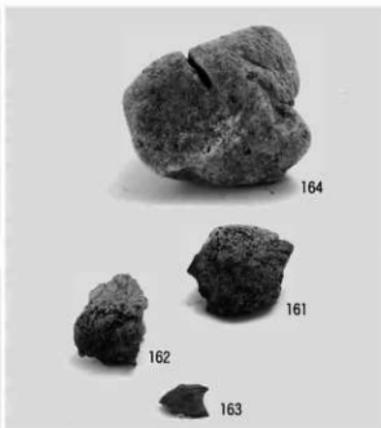


156

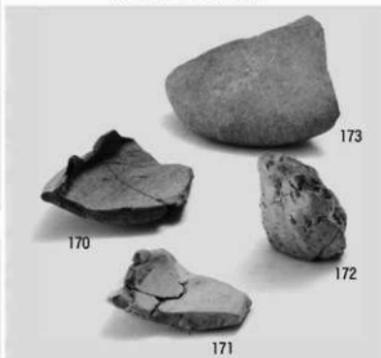
35号沟出土遗物(10)



5号沟出土遗物



35号沟出土遗物(11)



24号沟出土遗物

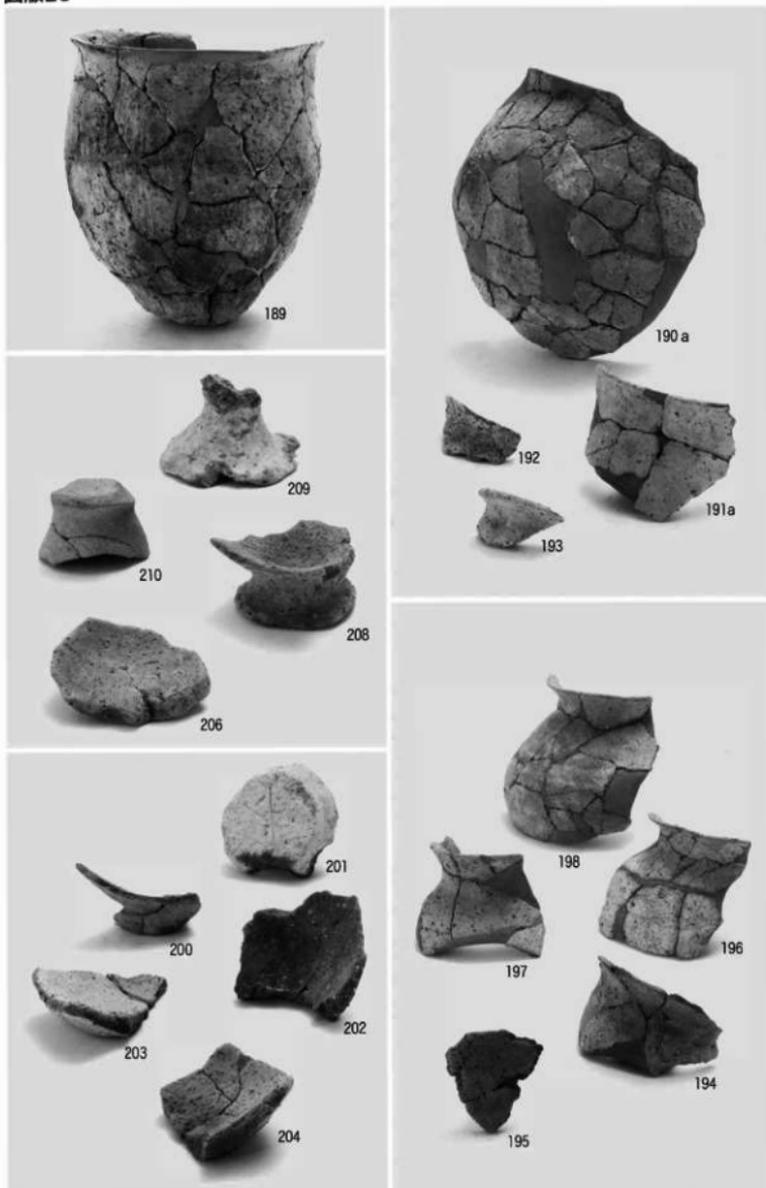


177

25号沟出土遗物(1)

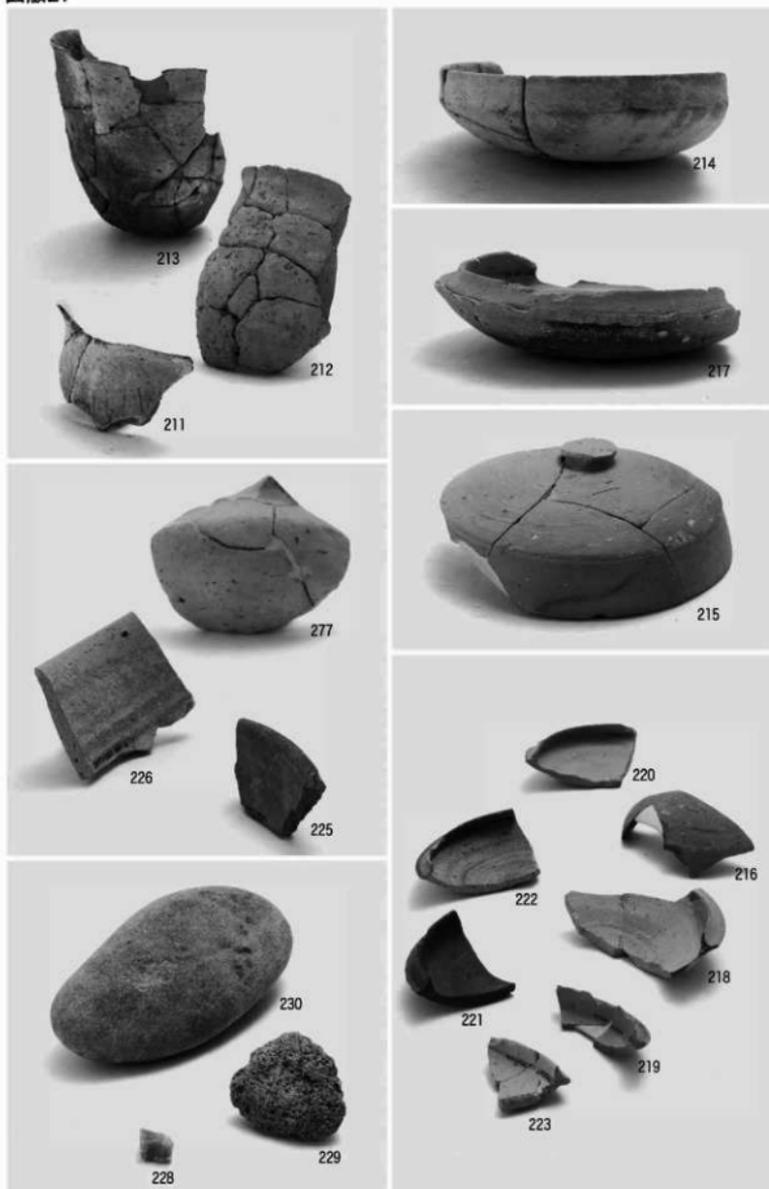


25号溝出土遺物(2)

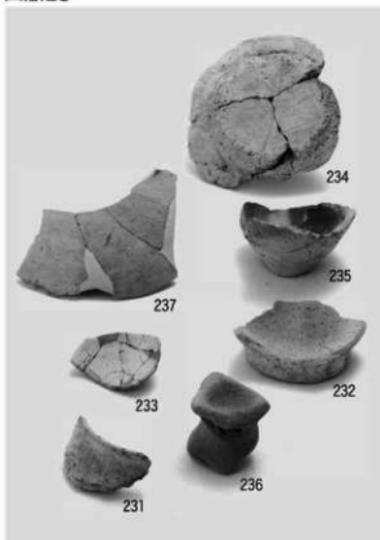


2号溝出土遺物(1)

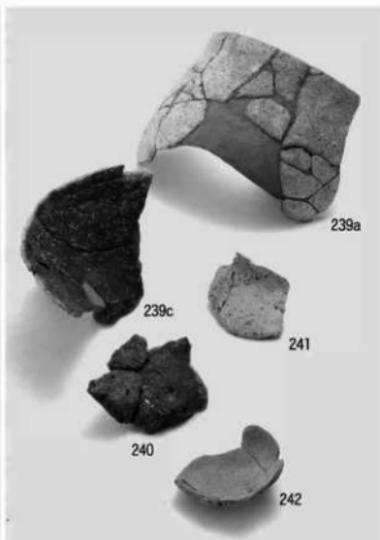
图版27



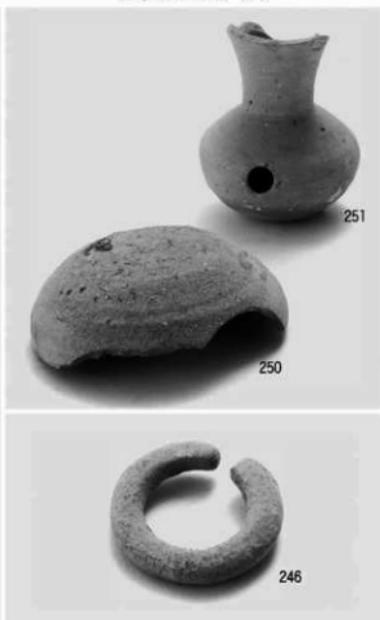
2号沟出土遗物(2)



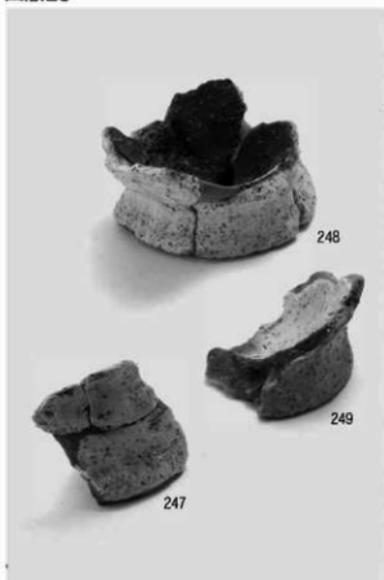
9号溝出土遺物(2)



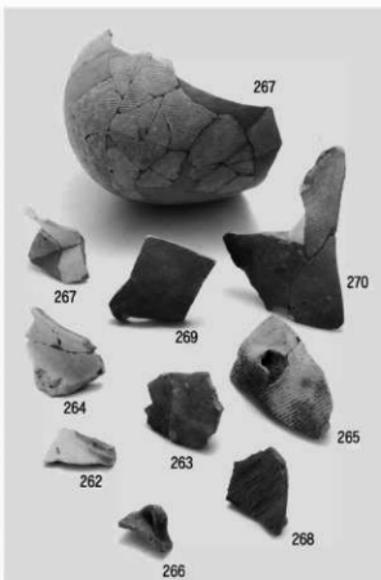
22号溝出土遺物(1)



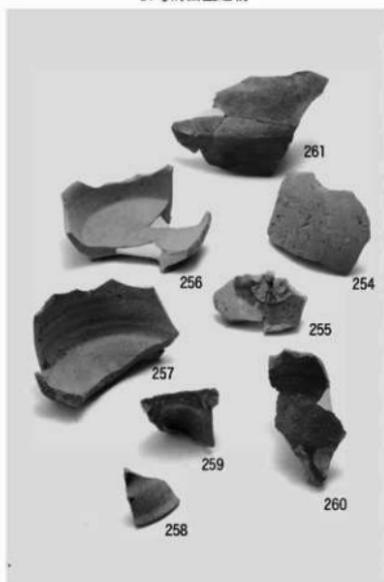
20・67号溝出土遺物



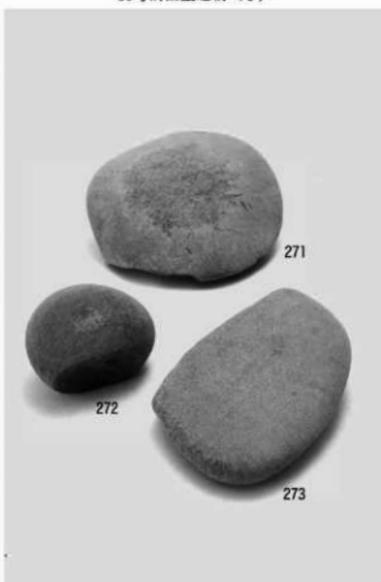
67号溝出土遺物



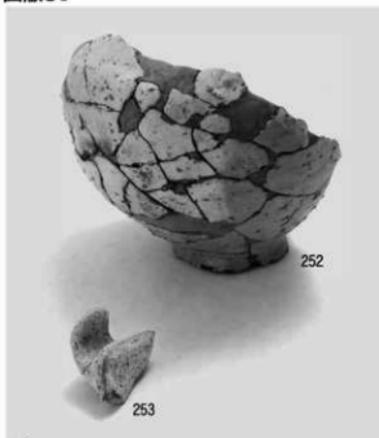
30号溝出土遺物(1)



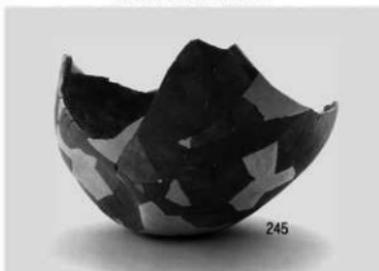
30号溝出土遺物(2)



図版30



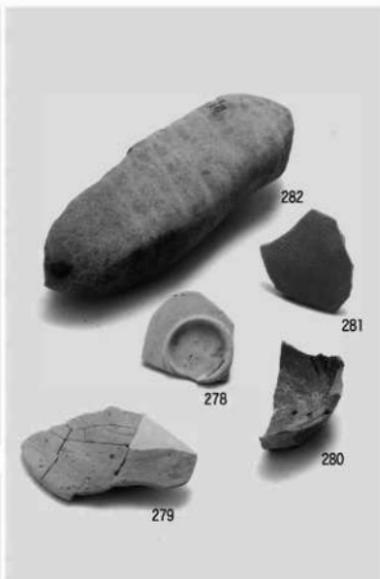
30号溝出土遺物(3)



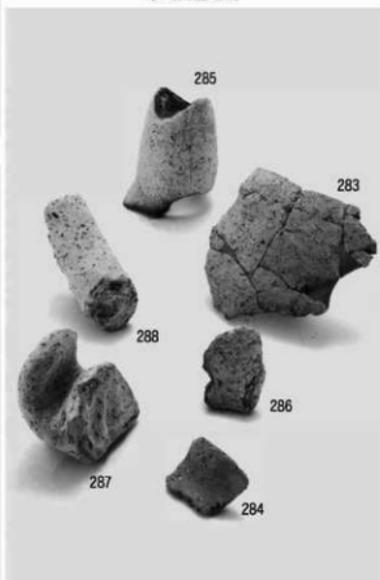
22号溝出土遺物(2)



33号溝ほか出土遺物

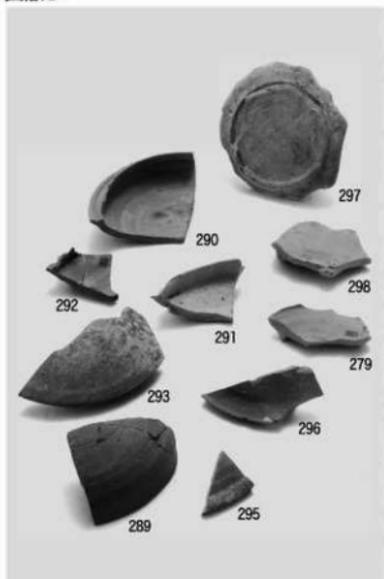


小穴出土遺物

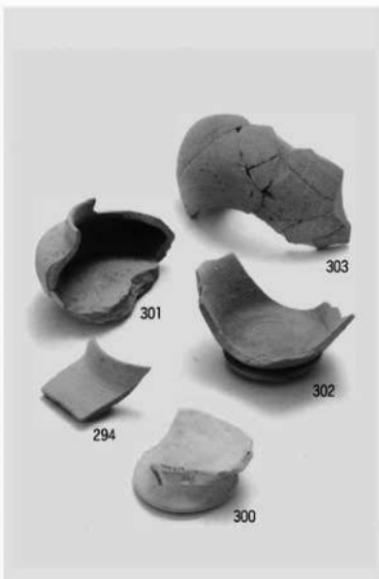


包含層その他出土遺物(1)

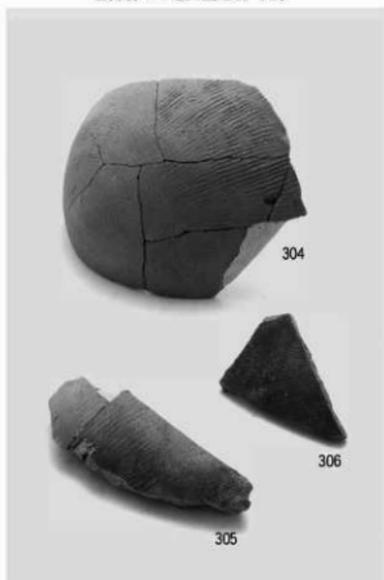
図版31



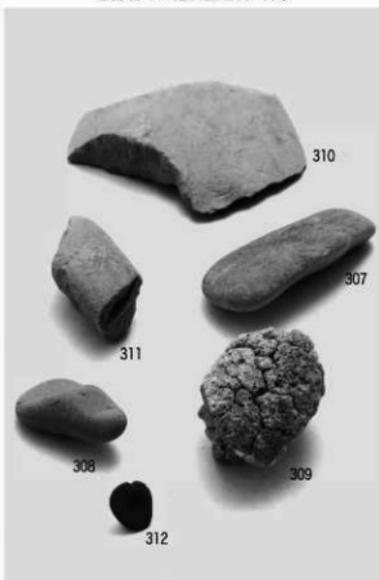
包含層その他出土遺物 (2)



包含層その他出土遺物 (3)

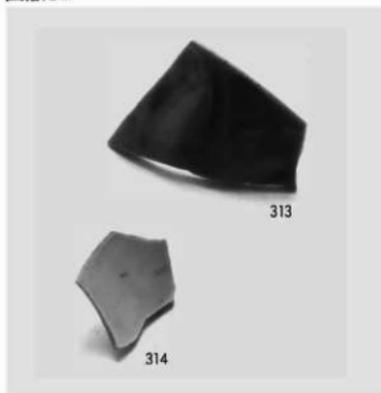


包含層その他出土遺物 (4)



包含層その他出土遺物 (5)

図版32



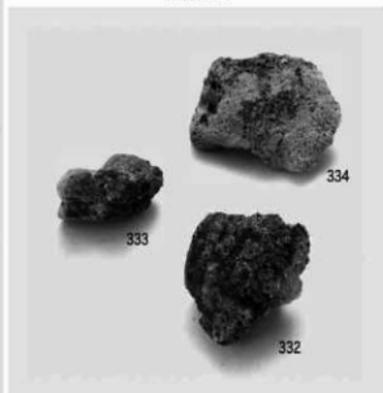
中世の遺構内出土遺物



出土石器



中近世の出土遺物



出土羽口(竈)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやがさこいせき							
書名	宮ヶ迫遺跡							
副書名	主要地方道宮崎高鍋線（那珂工区）道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第228集							
編著者名	山田洋一郎・吉本正典							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2013年 3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやがさこいせき 宮ヶ迫遺跡	みやがさけんみやがさし 宮崎県宮崎市 きどわらちようかみたま 佐土原町上田島 あびみやがさこ まつこ ぼ 字宮ヶ迫・松木田	45201	1017	32度 2分 5秒 付近	131度 24分 5秒 付近	2010.08.02 ～ 2010.11.12	2500㎡	主要地方道 宮崎高鍋線 (那珂工区) に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮ヶ迫遺跡	集落	古墳時代 後期～古 代・中世	竪穴建物 掘立柱建物 土坑 溝状遺構	3軒 13軒 17基 14条	土師器、須恵器、石器 耳環		総柱建物を含む 土器焼成土坑 粘土貯蔵土坑	
要約	<p>竪穴建物跡と掘立柱建物（総柱の倉庫と目される建物を含む）、土器焼成土坑や粘土貯蔵用の土坑など、古墳時代後期から古代にかけての工房的な機能を含む集落を検出することができた。遺構主軸から大きくは3時期にわたる変遷が想定される。また樹種同定や焼成土坑の放射性炭素年代測定分析を実施した。宮崎平野部において当該時期の集落跡は類例が少なく、倉庫を含む点は重要である。宮崎市教育委員会による隣接する調査箇所的成果を含めることで、より詳細な遺跡の性格が把握できるものと考えられる。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第228集

宮ヶ迫遺跡

主要地方道宮崎高橋線（那珂工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985 (36) 1171 FAX 0985 (72) 0660

印刷 株式会社ヒダカ印刷
〒880-0862 宮崎県宮崎市潮見町13-5
TEL 0985 (28) 4113 FAX 0985 (24) 8451

Miyazaki City

MIYAGASAKO Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center

vol.228

2013

Miyazaki Prefectural Archaeological Center